

つたあとであつた。松陰先生等二人の失望落膽はどんなであつたらうか。然し松陰先生は『計愈違て、志愈堅し、天の我を試むる、我亦何をか憂へん、遊生怒憤満面』と謂つてゐられる。『計愈違つて志愈堅し』これが松陰先生のいつもの覺悟であり、事を爲さんとさるゝ時の雄志であつた。松陰先生の眞面目がこゝにある。

十日には雨中來訪せる來原良藏、赤川淡水等と共に金川に出で濱屋はまやに宿して、相變らず薪水積み込みの便船を求めてゐられる。十一日十二日も同じやうな状態であつて、先生自らも『茫然として旅舎にて日を消す』と謂つてゐられる。松陰先生等焦躁の狀があり／＼と解つて來る。十三日に至り夷船は錨を上げて羽田沖に往くといふので、松陰先生もこれを追うて羽田沖に走つてゐられる。然るに夷船は引きかへして下田に行くといふので、松陰先生等も十四日保土ヶ谷を發し戸塚とがを経て鎌倉に入り瑞泉寺ずいせんじに投宿されたのである。

瑞泉寺は竹院上人の寺である。上人は村田右中の弟で松陰先生の母瀧子の叔父である、松陰先生も數度上人を訪ねられて禪機に觸れられ、大に悟を開き感化を受けてゐられる。『修身の工夫、死而後已の説などを聞く』と云つて感激されてゐるほどであつたことは既に述べた所である。處

がこの頃松陰先生舉動に何んとなく解し難い所があつた。そこで若しや海外出進の舉などあるのではあるまいかと憂慮してゐた兄の梅太郎は、この竹院上人に對し、若しや松陰が行くやうなことがあれば、それとなく十分言ひ聞かして頂きたいと、かねて報じてゐたのであつた。

十四日午後から細雨が降り出して、庫裡の裏の竹林が最早雨に寂しく暮れて來た。それとなく最後の暇乞をせんとさるゝ松陰先生の顔を、ほの暗い燈火に見入つて、上人は

先日梅太郎が來て云ふには、寅次郎には何か考へ計畫がある様子である。十分誨諭してくれとのことであつた。然し長男は家を護つて孝養を盡くし家職の御奉公が大事であるが、お前は次男であつて見れば、よしや吉田家を繼ひてゐるとは云へ、必ずしもそれには及ぶまい。まあ大志を養ひ雄略を樹て、お國のために御奉公するがよからう。

と口氣舌鋒鋭く、先生の肺肝をも裂くが如く言ひ聞かしたのであつた。松陰先生の心中や如何、先生は平伏して半言も發せず、たゞ聞き入らるゝのみであつた。

春とは云ひじよう、肌寒き雨に庫裡の夜はだん／＼と更けて行つたが、松陰先生は終夜寝られず、たゞ上人の眞心を感謝しつゝ、一言も航海のことなどに觸れずして、胸の涙を押へつゝ最後

の別辭を交はし、十五日朝雨中の鎌倉を發して藤澤に出で、酒匂川の出水に落ち込んだりして難旅をつゞけ漸く小田原宿に達せられたのである。これより愈々下田路に入られたのであるが、此等の關係は松陰先生自著回顧録に詳述されてある。

十六日、晴、小田原より左折して小路に入る、行こと二里、根婦川の關なり、言を託して曰、熱海に往て入湯せんと欲すと、關吏是を許す、又行こと五里、熱海に宿す、時に日尙高し、湯に浴すること數次、温湯沸出の處、驛中にあり、濃煙簇々、島原温山、信州朝間岳等と同じ、大島陸を離ること七里計、亦濃煙雲を凌て登る、熱海の湯鹽味甚烈。(小田原より下田に至るの間地名里程都て忘却す故に闕て記せず間々記する者も謬誤固より多かるべし)

十七日 晴、熱海を發し伊東に至り午食す、此地にも温泉あり、大河とか(地名慥かに覺えず)云ふ處に宿す、此日途中夷船二隻下田に向て駛るを見る、是れ金澤を發せしものなり。

十八日 晴、午後下田に達す、異船二隻下田の港口に泊す、是を土人に問へば、今晚來り繋ると、即昨日道上見る所なり、下田に宿す、已にして夷船更に進み、陸を離ること五町許に繋る。

十九日 晴、早起海濱に往て夷船を見る、是より日々の事悉く覺えず、一たび黒川嘉兵衛に面す、其用人藤田慎八郎慷慨善く談す、屢往て面晤す、佐倉の藩士木村軍太郎數夜同宿す、夷人大抵日々上陸す、三々五々相伴て往く、市街田畝遍からざることなし、薩人二人亦來り探問す、數々其宿する所を訪ふ、二隻船中漢蘭の語を解するものなし、故に幕吏輩皆其應接に苦む、因て遊生と謀る、今や書を授ずるも渠讀むこと能はず、且彼理の來るを待んと、是夜は下田に宿す。

廿日 晴、余疥癬稍發す、因て間を偷み蓮臺寺村に往て温湯に浴す、村は下田を去ること一里にして近し、是夜遊生は下田に歸る、余は村に宿す。

廿一日 朝遊生蓮臺村に來る、是日彼理其他の將來る、哺時、村を發し海岸に往き、夜五ツ時まで徘徊して夷船夜間の狀を察す、下田の前宿に宿す。

廿二日 朝昨日木村軍太郎亦同宿に來宿す、云ふ昨曉七ツ時舟を浦賀に發し、夕七ツ前下田に著すと、昨夜より附啓中の横濱海岸云々を改て柿崎海岸云々に作り、本書附啓各一通を淨寫し、遊生と各一通を懷にし夷人の上陸を待て是を與んと欲す、是日吾等二人木村と柿崎海岸に往て

夷船を観る、美斯西悉比（火輪船也）岸を離るゝこと一町許、尤も近し、又一町、許鮑厦且船（火輪船にして彼理の乗る所）を泊す、其他次を逐て泊す、前二隻と連て六隻なり、木村精工の千里鏡を携ふ、船上を見るに夷人正に測量をなすものゝ如し、又脚船を卸し各船相往來す、又檣上種々の彩旗を升降す、一船先づ擧ぐ諸船皆擧ぐ、一船先づ卸す、諸船皆卸す、蓋亦號令約束をなすものか、午後脚船を發し海岸石上へ白粉を點し、又白旗を樹上に縛す、亦皆測量の用に似たり、如是者日々然らざることなし、是夜蓮臺寺村に宿す、澁生下田に宿す。

廿三日 雨、朝蓑笠を借り村より下田に歸る、澁生迎へ説きて曰、昨與木村一飲、談防寇の事に及ふ、木村論する所國體を顧みず、賊勢を養ひ和親通市を以て策の得たるものとす、僕憤怒に堪へず、但其相知未た久しからざるを以て是を恕するのみと、余曰渠亦鐵中の錚々采、葦采、無_レ以_レ三體、一笑して止む、澁生尙深く執て然りとせず、曰、世俗を惑すものは正に斯人の徒なりと、是日も木村と伴ひ夷船を見る、遂に同宿す。

廿四日 夷將彼理等下田の了仙寺に登る、黒川以下往て是を饗す、是日行囊を提げ澁生と同じく蓮臺寺村に往き宿す。

廿五日 夕七つ時村を發し海岸を徘徊し、夷船の狀を察し夜に至る、寒きこと甚し、下田町に往て餅汁を食ふ、策を決する、今夜に在る、故一書を作り下田の動靜を陳し、又三月五日江戸を發して以來の日記を合せ一封書を作り、江戸邸に達し家兄に贈らんと思ひ、船頭土佐屋に託す、土佐屋なる者は素吾周防の者、下田に往て人の養子となりし者と聞く、故數々往きて是を問ふ、但船に乗て奥州に往き、已に一年なれども未だ歸らずとなり、武山下海岸に露坐し夜八つ時に至る、夷船中時鐘を打つ、彼の一時は吾の半時、故に是を以て時を知ることを得、乃ら下田に至る、下田に一川あり、川中小船數多あり、因て是を盜て出んと欲す、但櫓なし、更に探索して二挺を得、乃ち舟に乗り流にそひ海に出づ、川口番船數隻あり、吾等心頗動く、因て澁生に謂て曰、番船覺して吾を捕るは天なり、天若し靈あらば決して覺せずと、已にして難なく此を過ぎ海に出づ、海波洶湧、櫓施し得ず、且下田岸より鮑厦且船に至る迄頗る遠し、事成し得難きを知り、舟を捨て岸に登り、後擧を謀る、時に天未だ明けず、柿崎辨天祠に入て一臥す、天の明るを覺えず、人來て祠戸を開く、吾等二人大に驚く、而して其人の驚くこと更に吾等よりも甚し。

廿六日 某村（村名已に忘る柿崎村東一山を越るの海濱村落なり）に往て漁家に入り朝食し又睡るこ

と久し、午食終り柿崎に至る、雨降り宿すべき所なし、某所（地亦柿崎に屬す下田に来る時經る所山坂上只一家あり酒食を賣て生とす）に往て宿す。

廿七日 此を發し柿崎に往く、幸に一夷の上陸する者に遇て書翰を渡す、又蓮臺寺村に往き入湯すること多時、七つ時村を發し是夜夷船に至る、謀る所成らず、其詳廿七夜の記に詳にす、故に茲に略す。

とあつて、松陰先生と金子重之輔との下田及蓮臺寺れんたいじに於ける行動の一切がハッキリと解つて來る。日夜の苦心の狀が讀者の胸に強く響ひて來る。その難苦辛慘の狀が眼前に迫つて來るかのやうな感がある。あゝ何たる勇壯の場面であらう。あゝ何たる悲痛の潜行活動であらう。幕末維新の變革はかうした尊き憂國慨世志士の聖血で築き上げられたものである。この維新變革聖血史をうけついで昭和維新の現代人に於て、どうして晏閑としておられることであらうか。夢寐むびにもかうした先賢志士の尊き血涙雄躍史を忘れてはならぬのである。

恨みは深し廿七日夜記

恨みは深き三月廿七日の夜。

松陰先生等が米船搭乗決行の最後の日である。

松陰先生等が大志雄略も空しく蹉跌失敗に終つたとはいへ、その至誠憂國の一念は日本國中を震動せしめ、また黎明日本の青年武士の意氣込を以て全世界の耳目を驚動せしめられた日であつた。當時の難苦狀景に付ては、その二十七夜記に詳述してゐられる。

三月廿七日

三月廿七日、夕方柿崎の海濱を巡見するに、辨天社下に漁舟二隻泛べり。是れ究竟なりと、大いに善び、蓮臺寺村の宿へ歸り、湯に入り、夜、書を認め、下田のやどへ往くとて立出で（下田にて名主夜行を禁ずる故一里隔て蓮臺寺村の入湯場へも宿をとり、下田へは蓮臺寺へ宿すと云ひ、蓮臺寺へは下田へ宿すと云て、夜行して夷船の様子彼是れ見廻り、多く野宿をなす）武山の下海岸に夜五つ過まで臥す。五つ過ぎ此を去り、辨天社下に至る。然るに潮頭退きて漁舟二隻共に沙上に在り。故に辨天社中に入り安寝す。八つ時、社を出で舟の所へ往く。潮進み舟泛べり。因て押出さんとして舟に上る。然るに櫂ぐいなし。因てかいを懷鼻禪にて縛り、船の兩旁へ縛り付け、漚生と力を極め

て押出す。禪たゆ帯を解き、かいを縛り又押ゆく。岸を離るゝこと一町許り『ミシッビー』船へ押付く、是までに舟幾度か廻り廻りてゆく。腕脱せんと欲す。『ミシッビー』船へ押付れば、船上より怪みて燈籠を卸す（燈籠は「ギヤマン」にて作る形圓き手行燈の如し、蠟燭は我邦に異ならず、但し色甚白く心甚細し）火光に就て漢字にて、吾等欲_レ往_ニ米利堅_一、君幸請_ニ之_一大將_一と認め、手に持ちて船に登る。（船には梯子ありて甚上りやすし）夷人二三人出來り、甚だ怪む氣色なり、認めたる書付を與ふ。一夷携て入る。老夷出て燭を把り、蟹文字をかき、此方の書付と共に返す。蟹文字は何事やらん讀めず。夷人頻に手眞似にて『ボウパタン』船へゆけと示す（「ボウパタン」船は大將べルリ乗る所なり）吾等頻に手眞似にて『パツテイラ』にて連れ往けと云ふ。夷又手眞似にて其の舟にて往けと示す。已むことを得ず、又舟に還り、力を極めて押行こと又一町許り『ボウパタン』船の外面に押付く。此時澁生頻に云ふ。外面に付ては風強し、内面に付べしと。然れどもかゝい自由ならず、舟浪に隨て外面につく。船の梯子段の下へ、我舟入り、浪に因て浮沈す。浮ぶ毎に梯子段へ激すること甚し。夷人驚き怒り、木棒を携へ梯子段を下り、我舟を衝出す。此時余帯を解き立かけて着居たり。舟を衝出されてはたまらずと、夷船の梯子段へ飛渡り、澁生に纜

をとれと云ふ、澁生纜をとり、未だ余に渡さぬ内、夷人又木棒にて我舟を衝退けんとす。澁生たまり兼ね、纜を棄て飛渡る。已にして夷人遂に我舟を衝退く、時に刀及雜物は皆舟にあり。夷人吾等二人の手をとり梯子段を上る。此時謂へらく、船に入り夷人と語る上は、我舟は如何様にもなるべしと。我舟をば顧みず夷船中に入る。船中に夜番の夷人五六名あり、皆或は立ち或は歩を習はず。一も尻居に坐する者なし。夷人謂へらく、吾等見物に來れりと。故に羅針等を指示す。余筆を借せと云ふ。手眞似すれども一向通せず、頗る困る。其内日本語をしる者『ウリヤムス』出て來る。因て筆を借り米利堅にゆかんと欲するの意を漢語にて認む『ウリヤムス』曰く『何國の字ぞ』。余曰く『日本字なり』。『ウリヤムス』啖て曰く『もろこしの字でこそ』又曰く『名をかけ名をかけ』と。因て此日の朝、上陸の夷人に渡したる書中に記し置つる偽名、余は瓜中萬二、澁生は市木公太と記しぬ。『ウリヤムス』携て内に入り、朝の書翰を持出し、此事なるべしと云ふ。吾等うなづく。『ウリヤムス』曰く『此事大將と余と知るのみ、他人には知らせず。大將も余も心誠に喜ぶ。但横濱にて米利堅大將と林大學頭と、米利堅の天下と日本の天下との事を約束す。故に私に君の請を諾し難し。少しく待つべし、遠からずして米利堅人は

日本に來り、日本人は米利堅に至り、兩國往來すること同國の如くなる道を開くべし。其時來るべし。且吾等此に留ること尙三月すべし。只今還るに非ず」と。余因て問ふ「三月とは今月より來月よりか」。『ウリヤムス』指を屈し、對て曰く「來月より」なり。吾等曰く「吾れ夜間貴船に來ることは國法の禁する所なり。今還らば國人必吾を誅せん。勢還るべからず」。『ウリヤムス』曰く「夜に乗じて還らば國人誰か知る者あらん。早く還るべし。此事を下田の大將黒川嘉兵衛知るか。嘉兵許す、米利堅大將連てゆく、嘉兵許さぬ、米利堅大將連てゆかぬ」。余曰く「然らば吾等船中に留るべし。大將より黒川嘉兵衛へ掛合ひ呉るべし」。『ウリヤムス』曰く「左様にはなり難し」。『ウリヤムス』反覆初のいふ所を云ひて、吾が歸るを促す。吾等計已に違ひ、前に乘乘てたる舟は心にかゝり、遂に歸るに決す。『ウリヤムス』曰く「君兩刀を帶るか」。曰く「然り」。『官に居るか』。曰く「書生なり」。『書生とは何ぞや』。曰く「書物を読む人なり」。『人に學問を教ふるか』。曰く「教ふ」。『兩親あるか』。曰く「兩人共父母なし」(此偽言少しく意あり)。「江戸を發すること何日ぞ」。曰く「三月五日」。『曾て予を知るか』。曰く「知る」。『横濱にて知るか』。『下田にて知るか』。曰く「横濱にても下田にても知る」。『ウリヤムス』怪で曰く

「吾は知らず、米利堅へ行き何をする」と。曰く「學問をする」と。時に鐘を打つ。凡そ夷船中夜は時の鐘を打つ。余曰く「日本の何時ぞ」。『ウリヤムス』指を屈して此を計る。然れども答詞詳ならず。(此鐘は七つ時なるべし)吾等曰く「君吾が請を聽ずんば其書翰は返すべし」。『ウリヤムス』曰く「置てみる皆讀得たり」と。余廣東人羅森と書き「此人に遇はせよ」と云ふ。『ウリヤムス』曰く「遇て何の用がある。只今臥して牀にあり」。余曰く「來年も來るか」。曰く「此より年々來るなり」。余曰く「此船又來るか」。曰く「他の船來るなり」と。歸るに臨み「我等船を失ひたり。舟中要具を置く、棄置けは事發覺せん、如何せん」と。『ウリヤムス』曰く「我が傳馬にて君等を送るべし。船頭に命じ置けり。所々乘行て君が舟を尋ねよ」と。因て一拜して去る。然るに「バツテイヤ」の船頭直に海岸に押付け、我等を上陸せしむ。因て舟を尋ることを得ず、上陸せし處は、巖石茂樹の中なり。夜は暗し、道は知れず、大に困迫する。間に夜は明けぬ。海岸を見廻れども我舟みえず。因て相謀て曰く「事已に至り此、奈何ともすべからず。うろつく間に縛せられては見苦し」とて、直に柿崎村の名主へ往て事を吾く。遂に下田番所に往き、吏に對し囚奴となる。『ウリヤムス』日本語を使ひ、誠に早口にて一語も誤らず。而して吾

等の云ふ所は解せざる如きこと多し。蓋し渠か狡黠ならん。是を以て云はんと欲すること多く言ひ得ず。(以下略)

とある。一讀後人をして涙を濺がしむるものがある。再讀懦夫を立たしむるものがある。嗚呼何たる残念悲痛のことであらう。

以上は、松陰先生等二人の下田踏海行動の概要である。この踏海遠遊の計畫は全く失敗の歴史であつた。しかし、これは新日本膨脹史の序幕の第一節を飾るものであり、また世界に對しては黎明日本の警鐘を轟かせたものである。従つて松陰先生一代の活動上、最も色彩あり、精光あり、しかも悲劇の伴つた實に英雄漢らしき勇躍の場面でもあつたのである。日本人には三百年曾てなき一大刺戟を與へ、また松陰先生の至誠憂國の切情が當時の怯懦なりし人心に一大挑發を與へたものとも云ひ得ることが出来るのである。更に世界の人々に對しては日本帝國青年の氣魄を示されて、日本侮るべからずとの強い印象を與へられたものである。即ちこの下田米艦事件こそは、まさに敗學の成功史ともいふべきものであらう。

嚴たり大陸・南進論

傳馬町獄に於ける象山との訣別

安政元年三月廿七日夜に於ける下田米艦搭乗事件は、空しく失敗に終つて、翌廿八日下田番所に自首して縛に就かれたのである。四月十日江戸より迎へに來た江戸八丁堀同心大八木四郎三郎・山本啓助の二人に伴れられて、十五日北町奉行に至り、直に傳馬町獄に下られたのである。續いて象山も連累者として捕へられ、師弟は互に獄中呻吟の身となつたのである。當時象山の言動としては

象山常に春秋の義(支那戰國春秋時代のこと)を引用し、城下の盟(城下まで攻めよせられて屈服すること)を以て、國の大恥と爲す、下田の議(下田米艦來航條約強要のこと)を聞き、愈々益々憂憤し、後、余の事に坐(累坐すること)し獄に下る。

と、後に松陰先生が云つてゐらるゝが如く、師も弟もたゞ至誠殉國の熱烈なる大精神を以て國難に當らむとしてゐたのであるが、今は互に幽囚獄裡の身となつて、たゞ法廷に於いて時に相顧みて默視心通するのみであつて、一言も交ゆることが出来ないとは、何んたる悲痛事であつたことであらう。象山は事によせて

語を寄す、吾が同門の士。

榮辱に因つて、初心に負く勿れ。

と唱すれば、松陰先生は

已に死生を把つて餘事に附す。

寧んぞ榮辱に因つて、初心に負かんや。

と和せられ、更にまた

圍碁失一着。圍碁、一着を失ふ

終爲全局累。終に全局の累を爲す。

世事正爾々。世事、まさに爾々（然りく）たり

憂之忽見逮。之を憂ひて、忽ち逮へらる

弟子甚粗暴。弟子（松陰先生の立場を言ひたるもの）甚だ粗暴

師亦逮其罪。師もまた其罪に逮ぶ

幽囚不見天。幽囚、天を見ず

荏苒日月改。荏苒、日月改まり

通古以策今。古を通じ、以て今を策し

審已且知彼。已を審にして、且つ彼（外夷をさす）を知る

萬願一不遂。萬願、一つも遂げず

何以經救世。何を以てか、世を經救（經世救國）せん

と賦してゐられる。その心情の熱誠さと公明さとを考ふれば、誰か感泣せざるものがあるか。また時々象山と詩を交へてゐるのであるが、言々血涙、句々痛憤、師弟の情義真に見るべきものがある。

俗吏暗事務。俗吏、事務に暗く

文法束縛人。 文法（文章法典で法律のこと）人を束縛す
國家多難際。 國家多難の際
失機果誰因。 機を失す、果して誰にか因る
俗吏疎人情。 俗吏、人情に疎く
發言忽怒嗔。 言を發すれば、忽ち怒嗔（いかること）す
志士苦心事。 志士苦心のことをば
茫然若不聞。 茫然として聞かざるが若し
人情隨遇異。 人情は、遇に隨つて（人情といふものは遇・不遇によつて時に異る）異り
事務逐日新。 事務は日を逐ふ新なり
今吾羅縲繼。 いま吾れ縲繼（捕はれること）に罹り
何曾憂一身。 何ぞ曾て一身を憂へん
唯願起俊傑。 唯願くは俊傑を起し
一揮清胡塵。 一揮して胡塵（外夷のこと）を清めん

尙又四月十九日江戸獄中より白井小助に送られたる書中に

佐久間翁隣牢にあり、時々聲音は聞え候へども、話も出來不申可嘆、僕一身不足言、翁は一時の人傑、空しく囚繫に陥ること、是れ亦僕が至らざる所、其罪不知所謝也○遊木生在遠牢、定めて無難と被察候、併果如僕之從容自得否云々

と云つて、自分の至らざる所より象山を獄に入れたことは、何としても相すまぬことである
と、男泣きに泣いてゐらるゝのである。象山も折にふれて前年の長崎行のことども思ひ出して
かくとしも知らでや去年の此頃は

君を空ゆく田鶴にたとへし

と詠じて先生に與へてゐる。げにや今の互の身の上は秋旻に横ふ孤鶴にあらすして、鐵窓に悲鳴する哀鳥であつたのである。

かうした師弟三人の思ひのつれ、悲憤慨嘆たる心の亂れ、哀痛憂苦の獄中生活も春過ぎ夏も去つて、その年の九月十八日斷罪の上、各々在所蟄居の命が下つて、先生等も象山と共に傳馬町を出で、東西に別れ、藩地に護送さるゝことになつたのである。その別れに臨みては、幕吏が兩

者を取り圍んでゐたので、互に一語をも交はさるゝことが出来ず、先生は、心中萬斛の涙に満ちて、只一禮して目送され、その儘盡きぬ思ひを残して別られたのである。

象山はこれより藩地松代に蟄居し、文久二年十二月に至る其間九ヶ年を過したのであつた。この幽閉中藩老望月主水の別業を借りて住居し、高誼園と名付け、又その二階の八疊の居間は好風景を一眸の中に聚むるといふので、聚遠樓と命名し、靜に思を鍊つて、多難なる國家百年の大計謀策に思案工夫を重ねてゐたのである。

松陰先生と金子重輔とは、一時毛利家の麻布邸に歸へられ、在邸六日、その月二十二日に檻輿同邸を發し、途中幾多の艱難に會し

『其寅等を護送するや、無狀特に甚し、曾て犬馬を以て見ず。』

とさへ云つてゐらるゝが如き、暴狀至らざるなき取扱ひに苦しみ、且つは憤られつゝ、師弟互に相擁して幾度か血涙をしばられつゝ、十月二十二日萩に着し野山の獄に入られたのであつた。

幽囚録の由來

そこで、これより論ぜんとする松陰先生の名著『幽囚録』は、安政元年十二月この野山獄中に於て書き上げられたものであるが、その執筆された由來としては、その春、江戸傳馬町獄で象山と別れた時に、象山が今回の下田一件に付ては、必ず後日のために書き留め置くべしといひ残したことに由るものである。象山も書き留め置くであらうが、自分もあの言葉が最後の訣別となつたわけであるから、是非當時の關係事状を書きまとめて、象山にも送り、また後世にも残さなければならぬとされたものである、安政元年十二月家兄との往復文書の中に

『先達より筆録致懸有之と申は此幽囚録の事か』と、梅太郎が問ひ合せてゐるのに對し先生は、是はもと獄中にて象山必作『斯記』と申し、又出牢の日叮嚀に申す、生前象山に逢ふ事も出来まじ、然らば此一言永訣なり、因て從其言作りたる耳、今三四枚あり、未だ成熟不仕候、以此因縁、頻に象山に示したし。

と答へてゐらるゝのであつて、先づこれを家兄、梅太郎に示し、更に玉木叔父に廻覽を頼まれたのである。

松陰先生は『幽囚録』を書き上げられた。これを是非象山に見せたい。それは我が罪に坐して

大志を抱きながら、空しく信州の山中に蟄居してゐる師象山に對するせめての心慰めであり、また弟子たるものゝ當然の責務であると感じられて、種々苦心考究の結果、恰度安政二年二月、先生の姻戚であり、門人である久保清太郎が江戸藩邸に行くといふので、これに托して象山の許に送り届けんとされたのである。しかし象山と云ひ、先生と云ひ、幽囚の身柄であるから、密謀を要するのは當然のことであつて、先生もこれには餘程苦心されたやうである。

肥生松田重助、是同志中の一傑なり、寅紹介して象山の門に入る、轟武兵衛是亦同志中の一敵國、老實ものにて程朱學熱心なる人なり、要之兩人とも君子人にて又密謀の出来る人なり、因云、幽囚録の事、もし御周旋被_レ下候はゞ御商議却て妙ならん、肥人等皆奸猾朋黨の中に苦しみて居候故、物毎疎脱、敗を取る事は少し、且貴兄より松田に示し、松田が處置に任せ候はば、兄與_二松田_一皆無_レ罪。云々

と云つて策を授け、久保に周旋方を依頼してゐられる。久保は江戸に出で種々工夫を凝らして奔走したが、當時象山は郷里に蟄居幽閉の身となつてゐるので、如何ともすることが出来ない。幸にも象山の甥北山安世（象山の姉の子、夙に長崎に出でて蘭學を修め、歸路萩に來り松陰先生と時事を談

じたことがある）の手を経て、始めて象山の許に達することが出来たのである。先生はこれが餘程氣にかゝつたと見へて

「幽囚録の事に付ては不_二一方_一御周旋被_レ下候趣、不_レ淺感抔仕候尙此上宜しく御願仕候。」と、久保に謝意を表して居られる程である。

象山は一々これに閱覽批判を加へ、その原本は自分の許に止め、別に北山に謄寫せしめて、再び久保を通じて、これを松陰先生に返送したのであつた。ところが象山の許にあつた原本は、その後估人の手に渡り、一時所在不明であつたが、三十七年の後、即ち、明治二十四年に會津の人で松陰先生舊知の馬島瑞園を経て、先生の嗣孫吉田庫三氏の手に歸したといふことは、何んたる不思議の因縁といはねばなるまい。

やむにやまれぬ憂情、大陸・南進謀略

生死存亡の岐路に立つ非常時局に對處せんとするには、尋常一様の思案工夫で出来るものではない。そこで熱血憂國の志士が斷の一字で非常手段に訴へて行く。ここに難局打破があつて、破

壞と創設とが併行して進む。これが更始一新である。

しかし、この非常行爲は往々にして一世の誤解を招き易い。しかもこの誤解が國民の士氣を阻喪せしめ、難局打破も更始一新も出來なくなつて、遂に現狀維持と因循姑息となるものである。

松陰先生の下田米艦搭乗事件は、確に國業を犯しての非常手段であつた。時人より見れば狂暴に等しき冒險的行爲であつた。しかしその眞意は宇内の大勢と諸外國の實情とを探知考究して、國難對處の國家百年の大計を樹立せんとされた、やむにやまれぬあの至誠憂國の熱情からであつた。この根本精神を釋明著述されたものが、この『幽囚錄』であることは既に説述した通りである。松陰先生はその序文に於て次のやうに謂つてゐられる。

國朝の變、蓋し三つあり、古昔は臣たらざる所あれば、海の内外を問はず（國の内でも外でも）東征西伐し、必ず強梗（強敵を征服すること）を鋤きて止む、其勢極めて盛なり、其後蕃夷悍然

（悍然は荒々しきこと。蒙古來寇をさす）來り侵し、しかして我は兵を發して殲（せん）（みなごろし）す、

古（昔の態）に非ずと雖も亦盛なり、今は則ち膝を屈し首を低れて、夷の爲す所に任す（米露來航の當時を指す）國の衰ふること、古より未だ曾て（是の如きもの）有らざるなり（中略）あゝ世

愈々降りて國愈々衰へ、衰へて已ますんば滅びずして何をか待たむ、然れども一治一亂は政の免れざる所、一盛一衰は國の必ずある所なり、しかして衰極りて復盛に、亂極りてまた治るは則ち物の常なり、況や皇國四方に君臨し、天日の嗣（皇統の永遠に連綿たること）永く天壤と窮りなきもの、安んぞ一たび衰へて復盛ならざること有らむや。（これが松陰先生の信念である）

近年來魯西亞・米利堅駭々（走る貌）として來り逼る、而して官吏苟且（一時の氣休め）して權宜（永久の事を考へずして一時のがれのことをする）處分す、是れ豈永世變すること無らむや、皇天わが邦を眷（か）み祐（たす）けたまはゞ、必ず英主哲辟（明哲の君主）を生み、（この世態を）一變して古の盛に復す者あらむ、是の時に當りては、萬國の情態形勢を察觀して、之に規畫經緯を爲すに、徒に圖を按じ筆を弄して空論高議するものは、因より此に與（あ）つたことを得ず、吾微賤なりと雖も、亦皇國の民なり、深く理勢の然る所以（一衰一盛のあること）を知れば、義に於て身家を顧惜し、默然坐視して皇恩に報ずることを思はざるに忍びず（これが松陰先生の眞精神・眞面目である）然らば則ち吾航海、豈已むことを得むや、今事蹶（つ）き計敗れ、退きて圖を按じ筆を弄して空論高議する者と流（う）れを同じくす（空論家と同様の人となる）何の羞恥（はぢ）ることか、これに尙へむ云々。

と云つてゐられる。これで下田踏海事件に對する松陰先生の眞精神が端的に理解さるゝと共に、この信念この覺悟この勇氣があれば、如何なる時難と雖も突破の出來ぬことはない。現代の超非常時に當つてもまさに然りである。松陰先生のあの至誠憂國の雄魂が永遠に活躍してゐるのもまたここにある。

しかし松陰先生がこの『幽囚録』を執筆さるゝに至つた動機誘因といふものが、たとへ象山の懲憑によるものがあつたにせよ、そも／＼松陰先生をして、事ここに至らしめた經過素因ともいふべきものは

- 一、曾て東北亡命遊の罪禍により藩籍を削られたる、その過を償ふべく、非常の功を立つるは士たるものゝ道であると考へられたること。
- 二、幕府に於て購艦の議が起り又海外に有爲人材を派遣せんとした時に、象山は松陰先生をその内に加へしむべく推舉したのであつたが、これは遂に實現するに至らなかつたのである。然し松陰先生はこの時より既にいつかは外航せんと私に期して居られたやうである。等であるが、更にまた松陰先生の學問的立場より觀るなれば

一、山鹿流兵學者として『上兵は謀を伐つ。彼を知り己れを知る。間を用ひて敵狀を先づ知る』と云つたやうな兵書の學問的信念の實際化。

二、松陰先生の得意の地歴方面よりするなれば、地理的には萬國の狀勢を精査研究するといふ學問的熱意と、史的には皇運の今日の衰體は、必ず一變して古昔の盛に復すべきが天理なりとされたるその自信。

三、學風的には、坐して空論高議せず、實行に移すべきであつて、進んで萬國の實情を視察して百年の大計を樹立せんとされたる至誠の信念。

これらの所信を以て斷然外航を企てざるを得ざるに決意し、敢然下田踏海の壯舉に進まれたものである。

そこでこの『幽囚録』中に現はれたる松陰先生の對外雄略ともいふべきものを、部分的に要約的に摘録して見ると、その根本理念としては

古昔、神聖(聖天子の意)常に雄略を存し給ひ、三韓を驅使し蝦夷を開墾し給ふ、もとより四夷(海外諸國)を包括し、八荒(八紘一字實現の意)を併合したまふの志なりき。

と謂つてゐられ、また

上世の聖皇、威は殊方（外國）を擗め、恩は異類（外國人）を撫でたまひ、英圖雄略、萬世に炳燿（かゞやく）す。而して其已れを虚しうして物を納れ、人の長を採りて己れが短を補ひ、彼の有を遷して我が無をみたしたまふ。

とも稱してゐらるゝが如く、我が肇國の大精神、八紘一字の大理想、尠なくとも上古に於ける列聖の皇謨國策を以てその根本理念とせられ、これを繼承して實現せしむるのが、我が國是であり國策でなければならぬと觀念されてゐる。そしてこれが實行具現に努力奮闘するのが大和民族の使命であり、時代々々の國民の義務であり、これが先達たるものが國土の重責であると信じて居られたのであつた。更に松陰先生は言を續けられて

神州の西を漢土支那となし、海中諸島（南洋諸島）及亞弗利加の喜望峰となす、近ごろ支那に英夷の寇（例の阿片戦争）あり、もし洋賊（英國等の外夷）をして支那に蟠居（はんきよ）（英米の勢力を支那に移植せしむること）せしめば患害言ふに勝ふべからざる者あらむ、察せざるべからず、且其廣東の市場と諸島・喜望峰とは皆萬國の要會（外國人の集まる要所なりとの意）たり、以て四方の新聞を

（外國の狀況を聞集すること）聞くことを得べし。

神州の東を米利堅と爲し、東北をカムチャツカと爲し、オコックと爲す、神州の以て深患大害を爲す所のものは、話聖東（米國のこと）なり、魯西亞なり、而してロシアの國都は海外萬里極西北の地に在り、其神州を謀る（ロシアの日本に手だしをする）に於ける、勢（地勢）甚だ便ならず、然れども其東邊は我と一水を隔つるのみ、若しそれをして兵足り、艦具らしめば（兵備擴充すれば）其禍固より踵を旋さざらむや。

濠斯多棟利の地は神州の南にあり、其地海を隔て、我と甚しく遠からず、其天度（緯度）温帯に在り、草木暢茂し、外人の争ひ取る所と爲るべし（天然資源あれば外國の植民地として争ふこと）英夷こゝに開墾して據ること、僅に其十分ノ一に過ぎず、苟に吾先づ之を得ば當に大利あるべし。朝鮮は滿洲と相連りて神州の西北に在り、これ海を隔て、近きものなり、而して朝鮮の如きは古代吾に臣屬す、之を古に復せざるべからず。

凡そ萬國の我が國を環繞するもの、其勢正に此の如し、而して我茫然として手を拱きて、其中に立ち、之を能く察するなきは亦危からざらむや。（現時に於ける英・米・ソ・蔣の包圍陣形と考へ合

せみるべし)

と、諄々として國民に教ゆるが如く説いてゐられる。しかも烈々熱火の如く憂國志士としての憤情を示してゐられる。そして松陰先生は常に『余を罪するものも幽囚録、余を賞するものも幽囚録、左子の春秋に於けるが如し』と謂つてゐられたのである。百年前において、かうした國策が實現せられ、これ等がいま我が勢力圏内にあつて、いはゆる大東亞共榮圈なるものが確立されてゐたならば、今頃日本はどうなつてゐることであらうか。樞軸外交も不要なれば、英米勢力撃滅問題もあるまい。恐らく日本は歐米列強に冠絶して、いまや全世界の覇者となつて、引き廻はしてゐるに違ひはあるまい。獨立濶歩、大手を振つて國際場裡の大主人公として對者を威壓してゐることであらう。

更に松陰先生は、當時の國防問題に言及されて

そもく皇和(日本のこと)の邦たるや、大海中に位し、而して萬國之に拱ふ(大に味ふべき所見である)凡そ地の勢、我に近きものは害を爲すこと切實なり、しかして遠きもの之に次ぐ、これ古今の通論なり、古、船艦未だ便ならず、海を恃みて險と爲せり、然るに後世船艦日に巧に、

航海日に廣く、古に恃みて險と爲せし所、今反つて賊の衝となる(日米關係に思ひ合はずべし)大輪の船作るに及びて、其制益々巧に、其行くこと益々廣く、海外萬里直に比隣と爲る、是に於てか、海を隔つるもの患を爲すこと急にして陸を接するもの是に反す。

と、我が國防性に對し憂國の警鐘を亂打されてゐる。明治以降に於ける日本の國難史を少し考へ合せてみるがよい。いまや朝鮮は合邦となり、滿洲は一心一體となつた。しかし支那問題の將來は未だ必ずして豫測を許さない。それに吾が國は、現在北には蘇聯といふ虎視耽々たる怪物が在り、西には英米支の共同抗戰が続いてゐる。更に東には太平洋を挟んで米國との一火爆發の危機が目前に迫つて來てゐる。かうした急迫危険な國際情勢を誘致したのも、もとをたゞせば、隣邦支那であつて、いはゆる『近きもの害を爲すや切なり』であり『支那に歐米の勢力を入れた』からであつた。四面環海の安全國防性が、いまは却つて危険國防となつた太平洋上の荒浪を顧みるときは、百年前に於ける松陰先生の警告的至言が盡く的中してゐるのではないか。いまA・B・C・D包圍陣を向ふに廻まして、一時に撃破突進するか、それとも各個撃破によつてこの國難を乗り切るか、要は國民の覺悟決心一つであるとはいひじよう、松陰先生のこの宏大なる抱負、深

遠なる識見、しかも具體的に擧示されたる深謀巧略に思をよすれば、唯々敬服するの外はないのである。

譯註幽囚錄

吉田松陰先生遺著

幽囚錄に就いて

この幽囚錄は吉田庫三氏著松陰先生遺著を始め、松陰全集卷壹に既に公刊されてゐる。(拙著に譯註幽囚錄なるものなり)殊に吾(著者)師故安藤紀一先生の訓註幽囚錄なるものが存してゐる、従つて今日それ以上に訓註を試みるの必要はない。しかし漢文力の衰へてゐる現代青少年の間に於ては、これを以て尙難解とする向がある。この讀解至難の故を以て、これほどの名著がやゝもすればそのままにされてゐる傾向のあるはいかにも残念の極みである。そこで自分は原文を可成現代的時文に譯し書き直し、あまり現代人の關心を引かないやうな箇條を隨所に於て削除することにした。これは松陰先生に對し甚だ敬慕の念を缺くことであつて遺憾至極と思つたが、多少考へにあつたことであつて、敢て寛恕を求めて置く。その代り隨所に於て割註を施し、或は原意を損せぬ程度に於て讀み流しやすく改め、更に非常時日本の現狀に鑑みて私見をも加へて置いた。また現時の國際情勢にもとづいて、松陰先生の國際對策關係等をも照し合せ、讀者をして古を今に引きかへして、松陰先生の至誠憂國の一念と、その遠大深謀の雄略とを可成深く把握せしめんと試みたのである。従つて本譯註は幽囚錄の忠

實なる訓註ではない。又原文そのままの註解でもないことを告白して、豫め讀者諸彦の了解を敢て望むのである。

尙幽囚錄中の骨子は本著の隨所に於て既に部分的ではあるが、摘録し論じて置いたのであつて、重複する箇處も相當にあるわけである。しかし松陰先生の國內體制に關する政治論や、對外關係たる大陸・南進政策ともいふべきもの、更に現代的に觀るなれば大東亞共榮圈確立の理念と、その具體的事案とは、この『幽囚錄』一冊の中に大體まとめ論じて居られるが故に、敢てこゝに全文的に再掲私解を試みたのである、讀者に於て此邊の關係に付ては特に寛容を願ふと共に、その隨所々々の神髓に付ては讀者各々の理念によつて靜思精研独自の批判工夫を巡らされんことを望む次第である。

幽 囚 錄

(括弧内、著者の註)

吉田松陰先生遺著

外寇(外敵の來襲)の患は古(代)よりこれあり、而して世々能將(智能の將相)あり、

機に應じて掃蕩（打ち拂ひ除くこと）し、大害を爲すに至らず（かの元寇の役に於ける北條時宗の如きを思へ）近時に至り西洋の諸夷（歐米諸國）かはるがはる來りて通信通市（通信貿易）を求むるも、これ亦未だ大害を爲すこと能はざりき、嘉永六年六月、アメリカ合衆國の軍艦四隻相州浦賀に來り、國書（國王の信書）を幕府（徳川）に呈して切に要求する所あり、その大要も、また通信通市の二事にあり、故事（幕府在來の法度に於ては）に長崎を除く外には外國船の來り碇泊することを許さず、故に浦賀奉行（幕府の役人）説諭するに國法（前の故事を指す）を以てす、夷（米使ペルリ）の曰く、我は吾國命を奉ずることを知るのみ、何ぞ日本の國法を知らむと謂ひて倨傲（たかぶりあなどる）益々甚し（米使ペルリの恫喝外交と共に其の無禮なる驕慢の態度憎むべき也、現時の日米交渉亦然りとなす）執政（幕府の政務に當る人即ち老中職）過激（彼を忿怒せしめての意）せしめて事變を生ぜんことを慮り、浦賀奉行に命じて假に其の國書を受けしむ（我が國力未だ不振なりしによるとは云へ幕府要路に偉才なく其の軟弱外交實に切齒せしむるものあり）ペルリ諾否の報を求むること甚だ急なり（其の不

遜なる脅迫的威壓態度は米人の常なるか）遂に明年更に來ることを約せしめ、慰諭（なぐさめきとす）して去らしむ。

是より先き數年、米人小船に乗りて蝦夷（北海道地方）に來り、陸地に徘徊す（米人の横暴常にかくの如し）松前侯（福山の城主）之を捕へて長崎に檻送す（快事々々、日本武人の氣概を示すに足る）是の如きこと凡そ二たび、浦賀に來り、長崎に來り、漂民を我に送り還し、薪水を我に請ひ求むること又しばしばなり（これ何れも老獪なる米國の我が國狀偵察にして現時のスバイ行動なり）其の我を間諜（スバイのこと）すること蓋一日に非ず、去年（嘉永五年八月）に及びて蘭夷（和蘭人）合衆國使節來航のことを報ず（和蘭人自國に利せんがために、米國人の來邦を内通せるもの、外人の心理皆かくの如し、古今相同じく少しも油斷の出來ぬものなり）幕府深く之を祕して敢て中外に知さざりき（かくの如き祕密外交では國民の承服する筈がない、而かも現代に於て此の種の弊なきや否や、噫）是に至りて（嘉永六年六月をさす）事倉卒（俄に事が起りての意）に出で衆情（國民憂懼憤怒の情）甚だ騒し（一國外交の要路にあるもの深く意を用ゆべき也）。

私話

(一) 米國の恫喝外交

ベルリの侵略的來航と、その恫喝外交によつて日米兩國の國交關係は開かれた。爾來八十有五年、米國は機會ある毎に脅迫恫喝と高慢なる侮辱的態度とを以て我國に臨んで來た、かの移民法案や如何、かの東洋門戶開放機會均等の提唱や如何、更にワシントン會議や九箇國條約は如何、近くは貿易通商上の諸壓迫や如何、更に現時の國交繼絶の經緯や如何、實に我が國民に對する無禮は到底私共の忍び得ざるものがある。

昭和十四年六月二十八日、ルーズベルト大統領は突然日米通商航海條約を一方的に廢棄通告を發して來た。これ程國際信義を無視した不遜な無禮はあるまい。理由の如何に拘らずこれ程侮辱的横暴な仕打ちはない。過去八十年間も日米兩國が納得して無修正でやつて來た上に、當時兩國々交關係は先づ無風状態と謂つてもよい位であつた。それにこの暴舉に敢て出て來たことは到底日本人の常識では考へ得られない所である。然るに、當時、我が當局の聲明を見れば、當分の間、米國方の出方を注視すると共に傍觀的態度を執るの方針であつた。而して一方米國側としては國際新情勢に基調を置く新たな條約を結ばんとするもので、必

ずしもそれ以上に日米關係を惡化激發することを欲しないと譎弄的な言辭を浴せてゐる。吾が當局としては、あまりに悠然と構へた無關心振りではあるまいか。自重的注視的に名を籍りて國民の耳目を蔽ひ、官僚的秘密外交で因循姑息な解決を告げられてはたまつたものではない。そこに於て既に國民の腹を固めておくの必要はあるまいか。殊に米國としては實に蟲のよい言ひ分である。餘りに日本をなめた仕打ちである。これで憤激しない國民は三等以下の劣勢國民であらう。

當時大統領の暴舉に對しては米國人間に於てさへも、次のやうに言つてゐる連中がある。大統領は威嚇と脅し文句で戰爭の勃發を阻止し得ると考へてゐるが、これほど危険な誤算はない。かゝる政策こそは米國が人命、財産、社會の一切を擧げて、一か八かの博奕に導くおそれが多分にある。

と、日本國民たるもの此の種の恫喝外交に縮み上つてたまるものではない。更に又今回の廢棄通告は大統領一個の專斷であつて、來るべき議會に於ては相當の紛擾を醸すことであらう。日本人も冷靜に注視して、さう焦慮するにも及ぶまいと評論してゐる一部米人もある。

元來正直一途の日本國民はこれを自己の純情に照らして眞面目にそのまゝ受け容れて、靜視傍觀の上、廢棄效力發生たる明年二月までの間に對米工作を施し、日米關係の整調を圖るべき寛容襟度を示すのが大國民たるの態度であるとなすの所論が、早くも一部有力識者の間に漸次擡頭しつゝあつた。しかしそれはあまりにも無能無策、不見識不甲斐なき因循糊塗な彌縫策ではあるまいか。そのみならず吾人の最も憂懼悲憤に堪へないことは、既にかうした米國の宣傳に魅せられて、大統領の專斷——米國民にも批難がある——經濟問題で政治問題ではない——改訂の用意は十二分にある……米國民の總意ではない。政治的意味は更になし。さすれば吾國民もさまで騒ぐにも及ぶまいと、はやくもかうした米國の宣傳戰に吾國民はうつかりやつゝけられて立つことさへも出來ない始末である。日英會談の眞最中に於ける米國のこの廢棄、從つて會談に於ける英國の硬化、これだけでも日本國民は餘程覺悟決心を固めなくてはなるまい(昭和十四年夏私記)。

顧へば日米八十五年間の歴史は米國の侮辱的威嚇恫喝外交であり、我國はいつも萎縮追隨の他動的外交に終始して、只事勿れ主義に孜孜と努めて來た脱帽外交であつた。これがため

には秘密交渉のもとに國民の耳目を蔽ふて知らしむべからずでやつて來た。現時に於ても然りであつて、曰く資金凍結令の經過、曰く太平洋問題の處置、曰く近衛メッセーヂの交渉等悉く比々然りである、兎角國際交渉といふものは強く出なければ到底まとまるものではない。今この一節を見るに、八十年前に於ける松陰先生の所論が、昭和維新のこの國難時に於ても全く同一の情勢であるとは、あまりにもなさないことではあるまいか。東亞新建設の雄志に燃ゆる現代國民は、先づ内に在てこの種外交の舊弊打破と共に、西海の兵火を顧みつゝ遠く眼を東に轉じて太平洋上の彼岸を睥睨しつゝ、荒れ狂ふ洋上の怒濤を征服すべき秋が、いままさに來たのである。

(二) **米國のスパイ政策** 世界大戰中列國が周密なる情報網を以て敵國をスパイしたことは、世人の記憶に未だ新たなる所である。獨逸人の情報は主として軍部關係機關によつて構成されてあつたがため、開戦後間もなく敵國のために妨害を蒙つて、眞の蒐集が思はしく行かなかつたことは確に敗戦の一原因であつた。これに反し英米側に於ては、主として經濟關係機關に張られてゐたがために、敵國の妨害を受くることなく開戦後はむしろ益々適確となつ

て非常な功を奏したと謂はれてゐる。敵國に活動したスパイが、血のにじみ出るやうな活動を残したことは、既に映畫や小説や手記等によつて世に吹聴せられ、これ等のスパイが本國に遞送した通信手段等は洵に至れり盡せりであつた。

現に米國の如き、最近に於てはあらゆる在留米人を動員して、あらゆる角度より日本の産業貿易の現勢内情を細密に調査せしめてゐる（軍事は余の知る所にあらず）インボイスの内容にまでも手を伸して偵知を進めてゐる。如何なる政府の保護政策をも彼等は十分に探知してゐる。而して本國への此等情報の結果が、ダンピング税の問題となり、高率關稅の賦課となり、商品や船舶の差別待遇となり、かくして貿易上の一大壓迫となつて遂に條約廢棄となつて來た。開放的にして正直性なわが國民としては、常にこれ等の諸點に細心の用意がなくてはなるまいと共に「外人を見たら悉くスパイと思へ」との俚言も敢て暴言として聞き捨つるわけには行かない。

この時徳川家慶薨じ、新將軍家定初めて立ち、水戸の老公徳川齊昭（老公これまで幽

居す）を起用して外寇を防ぐの議に參與せしむ、然るに小人比周（小人輩互に結合して）して公の議論行はれず、公連に罷めむことを請ふ（當時に於ける幕府狼狽の醜態と共に朝野騒然たるの状見るべきなり）幕府大に武備を修め、先づ大船の禁を除き（寛永十五年將軍家光の時の造船禁止令を解除す）蘭人に命じて車艦及汽船を造らしめ、浦賀與力（奉行に屬する役人）中島三郎助に命じて、洋書に依つて（洋書の翻譯によつて大船を造らんとする先人の苦心を思ふと共に當時に於ける科學日本の貧弱さ知るべきなり）軍艦を造らしめ、砲臺を品川に築き、大砲を櫻埒（江戸小石川）に鑄造し、伊豆の葦山の代官江川太郎左衛門坦菴（高島秋帆門人）を擢用し、高島四郎大夫（當時の洋學權威者にして洋式兵備を主張せる先覺者）の禁鋼を免じ、土佐の漂流民萬次郎（初め近海に漁し、風のために漂流して米國に至り、彼の地に住むこと十數年、よく米國々情を偵知し去年歸國す）皆之を江川の配下に屬せしめ、特に米國申出の顛末を列侯群吏（諸大名に廻附すること）に下して、其の復答（米國への返事の仕方）の方法を議す（幕府も餘程困窮したものとみえる、征夷大將軍の威信面目既に地に墜つ）。

時に天下久しく治安に慣れ、朝野苟旦かうしよ（一時の氣休め）の論多し（爲政者たるもの常に茲に思を致すべきである）群議或は戦を言ひ或は和を言へども（現時國際政局に於てもなほこの感がある）身を抽でて責に任ずるもの有ることなし（こゝが松陰先生のやむにやまれぬ至誠殉國の一念より出た所であつて、下田米艦搭乗事件も、要はこの重責に自ら進んで任ぜんとされたわけである。滅私奉公の大義心もこゝであり、日本男子の本懐もこゝである）某侯は奮然として復書（返事の書）を持ちて米國に到らむと請へども、幕府何等の應答指示を與へず（かくの如く幕府が眞先きに恐怖萎縮して因循姑息、既に米國に吞まれてゐては當時の屈辱外交も萬々致し方はなかつたわけである）。

私話

(一) 小人比周 今や國民精神總動員運動は津々浦々までも行き互つて、一億一心學國總親和が高唱されてゐる。然るに國民指導の重責にある政黨關係の相刺や如何、國難來の非常時局に直面し、何等の發言活動の見るべきものなく全く睡眠状態にあるのみならず、朝に黨利を争ひ夕に政勢を競ひ葛藤至らざるはなし、更に又現代社會各層を見るに、大小の別こそあれ、何れも相刺摩擦のなきものはない。これを以て東亞新建設の大業に當らむとす、實

に木によりて魚を求むと謂ふべきである。殊に我が國民性たるや一人成功すれば衆人これを扶けて大成せしむるの仁俠寛容なく、却つてこれを傷け倒して快哉となすの僻がある。願くは地下百尺の底に埋れて、名聞を求めず利慾を念とせず、友を助け衆を扶けて其の壮志を伸張せしめんとするの義人快傑を望むや切なるものがある。（昭和十四年夏私記）

(二) 身を抽て責に任ずる有るなし 松陰先生は曾て「尊皇々々天下豈一義卿（松陰先生の名）而已哉」と叫んでゐられる。乃公出でずんば蒼生を如何せんとされたる雄渾絶大な氣魄精神が後人を壓する感がある。従つて松陰先生は「六十四國は悉く墨夷に相成候共防長二國計は確乎として特立し、天下恢復撻伐の基本と相成候様にと同志と商議仕候」と謂はれ又「尊皇攘夷、人々之を言ふ、吾藩未だ一人死を以て之を爲すものあらず、豈大恥にあらずや、死すれば則ち義名朽ちず、死せざれば再學を謀るべし云々」とも謂つてゐられる。更に又「國の爲に死を致す、禍敗を避けず、利鈍りどんを顧みず、國家の士を養ふや二百餘年、一旦大事に遇ひ大節に臨み、一人として義に死するものなきは豈江家（毛利氏）の大耻ならずや」と絶叫してゐられる。この憂國の熱情、この殉國死の雄叫をよび、この一大氣魄があれば東亞新建設の國難

來も、さまで騒ぐの要はあるまい。而してこの身を抽^ひで、國家の重責を双肩に荷ひ敢然挺身して國難に殉ずる底の人物を要望するや又更に切なるものがある。

是の歳、ロシヤも亦長崎に來り、國書を呈して蝦夷の境界を議せむことを請ふ(日露の葛藤實に遠しといふべし、現時の滿蒙國境の紛争と併せ考ふべし)幕吏長崎に西下し夷將(ロシヤの大將)と商議す、而るに委任專ならず(幕吏の委任權限せまく、その一存に任せずとの意)能く其の議を決することなし、夷(ロシヤ人)再來を約して去る、明年(安政元年)正月合衆國の艦船九隻浦賀港に亂入し、直に横濱に來りて前年要求せし所の返答を求む、而るに我が國未だ軍艦、砲臺一も成るものなし(若し交渉破裂して戦争に及ば、敗戦明なる所なり、嗚呼國際間の交渉は武備の完成を以て第一義となす)幕府は専ら事變の生ぜむことを懼れ(嗚呼今日まで日米交渉の割合安全なりしは日本の事勿れ主義による叩頭拜伏外交のためであつた武備なき外交はかくまでもみじめなるものなるか)寛大をもて夷(米國人)を待遇せば、夷は却つて肆はしまに不法の事を爲し(弱みを見せればつき上るは米人の通有性か)官兵(幕府の兵)之れしも禁する能はず、人皆切齒す(米人の横暴かくの如くなりしか、國民の切齒扼腕するも當然なり)。

三月の半に及びて、米艦横濱を去りて下田に至り、市街にも山野にも徘徊あまねからざることなし(弱者と見くびつた米人の心情態度、天人共に許すべからざる所、昔も今も變らぬその横暴振り思ふべきなり)六月に至つて去る、事甚だ隱秘にして、世その故を識るものなし(國民の耳目を蔽ふ秘密外交は斷じて許すべきものではない、現代に於ても亦然りである)或は謂ふ、通信通市一に米人の求むる所の如くし、下田を以て互市場(貿易開港場)となし、米人に領事館を置くことを縦ゆるせりとの説をなすものあり。

私話

武備なき外交は砂上樓閣 外交は論議であり形式であり口舌である。巧に言ひ廻はしたものが勝利者となる。時には恫喝で成功を収むものもある。しかし國家の存亡、國民の生死を賭せんとする外交々渉は、そんな輕薄なものであつてはならない。従つて武力の後援なき外交は砂上の樓閣であつて、到底成功の見込みはない。國と國との論争、これが最後の解決は力である。しかしこの力は只に武力のみではない。天地に耻ざる正義の信念しんねんしよくに基く

國民總和の推進力に基點を置かねばならない。こゝに秘密外交の絶對的排撃がある。いはゆる松陰先生の「天下の事區々人巧にて成敗するものなし、殊に隱秘の事は却つて人を疑慮せしむ、正々堂々白中十字街を濶歩する」底の公明正大さがなくてはならない。一國諸政は國民と共にこの公正和協を以て百年の大計を樹立して行く。かくすることに於て國民の總力が發揚される。これが國力となり武力となる。この國民總合力が外交を押しして行く、泰山不動確乎不拔、如何なる國難をも乗り越し得るものである。今や我が國家はかねての覺悟通り英米佛蘇の包圍火中にある。この有史以來の一大危難を突破するには、一億一心、國民一致の總力體當りを以てこれに應處するの外はない。

初め平象山(たひらやうざん)(松陰先生の師佐久間修理)は松代藩(まつしろはん)(眞田氏)の臣なり、軍議官となつて藩軍に従ひ横濱に屯す、下田の議(下田を互市場となすの論)定ると聞き、謂おもへらく、下田は我が邦の喜望峰(きぼうほう)(アフリカの喜望峰の如く東西航海の要衝なりとの意)にして東西船舶必由(最も必要とする)の港たり、今夷に占據せられれば、その害言ふべからず、且大城江戸に在

りて人口衆多、米穀布帛(衣食の意)これを海運に資れり。不幸にして日米間に變あらば海路梗塞(ふさがる)して江戸第一に其の災禍を受けむ(現時の經濟封鎖なり、これを憂慮されて居る)。伊豆の州たる、天城山の險、その南北を隔絶し、而して下田はその最南端突出の處にあり。一旦事起りて陸路より兵を出せば、砲隊は險に阻たてられて以て行くべからず(陸戦はわれに有利なるも山險に阻てられて進む能はず)。而して海路は則ち我に堅艦なし(われより手も足も出せないとの意)。他日たとへ堅艦を造作することを得とも、夷に海陸の形勝(米國に地形上有利なる地點を占據されてはとの意)ありて、我は反つて之を失ふこと良計に非ざるなり。夫れ善く事を制するものは常に其の利をして我に在らしめ、其の患を彼に在らしむ(米國を制壓せんには彼を不利の地に置き、我を有利の地に置かざるべからずとなすものであつて、實に千古不易の兵理である。將來の太平洋上作戦に於ても此所に深き思を致すべきであらう)。若し已むことを得ずして敵人に地を假さば、宜しく他日の計(後日の謀計のために)を爲して海陸兩方面より兵を進むることを得る處を擇ぶべし(此等所論の可否に付ては、

今日自づと議論もあるべし。然し當時に於ける憂國志士の眞剣なる態度見るべきである。竊に横濱の地勢を覽るに甚だこれに稱ふ、且つ夷船をして常に横濱に在らしめば、江戸を去ること甚だ近ければ、則ち人々膽を嘗め薪に坐するの念（臥薪嘗膽、これが戦争への國民誘導の要諦である）自ら已むこと能はず（象山はさすがに一世の達識者である。人心の緊張結合を以て對外策の第一義となしてゐる）。警衛守禦の方も嚴ならざるを得ず、且つ親しく彼の長ずる所を觀れば、以て速に我の智巧（智識技術）を進むべし。これその利たる所以なり。今米艦下田に退けば則ち人心必ず弛びて、寇（外敵といふに同じ）や、遠しと謂はむ。殊に知らず夷船迅疾にして横濱に在ると下田に退くと、其の江戸腹心の憂（除き難き憂患）たるは則ち間髪を以てすること能はざることを知らず。横濱を以て直に互市場となすの愈れりとするに如かざるなり（憂國爲政者の思を致す所、まさに茲にありと言ふべし）。

私話

對外策は精神的武装 國家興隆の基は國民の精神的武装にある。勿論人口の多さを望み又國富の無盡藏なるを望む。しかし國家發展の基調たる國防にもあれ、産業にもあれ、

すべてに於て國防精神、産業精神と言つた國民精神力の旺盛熾烈如何による。物的完備はこの精神力の運営によつて始めて完全なる機能を發揮するものである。さすれば國家の重責に身を抽で、當らむとする緊張不拔の日本精神、これが即ち精神的武装である。國家はこの殉國大精神によつて、すべてのものを解決することが出来る。いまこの一節を見るに松陰先生は對外國策の第一義を國民精神不斷の緊張に基點を求めて居られる。實に千古の金誠といふべきであらう。

吾が師平象山、經術深粹にして、尤も心を時務に留む。十年前、藩侯執政（松代藩

主眞田幸貫の幕府老中たりしとき）たりしとき、外寇の議を上り、船匠砲工（造船鑄砲等の技術員）舟師技工を海外より備ひて、船を造り砲を鑄、水戦を操（練）し砲略を旨ふことを論ず。これ然せざれば外夷を拒絶し、國威を震耀（振ひかどやかす）するに足らずと、其の後遍く洋書を講究し専ら砲學を修し、事に遇へば輒ち論説する所あり（毎度此の説を主張せるなりとの意）。

象山曰く、方今の急務は元戎（砲隊の戦闘力といふこと）にあり、又自ら復答（返書）を持ちて米國に到らむと欲すと、則ち曰く、微臣（象山）別に謀を伐つ（兵書孫子に上兵は謀を伐つとあり、外交戦に於て必ず勝利を得て見せるとの意、其の氣概思ふべきなり、現代外交官果してこの氣宇あるや否や）あり、安んぞ風船に乗り聖東（わしんとうん）に下ることを得むと（風船にのりて太平洋を飛翔し米大陸を横断してワシントンに至り、外交工作を以てよく國難を打破せんとす、其の言や狂暴に似たりと雖、當時の憂國志士にはこれ程の雄志氣魄があつた。飛行機時代のいまの外交官と併せ考へて、感や果して如何）。

幕府蘭夷に命じて軍艦を致さしめると聞き、大いに喜びて曰く、徒に之を蘭夷に託するは未だ善を盡さず（蘭夷に命じて唯軍艦を購入せしむるのみでは最善の方法ではない）宜しく俊才巧思の士數十名を撰び、蘭舶に附けて海外に出し、それをして便宜事（べんぎこと）に従ひて艦を購はしむべし。是の如くすれば則ち往返（ゆきかへりの間に）の間に、海勢を識り操艦に熟し且つ萬國の情形（事情形勢）を知ることを得て、其の益たるや大ならむと。因

りて竊に建白する所あり（さすがに象山である、一石三鳥、而かも其の所論の實行的であり又その眞剣さを知るに足る）。然れども官（幕府）能く之を斷行することなし、予（松陰先生）の航海の志は實にこれに基きて決せり（松陰先生が長崎及び下田に於ける海外出遊壯舉の決心の程を明確にされたものであつて、この幽囚録を執筆されたる所以も、またこゝにあつたわけである）。

癸丑（みづのとらし）六月（嘉永六年六月）米艦の來りしとき、余（松陰先生）江戸に遊寓せしが、警（米艦浦賀入港の警報）を聞き馳（は）せて浦賀に至り、親しく米人の陸梁（亂れ走る貌）の狀を察して憤激に堪へず（米人の横暴常にかくの如きなるか）謂（おも）へらく、大懲創（こらしめる）を加ふるに非ざれば、則ち以て國威を震耀するに足らざるなりと（吾等の祖先は常にかくの如き憂國憤激を以て國難打破に當つて來た所である）。江戸に歸るに及びて、同志と反復論辨す。

是（これ）より先き、余（あつち）過ありて籍を削らる。（嘉永四年十二月藩許を得ずして江戸を發し、官部開職と共に東北地方の周遊視察を企てられ、爲に士籍を削られ謹慎の身となられたること）而るに官別に恩旨あ

り(藩主は却つて内諭して松陰先生に十年間諸國遊學を許さる、先生いたくこれに感激せらる)余深く自ら感奮し、謂へらく、恩を報ゆるの日至れりと(松陰先生一生の殉國的活躍も、これを端的に言ふなればこの藩主の知遇に感激されたからであつた。主恩に感激し國恩に感謝しつゝ一身を君國に捧げて行く。これが即ち眞の殉國日本男子であらう。然るに現代人に最も缺けたるものは、この感激感謝の一念であらう)頗る分を越ゆるの言を作り(身分をも顧みず借越の言を上るとの意)先づ將及私言九篇を著して竊に之を上り、尋で急務條議を上る(此等建白書は本著に於て既に詳述せり)。又夷人の向に不法の事多かりしを惡みて、接夷私議を作る。

是の時、幕府は夷書を諸藩に下して言路を開き(各藩に意見を求めたりとの意)余同志と議す、苟に二三の名侯(名藩主)心を協せ力を戮せ、正義を發し俗説を排(除)するこゝと有らば、則ち天下の論定らむと(天下の輿論を定め指導せんには敢て數の問題にあらずして質の問題なり)屢々之を藩の政府(長藩要路者)に言へども、政府は時勢を觀望して天下の大事は一藩の能く救ふ所に非すと謂ひ、吾黨の論を以て狂疎(狂暴疎略)にして事に通せ

すと爲す(先憂の士が敢て事を爲さんとすや、必ず此の種の誹謗を蒙る。而して廟堂の人々は多く自重に名を籍りて因循姑息遂に其の機を失ふ。草莽の臣は其の言動狂疎に似たりと雖も、やむにやまれぬ至情至誠に發し、而かも斷の一字を以て萬死國難に當る。爲政者の深く思を致すべき所なり)余象山に師事して深く其の持論に服し、事毎に決(象山の説によつて決心を定む)を取る、象山も亦よく余を視る(偉人の心情互に通ふものあり。而して松陰先生が自己の眞情を素直に告白して居られる所に、あの純情あの公正あの飾り氣なき素樸の性情が、よく現はれてゐる)常に余を勵して曰く、士に過なきを貴ばずして、過を改むるは固より貴し、善く過を償ふを尤も貴しと爲す(この言ほど端的に人の人たる道を表現せるものはない。大人と小人との別れ、至誠と不實との別れ、これが人間と非人間との岐路である。而かも現代人に於てこの弊や多し、三省せざるべからず)。國家多難の際能く爲し難きを爲し、能く立て難き功を立つるは、過を償ふの大なるものなりと云へり(國難來に當つては、この立て難き非常の功を立つることこそまさに男子の本懐)。

象山軍艦を購ふの説あるに及びて、余が決意に期す(象山が松陰先生の決意を期待するや

多大なるものありしとの意。幕府に於て或はこの舉（幕吏を海外に派遣して艦を購入する事）あらむ。自ら（松陰先生）請うて役（其の事に従ふの意）に従ひ、萬國の形勢情實を察觀するも亦過を償ひ恩に報ゆるの一端なりと期せり。然るに象山の説遂に行はれず、九月十八日（嘉永六年長崎行のこと）余江戸を去りて西のかた長崎に至る（露艦搭乗海外出遊計畫であつて、これは失敗に終つた）事意の如くなることを得ず、十二月季に及び復江戸に歸る。明年（安政元年）夷船の下田に在るや、余、藩人澁木生（澁木松太郎であつて金子重輔のこと）と竊に夷船に駕して海外に航せむことを謀る（これが有名な下田米艦搭乗事件）。事覺はれて捕へらる。

私話

嗚呼人生感激にあり 松陰先生があれ程の大活躍を試みられた源泉力といふものも、要は藩主の知遇に感激されたことが大いに預つて力となつてゐる。「狂夫之言」「愚論」「大義を論ず」等幾多の上書建白をなし、切實なる時事對策を論難されてゐるのも、全く藩主の知遇感激によるものであつて、藩主もまた松陰先生の衷情を察知されて「松陰には今後も

感ずる所があるなれば、隨時上書するがよい。押へれば却つて狂夫となるべし」とさへ、國老益田彈正に内命されてゐるのである。安政六年二月高杉に與へられたる書中に「萬々一にも、近年の内、君公御瀝世被遊候はゞ、吾輩の忠竭すべき所なし、小子、今、公様への忠心不能止は抑故あり、小子幼年より深く御知遇を蒙り、往年は御前會議にも屢被召出、親しく德音を伏聽仕、一々肺肝に徹し候、其の後感慨不能已事有之、亡命仕候處、後にさる人より承り候處、其の節（斯様の事御他言必無用）君公、國の寶を失ふたとの御意ありし由、一乳臭、國に何の損益あつて、かく難有被仰候事か、何共誠に忝く候へども、小生に於ては感激身に餘り、此の世に生ては居られ不申候、墨夷行（米國行）思立候處夫れも不遂、死もせず、剩へ昨年已來又々恩旨を蒙り候事どもあり、昨年より屹度志を立て、當御在國中には是非一死を遂げ、積る重罪の御申譯可仕と存候處又死にそこない、野山屋敷にて三度の食事衣服襟枕等事を缺き不申、最早御發駕も近く候へども、死すべき折も無之、加之世間は俗論の眞畫にて一事の快と稱すべきものなし云々」と謂つて居られる。松陰先生が感激の眞情を知ることが出来る。従つて松陰先生は曾つて楠氏一族湊川殉國を忍ばれて「生きて已を知る（知己）の

主に逢ふ、國事、力支へ難し、嗟、臣、死なんのみ、死の外なすべきなし」と一詩を賦して居られる。此の感激死が松陰先生の全幅である。松門同志が多く殉國したのも、この松陰先生の大精神を汲みての感激殉國死である。この感激性が人間の最高峰であらねばならない。而して現代人果してこの感激性あるや否や、多く論ずるに堪へざる所である。

余の西遊せしとき、象山亦その意を察し詩を作りて之を送る（前掲「之子有靈骨」之詩）。余捕に就きしとき、幕吏其の行装（旅装のこと）を收む（下田番所取調の時に行李を幕吏が取り上げたこと）。装中に其の詩あり、因りて併せて象山を捕へて江戸傳馬街獄に下す。余と金子生とも亦江戸に送られて傳馬街獄に下さる。三人吏に對して鞫（問）せらる。九月十八日官三人の罪を裁（判）して曰く、意（汝等の意圖はとの意）は國の爲にすといふと雖も、實は重禁（國禁）を犯す、その罪恕すべからずとなし、因りて皆國に遣して禁錮せしむ（象山は松代藩に、松陰先生と金子とは長州萩野山獄に送らる）。嗚呼余去年來謀りし所、上は國に忠ならず、下は身に名なく（名聲を掲ぐる程の功績を立て得ずなりとの意）辱しめら

れて囚奴となる。人皆之を哀ふ、士たるもの下才（才能の拙なきこと）を以て斯の世に生る（生まれ甲斐なしとの意）悲しいかな。

私話

自己反省即進境 此の一節の後段深く味ふべきである。天を怨まず人をとがめず、只自己の才なきを靜に省みて痛嘆してゐられる。これ程人間の奥ゆかしい尊いものはあるまい。實に松陰先生ほど眞面目な求道者はなかつた。その三十年の生涯を見ると、幾度か事志と違ひ、蹉跎もあれば不慮の失敗もあつた。しかし其の中に於て、猛然奮起しつゝ自ら強く凝視反省し、更により切實に思索熟慮を加へ、如何なる逆境難苦にあつても斷じて自ら棄てず、實踐に敗るれば更に反省してより高き實踐に生きんと努力された所である。この一筋なる求道的精神は憂國慨世の至情と渾然一體となり、感激殉國死へと進まれたのであつて、この反省の力によつてその全生涯を國と道とのために捧げ盡されたのである。

孫子（兵書）曰く、率然（神速にして理に叶へる勢）は常山（支那五嶽の一たる恒山）の蛇（善く兵を用ゆるものは譬へば率然の如しとあるによるものであつて、國防警備の終尾一貫、相互連聯應ずるの姿勢

にあるを云へるものなり、其の首を撃てば則ち尾至り（蛇の頭を打てば直に尾がはねかへつて來る）其の尾を撃てば則ち首至り、其の中を撃てば則ち首尾俱に至ると（若し將來日米間に事起るなれば我が帝國の地形體勢を考ふる時、まさにかくあらねばなるまい）夫れ神州（日本）は、東北は蝦夷に起り堰々委蛇（うねりく蛇の行く形）たり、西南のかた、對馬・琉球に至り、長さ千里に亘りて、廣さ（幅）百里に過ぎず（地形を論じたるもの）是れ常山の蛇勢に非ざらむや。然らば則ち外夷に對し首至り尾至ると豈其の術なからむや（松陰先生は日本の地勢を常山の蛇に喩へ武備を整へて首尾交應日本近海に來るすべての外敵を打ち拂ふべしとされたるものであつて、兵學家としての識見窺ふべき也、而して現時の吾が日米海戰術果して如何）。蓋し畿内（近畿地方）は所謂六合（天地四方）の中心にして、萬國の仰ぎ望む所、皇京の基萬世易ることなし（これが松陰先生の信念である、八紘一字の國是もこゝにあらう）。故に吾嘗て之が策を爲して曰く、京を去ること近くして、地たる便なる者（皇京附近の便利なる地勢）は伏見に若くはなし、宜しく大城を起して幕府（茲には朝廷の御役所の義であつて政府諸官衙の意）となし、以て皇京

を衛るべきなり（松陰先生は將來の大歐政策の關係上帝都を京都附近となすべしとの論の様である。實際現時の國是南北進論を検討すれば、思ひ半に過ぐるものがある。大東亞共榮圈確立のために奮闘しつゝある現代人に於ては篤と考ふべきである）。西に攝津和泉あり、之に備ふるに船艦を以てして山陽南海を制し、東に伊勢尾張あり、之に備ふるに船艦を以てして東海陸奥を制し、北に若狹越前あり、之に備ふるに船艦を以てして山陰北海出羽を制し、是に於て諸道を制するの本（基）立つ。諸道又備ふるに船艦を以てす。是に於て諸夷を制する具張る（これが松陰先生の國內的對策であつて、あの鎖國時代に於て既に海上制覇を以て國防の主體とされてゐることを知るべし）諸夷諸道より皇京に朝して幕府に覲す。（朝も親も人臣の君に見ゆること）首至るも尾至るも唯意の欲する所、以て進みて攻むべく、以て退きて守るべし（日本の中央に皇京を置き、大船巨舶を以て海上權を制し、若し外敵來襲せば東西兩面より之を擊破するの勢を示せば、外夷も自づと威壓懾伏されて朝廷に參朝すべしとされたるものであつて、その雄大なる識見想ふべき也）。夫の武藏の國、専ら海を一面に受け、三面皆山を控へ、一たび賊の爲に海を扼せらるれ

ば、海運之が爲に絶ゆるが若きに非ざるなり（松陰先生は當時既に海港封鎖、經濟封鎖を考へてゐられた）。

私話

(一)

國防は海上權の制覇にあり

松陰先生は世の所謂劍劇的攘夷論者でもなければ徒なる頑迷な鎖國論者でもない。尊皇國權論者でありしかも進取的開國遠航雄略論者であつた。只幕府違勅の結果、大義名分論よりして尊皇攘夷倒幕復古といふ聖火を吹き上げられたのである。こゝに松陰先生の日本精神が千歳に光を放つてゐる。今この一節を見るに敵國の内狀を知悉するにあらざれば、到底この急迫せる國難の對策樹立はできないとして、あの再度の國禁まで犯しての海外雄飛計畫となつたのである。従つて松陰先生は夙に大船巨舶主義を堅持して、皇國雄略の國是を樹てんと思念されてゐたのである。又西洋陣法をも取り入れて、步騎砲工の軍備を整へ或は築城要壘の改良修築を施し、以て夷國の戦法に應ぜんと主張されてゐたのである。これ等の所論も、現時より見るなれば或は兒戲觀（じぎくかん）の如き思ひがあらうが、あの封建鎖國當時に於て、これ程思ひ切つた主張は實に晴天の霹靂（へきれき）であつて、一世を

震駭せしめた所であらう。しかもこの間、松陰先生は日本古有の優點を活し採長補短に苦心してゐられる所であつて、現代人の如き盲目的翻譯注入ではなかつた、こゝにまた松陰魂が生々としてゐる。

所論はともあれ、要は維新開國當時における憂國の志士が、いかに眞劍に國難に對處し、心魂を打ち込んでの苦心であつたかと言ふことを如實に感得すればよい。而してその抱負の雄大、思謀の深遠、しかもその實行に當つては、熱と誠と斷の一字を以て、悦んで國難に殉じていつたといふことを知ればよい。現代青年に最も望ましきものはこの三大文字の實現である。

かやうなわけで、松陰先生の門下生にも、この方面の人材は出た。現に渡邊高藏翁（かうざう）（唯一の生存者にして九十八歳）の如きは、維新當時造船技術を英國に學び、歸朝後工部省に入り、後には、かの長崎三菱造船所の創建に當たられたやうな次第である。我國はいま忠勇なる無敵艦隊を有して太平洋上に飛躍してゐる。又世界有数の海運國となつて巨大の船舶を抱擁せんとする現時の海運界を思ふ時、實に感慨の深きものと共に松陰先生の一大識見只々驚服するの外はあるまい。

近世輿地(地圖)を論ずるもの、或は曰く、山東(關東)に非ざれば以て天下を制すること無しと、これ徒に平・源氏以還(このかた)衰世の跡を知りて、古昔神聖(聖天子)雄略の由(次第)を知らざるものなり(この一節深く考ふべきなり、松陰先生の主張は大陸政策と海外雄略である。これは日本の肇國精神である。これがためには帝都は伏見地方がよいとされてゐる。いまれを詳論せざるも現時の日支事變、南洋問題等を中心として將來の國勢を思へば、自から思を更に新にするものあるべし)。古昔神聖常に雄略を存し給ひ、三韓(朝鮮)を驅使し、蝦夷を開墾したまひ(上代にこの雄略あり、現代にこの雄略なし、何の頗あつて吾等祖宗に見えんとするや)固より四夷(海外諸國)を包括(まゐめて一くりにする)し、八荒(國の八方のはて)を併呑したまふ志ありき(現代人が事珍らしげに八紘一字の國是を高唱するは實におかしなものぢや、當時既にこの國是が實行に移されて實現してゐるではないか)。是の時に方りては、六合の中央をト(見定めて)して京(京都)を建て、畿(京を去る五百里以内をいふ、即ち帝都附近の地方の界を定む)を定むるに非ざれば不可なり(この一句閉却してはならない)衰世は則ち然らず(この一句最も味ふべきなり)其の志小に其

の略徴に、僅に六十州(日本國內だけとの意)を定むるのみ、故に山東八洲、沃野千里にして天府(天然の寶庫)の國、是に若くものなしとおもへり、噫、後世の人常に見聞に慣れて、非常に駭き、率然の勢を審にせず、亦何ぞ與に經營の略を講ずるに足らむや(松陰先生の一大識見、その雄略、その氣宇、その大志思ふべきなり、確に現代人はこの種の雄略大志が衰へて來た)。

築城の制大に變革あり、其の書荷蘭より傳はる、これにより鑿々(精細明瞭)として考ふべし(松陰先生は頑迷的排外論者ではない。寧ろ外國の文物を求めんと吸々としてゐられる、然しこれは探長補短であつて、日本精神はあくまで生かして行く、現代人の如く盲目的外國禮讚者ではなかつた。こゝが大切である)。然れども吾謂へらく、國に制を異にすることあり、人に新意あるは固よりなり(松陰先生は日本の姿を嚴然と見守つてゐられる、そしてそこに外國のものを取り入れて日本獨創のものを作つて行く、外國文化に對する國民の態度はまさに茲にあり、松陰先生はあくまで進歩的であつた)苟(まこと)俊才巧思の人ありて諸國を周遊し、名城堅砦を歴觀し、又彼の國の築城家と謂ふ所の

者と辯論講究して奥義を尋ね、然して後に其の法により、伏見の大城を起し以て諸道の模範と爲し、それをして漸次改範せしめば即ち可なり（松陰先生の變革は破壊にあらずして新建設のためである。世の革新家の考ふべき所なり）。然らずして徒に二百年前の遺制（残されたる制度）を恃み、以て夫の彈丸雨集の衝に當らむことは亦危からざらむや。大城の下宜しく兵學校を興し、諸道の士を教へ（あの封建時代に於て教育の普及を唱へ學校制度を主張されてゐる）學校中に操演場を置き、砲銃歩騎の法を習はし、方言科（外國語科）を立て、和蘭及魯西亞・米利堅・英吉利諸國の書を講ぜしむべし（松陰先生のこの進歩的しかも徹底的態度、讀者も驚くの外なし）。砲銃歩騎は吾國の古法に固より用ゆべきものあり、更に阿蘭諸國の法（制）を求めて其の未だ備らざる所を補ふべし（これが大切な所、松陰先生の精神はあくまで日本流である）。船艦の海國（吾國の如く四面環海の國）に於ける、之を獸に足あり、鳥に翼あるに譬ふべし、幕府癸丑の變（嘉永六年ペリ來航）に懲りて大船の禁を除きしは急務を知ると謂ふべし、然れども西洋の制未だ遽に得（知り得る）やすからず、洋書

に依り之を制すれば、形は恰も似たりと雖も施用は則ち違はむ（書物によつてその形式論は解つても實際運営上の妙術は解らないと、かうした徹底的實際的實行論が松陰先生の常論であつた）蘭夷に命じて之を海外に購はむとしても蘭夷は未だ速に報答せず、平象山、船匠（造船技師）を海外に備ふの説あり、又人を海外に遣はし便宜事に従ひて軍艦を購はしむるの説あり（之等の諸説は前に述ぶ）。この二説は並に當今の急務なり、然るに幕府未だ之を實行せず、今先づ一俊才を海外に遣し、船を造り艦を賣るの處を廉知（明知）せしめ、然る後に前の二説を行はゞ、事を擧げて敗墜（失敗）すること無きに庶からむ。

阿蘭の學（問）大いに世に行はる、然るにロシヤ・アメリカ・イギリスの書に至るては未だ善く讀む者あるを聞かず、現今諸國の船舶交わが邦に來るに、わが邦人其の國の言語を詳にせずして可ならむや、且技藝の流義、器械の制、諸國各新法妙思あり（各國それぞれ特徴あり）阿蘭人の譯文に就て其の概略を觀るべし、然れども何ぞ各その國書に就て之を求むるに如かむや（直接その原書に付て知るに如くはなしと實に松陰先生は用

意周匠の人であつた)。今宜しく俊才を各國に遣はして其の國の書を購ひ、其の學術を求め、因りて其の人を立て、わが學校の師員となすべし、又漂民のわが國に歸り、夷人の教化に投ずる者を求めて、之を學校中に置き、其の聞見知識する所を問ふは則ち益を廣むる方法なり、器械技藝、年を逐ひて變革す(世の文化は停頓せずして日進月歩の進展をなすものである。これに順應して行はなければ到底新時代に副ふ所以でないとして居られる。松陰先生は飽迄積極進取的である)。故に遠方遐陬(遠方邊陲の地)には往々舊式を執り、古法に泥みて頑鈍固陋なるものあり(之等は現代人より觀れば甚だ平凡なることなり、然しあの鎖國封建時代に於て從來の陋習を破り西歐文化を取り入れ、しかもそこに日本流を育て上げんとしてゐられる松陰先生の主張は只々敬服の外はない。加之現代政治家の如く大體的衷情論ではなく具體的實行案を指示してゐられる所に所謂松陰先生の實學的態度が現はれてゐる)。故に諸大名をして一萬石毎に才士一人を貢せしめ、海外に留學せしむること三五年、又巧思を出し新制を創むる者(現今の發明創案のこと)あれば、定員の外に之を貢せしめ、遍く其の傳を廣めしむるも亦益を廣むる方法なり、今の急務安ぞ此に過ぐる者あらむや。

り、今の急務安ぞ此に過ぐる者あらむや。

私話

眞劍なる松陰先生

松陰先生は忠君愛國の熱情よりして、あの潔白純眞の至誠一念を以て尊攘の大義を振り翳して勇往邁進されたのであつた。世間一般に見るが如き尊攘論者でなかつたことは既に述べた通りである。先生は當時の志士間に於て最も多く唱へられてゐた所謂鎖國的攘夷論者ではなかつた。寧ろ西洋文物をも日本流に取り入れての雄略的開國論者であつたのである。先生の持論は我國より推し開いて航海萬里遠略進取の國策を樹て、進むでは海外諸外國を壓倒せんとする底の開國積極論者であつた。外夷の恫喝的威嚇に畏縮して餘儀なく諸港を開き、通商互市に順應するといふが如き偷安忌戰の俗情による因循姑息開港論者ではなかつたのである。この點より觀れば松陰先生はまた國權論者であつて、國威の振張を期せなければ到底外侮を禦ぐことはできない。これがためには、今の憂ふべき國狀に鑑み、一旦外夷を排斥して、嚴然たる吾國威を海外に示し、然る後諸外國と對等、否、彼等を凌駕する諸條約を締結して大に海外に雄飛せんとされたものである。これには先づ朝廷

と幕府と公武一體の實を擧げ、三百諸侯は同心協力して、これに當らなければならぬと考へられたのである。然るに幕府は事毎に、外夷の恫喝に退讓し、遂に朝廷の勅命さへも奉ぜずして專恣なる振舞をなし、剩へ勝手に條約までも締結するに至つたので、先生の憤慨はその極に達し、これでは臣士の分として斷じて許すことはできないと、大義名分の上から、又國權維持の立場から、遂に大聲疾呼して尊攘倒幕の大義を鼓吹されたのである。當時における松陰先生の覺悟決心といふものは、

神州の積衰一朝一夕の故にあらず、しかのみならず、近日夷虜猖獗して皇威を屈撓し、而かも征夷諸侯を制すること能はず、茲に於て、私心慨然として曰く、攘夷の事、責、吾輩なり、已にして勅旨煥發……奉勅の責固より吾輩にあり……常に謂へらく吾れ同志と力を戮せ、心を協せ、正義を村塾（松下）に唱へ、以て國脉を培養し、天下を維持すべし、自ら信すること此の如し。

といつて、尊皇の事も攘夷の事も、すべて皆自己の責任なりと覺悟して積極的活動に乗り出してゐられる。この國事すべてを自己の責任なりと感念して、あれほどの熱と力とを以て

國難に對處せんとする國士、果して當代に幾人かある、大東亞新建設を以て自らの責任なりと自覺奮起せんものは、深くこの一句を味つてもらひたいものである（此等の關係を詳にせんとするものは拙著吉田松陰殉國詩歌集を參考されむことを望む）。

諸大名、京師に朝（朝覲）し幕府に覲（參覲）するに、皆船艦を用ゐて、海路よりすれば則ち將士海勢に習ひて、船具に虚套（眞似て作りたるのみにて實用に適せぬもの）なく、緩急（一朝有事の場合）用を爲すに足らむ、今朝覲の日（諸大名が朝廷に覲し幕府に參する時）諸大名皆船艦を用ゐれば、則ち東海陸奥の船、半は常に伊勢尾張（名古屋灣）の海にあり、山陰北陸出羽の船は半は常に若狹越前（敦賀灣）の海に在り、山陽南海西海の船は半は常に攝津和泉（大阪灣）の海に在り、以て京師を護り幕府を衛り、一旦外征には則ち數十の軍艦檣に應じて立ちどころに装艦し、其の便以てこれに尙ふ（優ること）もの莫らむ（現在の海軍鎮守府管轄地と併せ考ふれば實に感深きものあり）。

或る人は謂ふ（これは松陰先生の自問自答）東海東山の二道は、専ら諸大名往來の利を仰

げり（東海東山道地方は諸大名參觀往來のために利益を以て地方民は生活をしてゐる、いまこれを廢止すれば由々數社會問題を惹起すべしとなせるもの）今諸大名皆海路よりせば、驛馬遞夫（宿驛の馬や人夫）旅舍市廛（宿屋や小商店）一旦利を失ひ、群起して盜と爲らざれば則ち流亡して丐（こじき）とならむと（社會問題を起して遂には焼打ち事件ともなるべしと）吾謂へらく船艦の備は必ず積むに歲月を以てす、固より一朝に具ふべきに非らず（それには相當の歲月を要するものなれば急激なる變革は與へない、要は漸進主義で行くべきである）若し二道の民をして其の業を他に移さしめなば（現時の失業對策であり轉業問題である。社會問題の解決は漸進主義を可とし、これが最後の解決案をも考慮に入れて社會變革に當らむとしてゐられる松陰先生の精神がわかる）則ち固より盜と爲り丐と爲るに至らじ、況んや船艦備はるといへども、陸路行を絶つに非ざるをや（海路往來となれば陸路は自然に寂しくなるとはいへ、陸行が絶えるといふわけではない、寧ろ海運整備のために國內の繁榮と共に地方的にも榮えて行くであらうとの意を含む）。

そもく皇和（萬邦協和を以て國是とする吾大日本帝國）の邦たるや、大海中に位し（四面環海、太平洋の一隅に位す）しかして萬國之に拱ふ（萬國が吾國を取り巻き向つてゐる八紘一宇の國是もまたこゝにある）凡そ地の勢（吾國に對する諸外國の地形情勢といふものは）我に近きものは害（來襲の災禍）を爲すこと切實なり（この一段、うかうか見てはならぬ）。しかして遠きもの之に次ぐ、これ古今の通論なり、古船艦未だ便ならず、海を恃みて險と爲せり（軍艦の未だ發達せざりし時代は、海を危険視して四面環海の國は國防上大丈夫なりと思つてゐた）。然るに後世船艦日に巧に航海日に廣く（然るに船艦は異常の發達をして大船巨船となり又航海術も進歩し従つて航海場面も廣くなつて來た、況や飛行機時代に於てをや）古に恃みて險と爲せし所（海洋をさす）今は反つて賊（外敵）の衝（衝要衝であつて來襲攻撃の目標となると）此の一段を讀むもの、誰か現時の各國海軍々備擴張を併せ思はざるものやある而して海を制するもの即ち覇者となる）となる、火輪の舶（汽船軍艦）作るに及びて、其の制益々巧に、其の行くこと益々廣く、海外萬里直に比隣と爲る、是に於てか海を隔つるもの患を爲すこと急（現時に於ける太平洋問題を中心として米國海軍擴張案を思へば松陰先生の識見たるや實に大）にして陸を接するもの是に反す。

私話

(一) 皇 和 松陰先生は我が國家を表現するに「皇和」といつてゐられる。松陰先生の國體觀念はこの二字の中に悉く包擁されてゐる。讀者はこの皇和なる文字をうか／＼と見過してはならない。

元來個人に個性のあるが如く、國家にも國性がある。従つて國性を知れば自然にその國體は解つて來る。徳富蘇峰先生は、その昭和國民讀本中に「日本國性の神髓は我が國體の大和に因みて、和の一字である。所謂聖徳太子憲法の劈頭第一の文字「以和爲貴」の和である。和の一字は、之を擴充すれば八紘一字の皇謨となり、天業恢弘の聖猷となり、萬里の波濤を拓開し、國家を富岳の安きに置くの大詔となる。凡そ三千年來、歷朝の經綸一としてこの和の一字に基かざるものはない。和は決して柔弱ではない。和は所謂中和を致して、天地に位し、萬物育はるの和である。和は包容である。和は協同である。和は同化である。和は感化教育である」といつてゐられる。和の説明は遺憾なくこれで盡きてゐる。凡そ吾國三千年來の歴史も、詮じつむれば一のこの和の字に歸著するものである。松陰先生は皇和の二文字を以て、強く吾等に呼びかけてゐられる。その精神を現代爲政者に深く認識して戴きたいものである。

(二) 松陰先生は「我に近きものゝ害を爲すこと切實なり、而して遠きもの之に次ぐ、古今の通論なり」と看破されてゐる。明治時代における朝鮮問題や如何、大正時代における滿洲張氏父子の問題や如何、明治・大正・昭和、三代より尙現時における日支葛籐問題や如何、更にその間における蘇聯の鮮滿支を通ずる極東政策や如何、支那を中心とせる英國の權益問題や如何、米國の東洋門戶開放問題や如何、太平洋を挟みての現時の日米交渉問題や如何、過去を顧みつゝ數へ來れば如實に現實を物語つてゐる松陰先生のこの主張を無關心に閑却視することはできない。實に感慨深く過去の歴史を振りかへりみつゝ、將來の國策樹立と共に國民の一大覺醒を要するわけである。朝鮮は合邦となり滿洲は不可分一體となつた。然し支那問題の將來は未だ豫測を許さない。それに吾が國はいまや北には蘇聯と葛籐を生じ、西には英支の共同抗戦があり、東には遠く米國の重壓がある。而して此等の急迫せる國際情勢を誘導せるものは隣國支那であつて所謂「近きものゝ害を爲すや切實なり」の一句に盡きてゐる。英米蘇佛を向ふにまはし一時に包圍敵陣を突破するか或は各個撃破でこの國難を乗り切るか。この五箇年來未曾有の國難打開も要は國民の覺悟決心一つである。

神州の西を漢土かんど（支那）となし、海中諸島（南洋諸島及濠洲）及び亞弗利加の喜望峰となす（以下松陰先生は前述の地勢の近きものと海上制覇の外敵との關係に論及されたるもの）漢土は土地廣大民衆多し、それ其の海を隔て、近きものなり、近ごろ支那に英夷の寇（例の阿片戦争）あり、明裔の變（明の國王の後裔といふ長髮賊の亂をいふ）ありと聞く、もし洋賊（英國等の外夷）をして支那に蟠踞はんきよ（わだかまつてゐること）せしめば患害言ふに勝ふべからざる者あらむ（支那における英國の暴狀を思ひ又現時の日支事變に思ひ到り更に英國中心の國際管理案の如きを聯想すれば、松陰先生の識見只々驚服するの外はない。若しそれ當時に於て松陰先生の主張實現されたれば、現代日支事變の如きものも無かりしならむ）。然れども吾未だ其の歸着を詳にせず、察せざるべからず（察の字深く味ふべきなり、松陰先生は支那こそ日本の最も關心注視を要する所なりと警告して居られる。しかも現代の日支事變となつて來た）。且其の廣東の市場と諸島（南洋諸島）喜望峰とは皆萬國の要會（各國人の會する要衝なりとの意、松陰先生は南支の通商を廣東に求めしかもこの地方を以て南進發展の基地となさんとしてゐられる。現時世間で喧傳さるゝ吾國策たる南進論と併せ考ふべきである）

たり、以て四方の新聞（此の地方に勢力を伸して通商を交へ海外の狀勢をも探知すべしとの意）を聞くことを得べし。

私話

支那における英・米の暴狀 英國が、支那に喰ひ入つたのは阿片戦争の結果である。南京條約によつて治外法權を暗黙裡に認めしめ、これを根城とし、主として揚子江流域並に南支を中心にしてその勢力を扶植し、續いて機を見て北支方面にも手を伸して來た（斯様なわけで北支方面より英國を驅逐してもその中心は中南支であることを忘れてはならない）而して南支に於ては佛國と角逐して之を制壓し、北支に於ては北邊の露・山東の獨逸をそれ／＼巧妙なる外交手段によつてその南下を妨げ、以て中南支の絶對的地位を獲得したのである。更に現在では日支事變の渦中に投じて全面的に日本を抑壓せんとするのが彼の老獪なる援蔣行爲である。然るに、いまやまた米國がその英國に代つて露骨に魔手を支那で振ふ様になつた。近來米國の極東制覇コースはマニラを基點とする支那奥地支配權の獲得である。更にまた濠・西・地中海よりマレー・インド兩半島を含む全南方アジア資源地帯侵略へと發展せしめんとしてゐる。即ち

米國の重慶支配は各種借款供與によつて政治・金融・交通各部門代表使節の派遣によつて一應の成功を収めた様である。これに對し英國は阿片戰爭以來百年攷々として築き上げた勢力支配權を米國によつて肩替りしなければならぬ狀勢に立ち至つて來た。現に對日共同防衛の美名の下に香港・シンガポール・蘭印等の英國勢力打倒をやられてゐるではないか、利にさとい英國人にそれが解らないことはあるまい。さすれば早く米國と手を切つて極東の安定勢力たる日本の姿意要勢を確認して日本と共に東亞新秩序建設に助力するこそまさに英國人の取るべき手段ではあるまいか。敢て英人に一書を寄す。就いても東亞における英米の暴狀實に天人共に許すべからざると共に、衰滅國家の國民ほど實に悲哀なものはない。國民のすべては一切の私利私念を抛擲して國家興隆を専念しなければならぬ所である。(昭和十六年十月私記)

神州の東(松陰先生はいま迄は隣邦支那との國交關係と南洋を中心とせる南進論とを述べて來られた。今度は海を隔て、東方アメリカとの關係に論及されてゐる)を米利堅と爲し、東北をカムチャツカと爲し、オコックと爲す、神州の以て深患大害を爲す所のものは話聖東(首府の名を以て

國名に代用されたるもの)なり、魯西亞なり。(近世日本の國難史は米露なり、日清・日露の兩役や如何、日滿・日支の兩事變や如何、更に最近における米國の無禮極まる一方的條約破棄や如何、蘇聯の滿蒙國境戰や如何、思ふて茲に到れば、八十年前既に松陰先生は火急の警鐘を亂打してゐられる、噫)而してロシアの國都は海外萬里極西北の地に在り、其の神州を謀る(露國より日本に手出しをする)に於ける勢甚だ便ならず(日露戰爭における露國の敗因は確に茲にある。松陰先生の識見が當つて居る)然れども其の東邊は我と一水を隔つるのみ(これは日露關係のみではない。現時では太平洋問題を中心として、對米國防なり米國の挑戰的態度をも併せ考へて見るがよい。松陰先生は八十年前、既に今日あるを豫言警告してゐられる)且近頃火輪船にのりて、來りて國界を議し締交(通商條約)を求む、安んぞ之を遠しと謂ふことを得むや、其の事なくして今日に至れるは、其の地近しと雖も、荒寒不毛(寒くして草木さへも生ぜざること)にして兵寡く艦少きを以てなるのみ(これは主として露國側をいはれたるものであらうが、米國が既にこの手で來てゐるではないか)近頃はカムチャツカ・オコックに漸次艦を備へ兵を置き、隱然(祕密にしかも盛んに)として大鎮

(鎮は屯營又は守備をなすもの)と爲れりと聞く、若しそれをして兵足り艦具らしめば(兵艦の用意十分にできたなれば)其の禍固より踵かかとを旋まわさざらむや(軍備充實すれば必ず來襲すべきに付我が國は一日も早く軍備を整へて其の武力の均等を計り以て來襲に備へなければならぬと警告されたもの)。

私話

日米の經濟關係や如何

米國の傳統的恫喝外交に付ては既述した通りである。しかもその無軌道振りに付ては、到底吾人の常識的批判を許さない所である。一般世間では今回の一方的・抜打的・非友誼的・不遜無禮なる條約廢棄を以て政治的意味のものではない。東亞新事態に即應せんとする純經濟的のものであるといかにも大國民的襟度を示すべきものなるかの所論をなすものもある。然し東京日英會談の經過を見ると、明らかに英米間に於ては支那權益保全問題に付て協議が行はれ、一脈通ふものがある。さればこそあの英國の寢返りの逆襲非協調となつて會談は暗礁に乗り上げて來た。又最近に於ては米國の援蔣行爲たる銀五百萬元の買入れが傳へられてゐる。あの利に敏である米國人が日米通商關係の現實さに思ひ到らないことはないであらう。従つて今回の條約廢棄に付ては米人自體に於ても、左の

やうにいつてゐる連中もある。

日本は南米所在の十二箇國の合計と殆んど同額だけを、アメリカから毎年商品を買つてくられてゐる。世界中でアメリカから日本よりも餘計に物を買つてくれるものは、イギリス・カナダの二國のみであつて、日本は世界中で第三番目のよい得意である。日本は支那がアメリカから買ふよりもずつと餘計に買つてくれてゐる。一九三七年の日本との貿易はアメリカに差引八千四百萬弗を持ち込んでゐるのに對し、支那との貿易は差引五千四百萬弗の金をアメリカから支那に持ち込んでゐる。この利益な日本との貿易を犠牲にして、この不利益な貿易關係にある支那のために、日本と葛藤を起し得るものであらうか。その上、アメリカは生絲を日本から輸入することによつて年々九千萬弗を日本に支拂ふけれども、それを原料として造つた品物は、年々五億八千弗となつて世界中に賣れてゐる。そして、もし日本から生絲が來なくなれば二十萬人の失業者を出し、五億弗の工場を遊ばさなければならぬ。それは丁度極東への投資額の七分の五に相當する。アメリカは斯様な貿易上の利益を犠牲にしてまでも、戰爭に加はることができやうか、貿易は一國産業の血であつて

結論はいはすして明らかであると所論の結末は自づと明である。(昭和十六年夏)

然るに米國はあの不遜無禮なる態度を以て挑戦して來た。これに付てはいろ／＼の見方や理窟がある。東京日英會談に於て米國を袖にして日英が妥協することは、米國の面目にもかかり且又支那經濟支配權を日英に於て自由にせらるゝ懼れありとしての焦慮であるとの見方をするものもある。或は國內諸政策の行きつまり打破のカムフラージであるといふものもある。これ等の見解は吾等國民の關する所ではない。十人十色の理窟を列べるがよい。然し斯様な國際狀勢に於て、斯様な無禮非信義國家を相手にするには、吾國民としては須臾も右顧左眄してはならないといふことである。不動の國是をガツチリ把握して、堅忍不拔の大精神を以て、舉國一致これに對處すべしといふことである。これには國家として他國への依存外交は禁物であり、外國との依存獨立は眞平御免である。自國を待みて獨立獨歩、大手を振ふて自由に國際場裡を押し進む底の國力充溢と、國民の志氣とがなくてはならない。就いても日獨伊三國同盟論である。國民にこれだけの覺悟決心があるならば連結至極結構であらう。しかし同盟たるの故を以て獨伊に依存してはならない。飽迄自主的立場において同盟を適切

有效に働かすことを忘れてはならない。國家の安全は必ずしも同盟にあらずして、寧ろ他國に依存して國運を維持して行かんとする程危険千萬なものはない。否、自國を衰滅に導くものはこの外國依存の國民的墮落精神である。(昭和十六年夏所編)

濠斯多竦利おうすとらりやの地は(松陰先生は支那南洋を論じ米露を警告し、今や又濠洲方面を論じてゐられる)神州

の南に在り、其の地、海を隔て、我と甚しく遠からず、其の天度(緯度)正に中帶(溫帶)に在り、草木暢茂(のび茂ること)し、人民繁榮して外人の争ひ據る所と爲るべし(松陰先生は暗に外人の植民地政策を諷刺してゐられる)然るに英夷こゝに開墾して據ること、

僅に其の十ノ一に居る、苟に吾先づ之を得ば當に大利あるべし(英人の濠洲に據る未だ僅に十分ノ一に過ぎずして、十分ノ九は残されて居る。早く吾國民はこの地に進出し、その繁れる資源を活用しなければならぬといつて居られる。現時の日濠關係を思ふ時、吾等何の顔せかある)。朝鮮は滿洲と相連りて神州の西北に在り、これも亦海を隔て、近きものなり、而して朝鮮の如きは古代われに臣屬す、然るに今は則ち漸く倨れり、最も其の風教を詳にして(この句味ふべ

き也。松陰先生の深謀遠慮を知るに足る)之を古に復せざるべからず。

私話

(一) 安政日米條約に對する松陰先生の所見 安政三年七月、松陰先生は新入門生久坂玄瑞と國策樹立に關し種々討論を交へてゐられる。その一節中に「由來英雄豪傑の大事業を起さんとするや常に萬世の謀計を樹つる。それには先づ志を大にしその略を雄にし、時勢を察し、事機を審にし、先後緩急を見計つて、先づ國內を定めて人心の統一を計り而して後に國外に向つて謀を施す、いま徳川氏は米國と條約を結んだが、一度結んだ以上は、我よりこれを拒絶してはいけない。絶すれば信義を失ふことになる。されば或る時機までは、條約を守つてこれを巧に利用するに如くはない。それには、この間に乘じて蝦夷を開墾し、琉球を收め、朝鮮を取り、滿洲を拉し、支那を壓し、南洋印度に臨み、進取の勢を整ふべきである。その結果は延て退守の基となる云々」といつてゐられる。これだけでも現代人は少し恥しくはあるまいか。あの當時に、この國策が完成されてゐたなれば、日本人も今少しく、歐米人に比し優位を占めてゐたことであらうと共に、現代の様な苦勞をしなくてもすんだこ

とではあるまいか。伊藤公が日韓合併を無事に終へて始めて歸朝された時に、先づ松陰神社の神靈に「松陰先生多年の御苦心御宿望であつた朝鮮問題をいま伊藤が解決して歸朝いたしましたから御安心下さい」と奉告されたといふことも、まさに然るべしといふべきである。

(二) 残念なことあの濠洲 松陰先生は、既に濠洲に目を放つて、日本の資源地として利用厚生に生かさんと念願されてゐた。あの當時、若し濠洲が日本の勢力圏内になつてゐたなれば、現在の日本はどんなものであらうか。羊毛問題の如きは、更に念頭に置く必要はない。また、あの豊富なる資源が、この統制治下に於ていかに役立つことであらうか。しかも一大消費市場として日本の血となり肉となつてくれることであらう。せめて明治二十年代における濠洲日本移民だけでも残つてゐてくれたなればと、今更残念痛感の切なるものがある。

凡そ萬國の我が國を環繞(くわんけう) (周圍を取りまきめぐること)するもの其の勢正に此の如し(かく)の如く諸外國の狀勢に對應すべく國防計畫を樹立せよといふのが松陰先生の主張である。しかし我(われ)茫(まわ)然として手を拱(こまね)きて其の中に立ち、之を能く察することなきは亦危からざらむや

(この國難來、この危急存亡の秋、このまゝ茫然默視は許されまい。斷然海外に航し諸外國の狀勢を探知研究して、吾國防の確乎不動の大計を樹立しなくてはならぬと、あの燃ゆる憂國の至情よりして遂に長崎露艦・下川米艦搭乗事件を取行されたものであつて、身を君國に殉ぜんとするものは只斷の一字による) 夫れ歐羅巴の洲たる、吾を去ること甚だ遠く、古時は我と相通ぜざりき、船艦の便を得るに至るに及びて、ポルトガル・イスパニヤ・イギリス・フランスの如き、乃ちよく我(國)を朶頤(頭を垂れ動かして物を呑まんとすること)し、我も亦以て患と爲す、近時火輪の舶、國として之なきはなし、遠きこと歐羅巴の如きすら猶比鄰のごとし、然りと雖も、是れ特傳聞に得る所、文書の記する所、然りと爲すのみ、其の果して、然るか否かは遂に未だ知るべからず、安んぞ俊才を得て海外に遣はし、親しく其の形勢の沿革船路の通塞を察しむるに如かむや。

日升らざれば晨き(升るか晨くか、何れにか動くものであつて決して一時も停止するものでないとの意、次の二句も亦同意、これを文化的に見れば進むか退くかであり、國運的に見れば盛んになるか衰へるかで

あり、國防的に見るなれば喰ふか喰はれるかの問題であるとの偶意なり) 月盈たざれば則ち虧げ、國隆ならざれば則ち替ふ、故に善く國を保つ者は、徒に其の有する所を失ふこと無きのみならず又其の無き所を増すことあり(國家盛衰の天理にあり、爲政家の要諦は此の數語に盡く、心すべきもの也) 今急に武備を修めて艦略具り礮(砲)略足らば、則ち宜しく蝦夷を開墾して諸侯を封建し(諸大名に土地を分ちて統治せしむ、維新當時の北海道開拓の狀と併せ考へてみるべし) 間に乘じてカムチャツカ・オーツクを奪ひ(當時成功してゐたなれば現時の樺太問題や北洋漁業問題もあるまい) 琉球に諭して朝覲會同(事ある時に來朝するを會といひ、諸侯同時に朝するを同といふ) すること内諸侯(國內の諸大名同様にする)に比しからしめ(現時この説の通りになつてゐる) 朝鮮を問責して人質を納れ、貢を奉ぐる(貢を奉ぐる)こと、古の盛時(神功皇后當時の如く上古の盛事に復す)の如くせしめ(日韓合併後の現時を思へば松陰先生の識見や只々敬服々々) 北は滿洲の地を割き(日滿不可分の現状や如何) 南に臺灣・呂宋諸島を收めて(臺灣は日清戦争の結果、吾領有となり、いまや呂宋方面は吾南進の最中にある) 漸く進取の勢を示すべし(松陰先生の

南北進論想ふべき也、しかもその氣宇の雄大なる、その抱負の深遠なる、現時の日本國策と對照して現代人果して如何の感がある) 然る後、民を愛し士を養ひ、慎みて邊圉(邊も邊)を守らば、則ち善く國を保つと謂ふべし(此の一句が大問題ぢや、これが國家興隆の基であつて爲政者の能不能もここにあり、而して國民の自覺も亦茲にある)。然らずして徒に群夷爭聚(外敵紛争の間)の中に坐し手を揺すことなく(國民は偷安苟且してゐてはならない、宜しく國民は憂國振作活躍的であらねば何事もできるものではない)、而して國の替へざるものは其幾くかあらむや(國家の衰ふるは當然也)。

私話

(一) 後世の人少しは恥しくはないか 日清・日露の兩戰役は、明治時代における吾國民の苦戰奮闘史であつた。しかしこれがために東洋一隅の島帝國は一躍して世界列強に伍するに至つた。日清戰爭の結果として臺灣は領有となつたが、一面には三國干涉のため遼東還附の苦杯をなめた吾國民には未だ血涙の新なるものがある。臥薪嘗膽、十年後の日露戰爭は六千萬民の生死存亡の岐路であつた。しかし天祐愈々厚くして、日本は再躍して世界的

に飛躍する運命を開かるゝに至つたのである。その結果は樺太の南半を得て、近くはオコック・カムチャツカと接し、遠くは米大陸を望むことになつた。その後日韓は合併せられ、關東州は租借地となつて日本の大陸政策の基地が築き上げられたのである。而して滿洲國の獨立と共に日滿一心一體不可分の盟邦ができて今やわが皇威は支那四百餘州の山河に旭光を投じてゐる。滿蒙國境硝煙腥風吹き荒ぶとは云へ、何れは近く御稜威に靡くことであらう。又廣東・海南島・新南群島の占據と共に近く呂宋南洋諸島を睥睨して南進基地をも築き上げられた。かく觀じ來れば、この八十年間における日本國民の奮闘史に敬意を表すると共に、松陰先生のこの雄大なる對外國策に對して自ら省みて少々耻入る所である。實に松陰先生こそ、吾國海外進展雄略の豫言者であるといはねばなるまい。

(二) 民を愛し士を養ふ 松陰先生は、豊公の朝鮮征伐に對し「豊公は稀世の英雄であり、その雄略は感服するの外はない、然し、かれ豊公は徒に武力のみを頼みて徳化を知らざりしために、あの征韓雄略も遂に有終の功を收むることができなかつた」といはれてゐる。松陰先生は武力治安の實を擧ぐれば、宜しく徳化を以て宣撫鎮定すべきなりとされてゐる。即ち民を

愛し士を養ふを以て治國の要諦なりとされてゐる。「夫れ民を愛するにあらざれば民の歸する所を知らずして安業樂居の靜謐なく、士を養ふにあらざれば武備全からずして外敵の屈辱を蒙る。」と、いま吾國朝野協力、舉國一致、この理念を以て隣邦の宣撫に當らむか、支那四億民心を得ることも容易なるべく、かくして日滿支一體となり亞細亞の一大同盟を興し、以て徒らなる諸外國の窺ふ所を塞ぎ、共匪の來り亂るを絶ち、東亞百年の和平を築き上ぐべきである。

孫子、兵（戰爭のこと）を論ずるに、専ら彼（敵狀）を知り己（自國の狀勢）を知るを以て要と爲し（松陰先生は山鹿流兵學師家である。従つて孫子は先生の得意の一つである、敵・味方双方の狀勢を具に知つてこそ始めて適切なる對策が樹立されるものである）之を始むるに計を以てして曰く（かくして第一に遠謀大計を樹てる）主、孰か道ある（その上で彼我兩國の君主、何れが道義に厚いかを考へる、これ民心を如何に收め居れるかを知る）將、孰か能ある（彼我兩軍の大將、何れが能・不能なるやを知る）天地、孰か得たる（天の時、地の利何れがよいか）法令、孰か行はる（命令、何れが徹底し行き届いて居るか）兵衆、孰か強か（軍隊何れが強きか）士卒、孰か練れる（士卒の訓練何

れがよいか）賞罰、孰か明なる（功を賞し罪を罰すること何れが公正なるか）此等の事案を彼我對稱考究し、更に之を終るに、間（スバイの成否）を以てして曰く、明君賢將の動きて人に勝ち功を成すこと、衆に出づる（他人にまさる）所以は、先づ敵狀をよく知ればなり（これは豈兵事のみではない、人世萬事悉くこの心得あるものは勝利者也）。

近來諸夷の船競ひて我が邦に來る、然るに之を先づ知るものなし、是徒に彼を知らざるのみならず、亦己をも知らざるの甚だしき者なり癸丑の歲、合衆國より彼理を遣はし、ロシヤより博嬉を遣はして我が國に至らしめき、時に江都（江戸）の人或は曰く、近世海外に三傑あり、而して彼理・博嬉その二に居ると（この兩人を世界三傑中の二人なりとなすが如きは、餘りにも國民が海外知識に缺けてゐるではないかと松陰先生は大笑されてゐる）あゝ海外のこと茫然として辨することなく、適來り問ふ者あれば、錯愕（あやまり認めて驚く）畏縮して來邦するもの皆傑物なりと謂ふ、慨嘆すべきかな悲むべきかな。

私話

孫子は其の兵書に於て「兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察」と

謂つて居る、即ち戦争と云ふものは容易に手出しの出来るものではない、先づこれには「道・天・地・將・法」の彼我の關係をよく偵知見計つて謀策を樹てる、その上で更に前述の「主・將・天地・法令・兵衆・士卒・賞罰」等の何れが優劣なるやも探知考究の上、勝利の見込みある時に於て始めて兵を進むべきであるとなしてゐる。松陰先生の下田米艦搭乘一件も、要は此等の探知考究であつて、その上にて當時の國難對策を樹立せんとされたものである。斯様なわけで松陰先生は「古語にも戦勝は易く、勝を守るは難し」と云ふ如く、燕（支那の國名）を取るの難きに非ず、燕を守るの難きなり、但し民心を得る者は善く守るを得なり、然らずんば亦運而已矣、然れば大業を興さんとなれば、征伐の日にあらずして、昇平無事の日にあり、昇平無事の政、眞に民心を得るに足らば其の餘亦何ぞ多言せん、世の輕銳浮薄の徒、此の義を思はずして徒らに遠略に志すは吾甚だ懼るなり」といつてゐられる所であつて吾人の最も味ふべき所である。

軍に間（間諜であつて現時のスパイ）を用ゐるは猶ほ人に耳目あるが如し、耳なくば何

を以てか聽かむ、目なくば何を以てか視む、軍に間を用ゐるすは何ぞ獨り視聽せむ（敵狀の見聞は一切出來ぬなり、これでは戦争は出來ぬ也）我固より之を用ゐ、彼（敵）も亦之を用ゆるは軍の常なり、故に善く戦ふ者は、我用ゐるの至らざるを憂ひて（敵味方のスパイの活動不十分を憂ひて）彼の之を用ゐるを恐れず（味方のスパイがしつかり活動さへすれば敵のスパイなどは直に看破出来る所であつて別に心配する程の事はない）當今宜しく間を彼に用ゆべきなるに（いま日本は海外諸國にスパイを放つて大に活躍せしむべき秋なりとの意）其間牒のわが國事を洩さむことを慮りて敢てなさず（日本の間諜が逆に外國に通じて日本の實情を洩しては大變なりとしてスパイを用ひないが、これは畢竟幕府に於て間諜を使ひこなすだけの人物が居らないからであるとの意）。

然し彼（敵）間を我に用ゐるときは、我宜しくその間を留めて反間（敵のスパイを味方に利用して敵狀を知り或は敵を欺くこと）と爲すべきに、其のわが國情を窺はむことを懼れて爲さず、あゝ何ぞそれ惑へるや。

我實なからむか（わがすべての力が充溢して敵に乗せらるべき間隙なければ）彼に百の間ありと

雖も、亦吾如何せむ、却つて其の（敵の）心を攻め、其の謀を阻むるに足らむ、我慮ならむか（前の實の反對）彼一の間なしと雖も、我安んぞ永く存せんや（松陰先生は國としてのすべての問題解決は國力の充溢にありとされて居る所をよく見るべし、而して先生が再度の海外出遊敢行も、要はこの一節たる用間の二字に盡きて居る、而かも身を以てこの難關に當らむとされたる決心の程知るべき也）。

私話

松陰先生は、「孫子十三篇の終りである用間は劈頭の始計（前述の大計樹立の根本義）に相應じてゐるものであつて、孫子の本意は彼（敵）を知り己を知ることである。己を知ることとは隨處に於て論じてゐるが、彼を知るの秘訣はこの用間の外にはない。一たび間を用ゐて始めて敵情を知ることが出来、大計が樹立される、古より明君賢將は皆これを用ゆ、然るに當今これを用ゐず、漠然としてゐるのは甚だ遺憾なり」といつてゐられる。豈徒に松陰先生の當時のみならむや、現時の如き國際政局に在りては尙一層緊要なりとす、而かも果して實際用間に遺憾なきや否や。

通信通市（通信貿易）は古よりこれあり、固より國の稅政（悪しき政治）に非ず、但當今の勢（當時における日本の國狀及國際狀勢に於ては）力めて其の説を取らざるを得ざる者あり（外國の恫喝脅迫によつて通信貿易をなすが如き開國論は直に賛し得ざる也とされたるもの）古の國を建てし者は、徒に退守を爲すのみならず又進攻することあり（國家としては常に積極進取的でなければならぬとは松陰先生の持論也）而して國を越えて之を攻むれば（海外に兵を進むれば）財力疲弊して國用支へ難し（海外遠く出征して戦へば戦費多くして國內財政の疲弊を來たすものなりとされたるものであつて日支事變と照し考へてみよ）故に必ず糧を敵に因み、價を人に取る（然るが故に占領地域内に於て出動部隊の賄をなし又國內需用の物資を輸入する、更に價金を取つて國內財政の補給に當つる、これが戦争の原則であるとされたるものであつて、日支事變にも適用出来ることであらう）是に於て通市の説あり（斯様な兩國關係に於て始めて兩國の物資輸出入が始まり貿易といふものが開始されるものであるとされたるものであつて、松陰先生の貿易といふ觀念がよほど國家中心主義のものである）敵國の人悉く殺すべからず、降るものは之を納れ、服するものは之を用る（降服

者はこちらで利用し活動せしむる。小なるものは侯とし大なるものは大とし（降服者の身分に應じて地位を與へ、こちらに心服せしめ活用する、日支事變に於ける宣撫工作と併せ考ふべきなり）それを
 して我に奉貢致賦（はうこうちふ）（そして後等に財物の賦課を命じて、一つには占領地の治安と財政に當て又自國の國內財政に資せしむる）せしむ、是に於て通信の説あり（斯様な人的交換が開かれるが故に自然と通信なるものが始つて来る）神功皇后三韓を征したまひて以還、列聖（歴代の天子様）の爲したまひし所（通信通市）史を按ずれば而ち知るべし（松陰先生はこの幽囚錄の終りに附録として列聖の雄略史を添付して居られるも茲には紙數の關係上之を削略す）今は則ち是に異なり（此の一句大に味ふべきである、元來松陰先生は一國の生命は第三國依存關係ではいけない、獨立獨歩で進取的でなければならぬ、國運の停止は退歩に等しと云つて居られる、従つて外國の重壓による通信通市をなすが如きは眞の開國ではない、こちらから進取的に乗り出す所に始めて貿易があると主張されて居る）外夷悍然（勢猛けく）來り逼り赫然（さかんなること）暴威を作り、吾は則ち首を俛せ氣を屏け、通信通市唯その外夷の求むる所のまゝにし敢て違ふこと無く、佞人の利口（怯懦者の利巧な辯説）

乃ち或は之を以て列聖の義に附す（斯様な不甲斐なき有様なるに、却つてこれを以て歴代天皇様のなし給うたことゝ結局は同じであるなどといふ、實に怪しからぬ事である）是の如きものに就ては吾豈その邪説を縱すことを得むや（あの純情高潔な松陰先生としてはかく憤慨さるゝ事は當然のことである）夫れ水の流るるは自ら流るゝなり、樹の立つは自ら立つなり、國の存するは自ら存するなり、豈外に待つことあらむや（此の一句最も深く味ふべきなり、國家の存立は自主獨立ならざるべからず、獨立不動の態勢を要し第三國依存關係は國を危ふするものとされて居た所であつて、現時の不可侵論や同盟論に付き深く思を致すべきなり）外に待つことなれば豈外に制せらるゝことあらむや、外に制せらるゝことなし、故に能く外を制す（此の最後の一句實に千古の金言警聲なり）。

私 話

この『幽囚錄』譯註を試みた動機については劈頭記述の通りである。松陰先生の
 大國策——朝鮮——滿洲——支那——南洋——印度——アフリカ——濠洲——更にロシアと米國との敵性——而かも日本の將來の大敵は米國也——と看破されて居る。この積極的外征一大雄略が自

分の心をいたく引きつけたからであつた。そしてこれを進むるには海國日本は大船巨舶主義で開國するの外はないと、更に第三依存立の危険なることを戒めて、國家の興隆は「民を愛し土を養ふ」にありといつて、國民の總親和總努力に言及してゐられる。結局これは國家の存立は自主獨往、而して總親和による國力充溢の外はないと云ふことになる。いま獨尊不可侵條約の報を得て、その感や更に切なるものがある。

かうした松陰先生の雄略的の一大抱負識見が甚だしく感激の衝動を與へたので、遂にこれを現代的國策事情と照合して筆を進めた所である。願くは讀者諸君に於て、一章一句一字、精思心讀せられ、以て現代的に更新思索せられむことを望むや切なるものがある。

(備考)

本譯註は昭和十四年六月日米通商條約一方破棄の當時、その米國の暴狀憤懣に堪へず、激

怒のあまり同年夏一氣に筆を進め試みたものである。爾來日米の交渉經過を見るに、專恣橫暴益加はり、恰も東洋に日東帝國なきものゝ如き橫暴到らざるなしである、よつて取て再び本書に掲出し時人に訴へんとした次第である。最も「私話」にありては既に過去の事實となりたる處あるも吾等は過去を顧みつゝ勇猛心への料となさんと欲するものである。(昭和十六年秋)

讀松陰先生幽囚錄。

福本椿水

外夷頻々窺邊陲。國家安危正是時。墨國呈書求開港。甘言百端如醴飴。知己知敵經國要。用間制機兵家常。吾又欣慕非常業。攻防全謀丈夫行。君不見大瀛萬里如比隣。異鄉埋屍是我眞。如是而死於吾足。七生報國護帝宸。可憐崎陽與下田。一跌再跌宕送年。燕雀何識鴻鵠志。一心仲々訴九天。

海外進展の基調は國本の培養と 國內體制の整備にあり

恐るべきは米・露なり

いま松陰先生は『幽囚録』において、大日本帝國の嚴然たる大陸・南進政策と共に、これを推進すべき確固たる國內體制諸問題に關して、その概要を説述してゐられる。而してこれ等の所論を端的に要約するなれば、外夷の來襲は刻々急迫する。單に米・露のみではない。英吉利も來る。佛蘭西も來る。このまゝじつとしてゐては、この尊き神州の地も自滅するの外はない。これは、三千年來皇統連綿として傳承し來た皇國民として、到底堪へ忍び得ざる所である。いつそ積極的に進攻退守の國勢を整へて、魂の體當りで攻勢に出づるの外はない。しかし、それにしても外夷東進の狀勢を探究見定めることが肝要だ。そしてそこに自づと先後緩急の適切なる對策を講

ずることが急務であるとされてゐたのであつた。

當時、東洋においては阿片戰爭をキツカケに狂瀟の如く、支那侵略に乗り出して來た英夷を見られた時には、日本の將來恐るべきは英國である、豺狼さいろうの如き英夷を第一假裝敵國として當らなければならぬと觀念されたやうであつた。而るにその後における外夷侵略の推移狀勢を觀望するに、在來憤激してゐられた英夷よりも、寧ろ後から東亞に乗り出して來た米露の方が危険な怪正體を示してゐる。露國は北邊の地より侵入し來つてゐるのみならず、和親條約に籍口けいこうして北邊國境協定までも強要し來つてゐる。米國は南方琉球方面より艦船を進めて、漸次東進の體勢を示してゐる。従つて松陰先生も、日本の將來恐るべきものは米・露なりと觀念するに至つたのであつた。

而るに、安政年代に入つてからは、露國は一時後退の姿勢を示し、米艦が愈々毒牙を振つて、南方海上より漸次日本の中心臟部に迫り、遂に江戸灣ちんげふに闖入して、城下の盟を強要すると云つた暴勢を誇示し來つたのであつた。英・露勿論寸時も油斷は出來ないが、差し當つての強敵は英にあらず、露にあらず、その最も恐るべきは米國なりと考へらるゝに至つたのであつた。

かやうに、松陰先生は野山獄中囚居の身の上ながら、日夜急迫せる國際狀勢の推移に關心留意されて、國家應急の對策樹立に憂念心苦を重ねてゐられる松陰先生の至誠憂國の切情と共に、その叡智明敏の識見抱負とを見通してはならぬのである。

恰も安政二年の五月であつた。門人の桂小五郎(後の木戸孝允)が『またく佛蘭西・英吉利が和親通商條約を強要して來た。かうなつては最早このまゝジツトはしてゐられない。萬死誓つて國策に殉ずるの外はない』と、松陰先生に決意を書き送つて來たので、先生は『足下の決心、それは人意を強ふするに足る』と謂つて

幕府が前年既に米・露と和親條約を結んだ。これは固より誤りであり、失敗であつた。しかし一度和親條約を締結した以上は、我よりこれを破約すべきものではない。さりながら、いま又更に英・佛と和親條約を結べば、英・佛は必ず我れを大に輕視し、而して米露は必ず大に我れを怨み、此後の禍患言ふべからざるものがあらう。前年、米・露の交渉し來つた時に、謀を伐つの上策(孫子の語、外交々涉で機先を制し屈服せしむること)に出でて、うまくやつたなれば、我が勢で彼を屈せしめ、却つて勃興することが出來、悪くいつても折衝して自ら保ち得た干歳一遇の好

機であつた。然るにいまはその機を失つて如何ともすることが出來ない。この時にまたく英佛がやつて來た。今度こそはその機を失してはならない。即ち斷然と應へて『我れ已に米露と和親條約を締結した、然しそれと云つて、汝の爲にまた糧水を辨つべき筋合ではない、若し違言することあれば、國法在るなり』と、嚴然と云ひ放つに如くはない、さすれば則ち英・佛は必ず大に我を畏れ、米・露は必ず大に我を徳とする、そして國內の士氣は必ず大に振興するであらう。知らず、足下、之れを策すること如何、僕幽囚せられて永く世の棄物となつてゐるけれども、猶ほ同囚と經義を修め、皆扼腕切齒してゐる(野山文稿、與桂小五郎書。意譯)

と、返書を出してゐられる。松陰先生は、飽道義外交で、國際信義に立脚し、正々堂々所謂純正日本精神で押し通して行く、その代り外夷の恫喝脅迫的老獪交渉を排除して、士氣振作による武威を以て彼等を壓し、國際難局を有利に轉向せしめんといふのであつた。優柔不斷な二股外交で、米・露を怨怒せしめ、而かも英・佛より輕視さるゝが如き劣悪外交では、とてもこの危機難局は到底打開さるゝものではないといふのがその主張であつた。殊に松陰先生は外夷の國狀なり、また彼等國際間の狀勢なりを十分審知して、彼等の急所を衝き、外交の機微に觸れて、彼等を制

壓屈するの奇策妙案の偉功を立つる位の識見と餘裕とがなければならぬとされてゐたのもあつたのである。

この頃、松陰先生は獄囚生活に只徒に日々憂念さるるのみであつて、時代の推移や人心の動向等外界における事態時象を知らるゝに由もなかつたのであつた。偶々獄窓で「接魯問答」なるものを讀まれて大に憤激されてゐる、この問答の編者は不明であるが、思ふに嘉永六年九月露國使節プーチャチンの長崎に來た時の、幕府との交渉往復文書の寫録とでも云つたものであらう。

松陰先生は、これを讀んで大に疑念を發せられ「魯西亞が禍心を抱藏してゐることは由來久しいことである。夷艦の來航以來其大體の輪廓は解つてゐても、幕府はその詳悉を祕してゐるから、更にその推移經過を知ることが出來ない。これがために國民は一層疑惑を生じて物情騒然たるものがある。自分は獄に下つて世間と隔つてゐれば、尙更疑念が湧いて來る」と謂つて

幕府の諭示によれば、「境界の事は三五年を待ちて而る後に之を議せん」と、夷人の謂ふのは「三五年も後になれば則ち夷人に占居されて、植民は殖え、その時に於ては却つて解決は至難になるであらう」と、また幕府の謂ふには「爾の國を待つこと他國と別てり、未だ爾に聽さ

ざる所は、必ず他國にも聽さじ」としてゐるのに、魯艦が僅に長崎を離るれば、即ち下田に墨奴(米艦)が入港すると云つた狀勢である。そして夷人は、大坂・江戸に近き一港を借らんことを強請してゐる。これ實に惡むべき所であるにも拘らず、幕府はこれを拒絶することが出來ないとは實に情けないことである。云々(野山文稿)

と謂つて、長崎にせよ、大坂江戸にせよ、何れも日本の中心眼目の要衝である。これ等に對して外夷の喰指が動いてゐる。これほど無禮危険なことはない。而るに幕府は無氣力で、不甲斐なき媚態外交に其日暮しをやつてゐることは、實に憂慮に堪へないが、よもや夷人のなすがまゝに委するやうなこともあるまい。しかし不安でたまらないとして「身幽囚に在りて世事を知らされば退いて自ら疑ふのみ」と憂心もたへ苦しんでゐられる。

さすがに松陰先生も自ら「籠鳥檻虎」と謂つてゐるゝが如く、獄中にあつては如何に心がはやつても如何様ともさるゝことは出來ない。憂憤鬱積、外夷急迫の事態を思念されては、獄窓の冷たき夢も度々覺めがちのやうであつた。

當時門生の松本源四郎が熊本から宮部鼎藏の手紙を携へ歸つて、野山獄の松陰先生を訪問傳意

したのであつた。この松本は、松下の生まれであつて、世々數學教授として明倫館に出仕し、文學にも長じてゐたのである。先生の紹介で、熊本藩の池邊啓太に従學してゐたのであつた。松陰先生は宮部のこの手紙を得られて、非常に喜ばれ早速答書を認めてゐられる。その一節に

天下の勢、滔々として日に降り、魯墨(露・米)の病、已に膏肓に入り、暗拂(英・佛)の疵、更に皮肉を裂く、これでは志士たるもの未だ瞑目することが出来ない、然し近來魯虜は暗拂諸夷と難を構へてゐる(註、嘉永六年クリミア戦争起り安政元年二月英佛は露國に宣戰す)是れ謀を伐ち交を伐つに(註、孫子謀政篇の語にして、上兵は謀を伐ち、其次は交を伐ち、其次は兵を伐ち、其次は城を伐つとあるによるものであつて、外交戰に於て勝利を占め、敵を完全に封じて策動せしむる餘地なきに至らしむるを上策とするもの)宜しく奇策あつて然るべきである。然るに世人は恬然としてこれに乗ずることを知らざるは遺憾である。云々(野山文稿)

と謂つてゐられる。さすがに松陰先生は兵學者であり、智謀の將である。松陰先生は一朝有事に當つては、敢然決意腹を定めて、武斷解決をも敢て辭せない。肉彈體當りで、外夷を打ち拂ふことも勿論可なりである。しかし敵の急所を衝くといふことが一番大事な手段である。敵の間隙

に乗ずるだけの謀攻外交の奇謀妙策がなければならぬ。上兵謀伐こそ實に外交の妙諦であつて、こゝに思ひを致さなければならぬ。かうした國際間における氣配呼吸、この虚々實々の懸引が大事であると示唆されてゐるのである、外交家としての松陰先生は「誠を天地に立て、効を事功に求めず、心を道義に存して、成敗を意に止めない」と謂つた、實に正々堂々正義公明の外交々涉の一面においては、具に國際的機微を捕へて、その動向に順應して行けるだけの用意がなければならぬとされてゐた。實に遠謀明識達見即應の外交家であつたとも謂ひ得ることが出来るのである。

國本培養の獄舎問答

松陰先生は、獄中囚居の身なりとはいへ、一日として外夷來襲の急迫さを忘れられたことはない。夢にさへも悲憤憂念の往來に惱まされて居られたのであつた。冷たき鐵窓獄裡にあつて、朝な夕なに、思ひ亂れてゐらると共に、これが對策に付ては日夜精思凝念工夫を積んでゐられたのであつた。

そこで兎に角、外夷の要求を容れて和親通交するとなれば、別に問題も起らず戰爭にもならず

太平は續くことであらう。従つて艦や砲の製造もさう急務ではあるまい。さうなれば、外夷に對する直接防備よりも、内治の完備に重點を求むべきが却つて適策であらう。また戰備の急務と云つても、その機會よりも時期をつかむことが肝要有利であるなどと、當時世上紛々たるの時事對策論を俎上に載せて、あらゆる角度觀點から論じられたものが、この『獄舎問答』であつて、松陰先生は『野山獄にあつて同囚と口に任せて問答せしことを、筆にまかせて記し置きぬ』と云つてゐられるが、恐らくこれは世人の議論を題材としての松陰先生の自問自答的意見であらう。従つて當時における外夷急迫に關する先生の時事對策の要約論とも見得らるべきものである。いまその一節を抄録すると

或問、方今、東に米利堅あり、西に魯西亞あり、その他各國の夷人本邦を窺伺する者甚多し、

勢將に大變亂あらんとす、その變亂を發する、遠近の數、略前知すべきか、願くは子が説を

問かん。

答曰 太平尙久しかるべし、悲いかな悲いかな。

或曰 子、常に外夷を以て國の深患となす、然るに今太平尙久しかるべしと云は何ぞや、且、

已に太平久しくは、亦何の悲むべきことかあらん。

答曰 凡兩智相遇ひ、兩勇相對す、必ず戰鬪を起す、古來の跡歴々見るべし、近來米利堅魯西亞の豺狼等、無禮を以て我國に向ひ要求する所あり、理宜しく國家の大典を明にし、その侮慢の罪を正すべし、今乃ち國體を顧みず、頭を低し膝を屈し、承奉の及ばざらんことを恐る、その愚極まり、その怯極まれり、米利堅魯西亞等固より智勇に非ずと雖も、吾國の愚怯の極なる者に比せば、甚だ勝れりとす、故に彼の吾を視るは、豺狼の貓鼠を視るが如し、吾未だ豺狼の貓鼠と鬪ふ者を見ず、癸丑甲寅の兵端に及ばざる所以なり、癸丑甲寅の米利堅魯西亞を待つこと已に如斯なれば、爾後他の夷蠻群至すとも、亦如斯ならざることを得ず、傳聞く、今年正月間、志摩の鳥羽に夷舶來り、三月間、肥前の長崎に夷舶來る由、その信僞を知らずと雖も、夷の求むる所以、我の待つ所以、問はずして知るべし、物固より一を以て百を知るべく、往を以て來るべき者あり、この類是なり。見よ、今より後、萬國群至、何事を要求するも、我國には、天覆地載の大徳ありて、決して膺懲の擧なかるべし、豺狼野心ありと雖も、初の程は恭順にして、我國法にも従ふべし、夫より漸を以て民心を煽惑し、又國力の強弱を

審にし、然る後、初てその固有の野心を逞しくすべし、但その事、漸を以てする故に、彼の愚怯の徒、何ぞその萌芽を知て果決の策を行ふ事を得んや、方今天下の事、幕府の宰成する所、右の如し、列侯中、若し智勇の人あらば、或は樽俎を越えて、その事をも辯すべし而して世その人あることなし、人の智勇、固より天に稟する所にして、その必無を斷じ難しと雖も、當今の時勢を以てすれば、樽俎を越ゆるの人なきを知るに足る、當今幕府愚怯極れりと雖も、列藩の愚怯の甚だしきが如くならず、亂を撥し正に反するは規模を以て主とす、列藩の執政を歴觀するに、その智慮の及ぶ所、僅かにその封疆に止る、その比鄰の國政人材と雖も、茫然知る所なし、況や天下の大なる、四夷の遠き、安ぞ能く一々に是を審にせんや、今幕府衰たりと雖も、天下列藩主相の賢否、武備の強弱、一々詳審して指掌に在るが如し、天下の人材、江戸に群集し、府廷に人材多きこと、列藩の企て及ぶ所に非ず、故に善く列藩の上に立て、天下の事を宰成するに足て、天下列藩一も違言する者ある事なし、是れ、余が俎を越ゆるの人なきを知る所以なり、且、天下の亂、諸侯に出されば、黎庶に起る、古往の跡皆然り、然ども、今や列藩愚怯と雖も、政綱縝密、一物を掠め一人を殺す者と雖も、皆之を脱漏すること

なし、況や悪黨を糾合し事端を滋出せんと欲する者あらば、速に勦滅に就くべし、吾甲寅の歲、江戸の獄に居り、多く關東の博徒と交る。

皆曰 夷舶の來りしより、緝捕甚嚴しく、博徒大に困迫す、吾輩の捕に就くも亦是が爲なりと云、又聞く、往年虛無僧の權甚放縱たり、近時大に抑屈せらる、此類を以て、幕府民變を制する亦自ら術あるを知る、百姓一揆の如きは、連年苛虐の致す所にして、觸るゝ所有て發す、亦自ら一種なり譬へば風起り火燃るが如し、その未だ起らざる、人その火氣あるを知ることなし、その已に起るや、草茅屋舎、一掃殘す事なし、實に恐るべしと雖も、久きに堪へ重を持つること能はず、今の兵士を用ゐ、是を蕩滅せば、何の難きことがあらん、嗚呼太平尙久しき所以は、列藩の幕府を仰ぐは嬰兒の資育を視る如く、幕府の夷狄を畏るゝは猫鼠の豺狼を視るが如きに由る、吾が深く悲む所實に茲にあり、眞に國を憂ふるの人は、多言せずと雖も、自ら知らん。

或問 子が言の如くなれば、天下は泰山の安にあるが如し、然らば、子、永世無事を保するか、又變亂の慮もあるか、若し變亂あらば、何事より生ずるか、請ふその詳をきかん。

答曰 一治一亂ば天道の常、治日常に少く、亂日常に多きは、古來の習なれば、二百餘年太平なるさへ、前古比なきの盛事なるに、この後又永世兵事なること、誰か敢て是を保せんや、抑變亂の由て起る如きは、その端頗る多し、豫め云べきこと難し、然ども予が慮る所を以て是を言ん、夫れ外夷の互市、日に盛に、萬國の帆檣、吾港口に林立し、夷館夷寨意に任せて築造し、夷輩良民と雜處せば、吾國の政令善く我民に及べども、夷輩に及ぶこと能はず、その極、我民と云へども、政令に遵ざる者あるに至り、奸民の密買、劫盜の奪掠從て起る、その時に於て、豺狼の野心を逞ふし、我國を上犯するの事あらば、邦内の民、半ば夷輩の役とならん、この事、滿清の覆轍昭々たり、多言を費さず、且、互市は、皆外夷無用の物を得て、奢侈淫逸を導き、吾國有用の貨を失て、衣食の資、器用の本を闕く、先賢是を詳にせり、今坐ならがらにして萬國の商舶を待ば、數年を出ずして、國家疲弊し、民菜色あり、途に餓殍あり、流民蜂起し、奸雄是を煽し、黠夷是に乗ずるに至る、是れ余が慮る所なり。

或問 子が説を得て、太平の悲むべきことを知る、實に外夷は是れ皇國の大患なれば、凡そ皇國の民たらん者、深くその善策を思ひ、國に報ゆべし、今列藩に在て、急に手を下すべきこ

とは、砲を鑄、艦を造る等の事、論を待たず、その他是に繼で、なすべきことは何事にやあらん、請ふ一々に教玉へ。

答曰 天下に機あり、務あり、機を知らざれば務を知ること能はず、時務を知らざるは俊傑に非ず、今已に天下の大機を失ふ、方に砲を鑄して錢とし、彈を鑄して鋤となすべきの時なり、然るに、尙株を守りて砲艦を急務と思ふは、虚氣の甚だしきに非ずや、天下の大機と云は抑皇國の古時、神功皇后三韓を征し、比羅夫肅慎を征する類は耳舊たり、その後、皇道陵夷し、國威萎非ず、然れども、寛平に至ては、乃ち時に文屋善友の如きあり、弘安に至りては、乃ち時に北條時宗の如きあり、文祿に至ては、乃ち時に豊臣秀吉の如きあり、皆善く皇道を明にし、國威を張る、神州の光輝と云べし、近年來、外夷の小醜、妄に自ら使を送る、是實に一時の大機と云べし、今則その虚喝に恐れ、永久の和親を約す、是亦何とか云ん、然どもその機已に失ふ、今の務むべき者は、民生を厚ふし、民心を正ふし、民をして生を養ひ、死に喪して憾なく、上を親み長に死して背くことなからしめんより先なるはなし、是を務めずして、砲と云ひ艦と云ふ、砲艦未だ成らずして、疲弊これに隨ひ、民心是に背く、策是より失

なるはなし、この事、孟子先生已に言盡す、今又何をかいはん、且、軍艦に至ては、その制未だ詳ならず、許多の金を費して是を造るとも、用に適すると否、未だ知るべからず、數年の後、米利堅魯西亞等より、その制傳來すべし、その後を待て制するも亦遅からず、尤も或は洋書を精研し、或は船匠を招集し、その可否利害を講究すべきは固なり、未だ妄りに打造すべからざるのみ。

と謂つてゐられる。松陰先生は、憂念苦心いろ／＼と思ひ煩ひ、對策に腐心されたやうである。外夷來航交渉開始の當初なれば、夷人等も未だ幕府の實力、國內の狀勢、國民の士氣なども十分に知ることとは出来なかつた。かくの如き時機に於て斷然これを拒絶し、嚴然と一撃を彼等に加へて、魂の體當りで威武堂々外夷に對するなれば、彼等も、これはウツカリ手出しは出来ない。悔りかゝつては大變だ。思つたよりも手ごはいぞと彼等自身が畏怖して却つて退き、恫喝脅迫などの擧に出づることとは出来なかつたことであらう。然るにいまとなつては、國內狀勢は察知せられ、國民の士氣は看破せられ、幕府の無氣力は洞察され、國家國民の内兜を見すかれて、如何なる事態も恫喝威壓で強要し得るものなりとの觀念を與へた上は、あの文化科學的な外夷等と、最早と

ても戰爭の出来るものではない。そのみならず、幕府は彼等の恫喝に縮み上つて、既に和親條約の締結までした以上は、恨を吞んで一步退き、これを恪守して、その間に國內體制の整備統合と人心の歸一團結とを計つて、根本的に國力の充溢を期し、國家總力戰の基調を培養するの外はないと觀念されたやうである。現時の日米交渉經過に照し合せても、何んだか此等の諸問題が吾人の胸底に迫り來るかの感がする。松陰先生の魂は、時代の如何を問はず、いつも國民の魂に高鳴りを與へずには居られない所である。

故に、どうしても一朝有變の危機に處するには、直に立ち上つて奮然突進し得るだけの國民、即ち精兵主義で、人物の養成訓練を第一義とする。そしてこれに伴ふ兵器の擴充を計らなければならぬとされて

予も亦曾て略兵法を學ぶ、戰勝攻守の術、素より心を盡す所なり、西洋夷と兵を交る如きは、十年外に非ざれば、如此事なし。然れども國內の亂の如きは實に一日も忘るべからざる所なり、然れども砲よりも艦よりも、善き物は兵機を辨へたるの士なり。本邦昇平日久し、故に兵戈に至つては、絶て是を目にする者なし。故に其兵鋒必ず遲鈍、其隊制必ず亂雜、是に加ふる

に銃砲遅重の器を以てす。故に兵機を知る者をして意に任せて精銳を選択せしめ、多き者は五百七百、少き者は五十八十を一隊とし、風雨晦冥不意不備に乗じて是を掩襲す、然る後、敵人の砲械を奪て己が用となす、妙是より宜しきはなし。

と、謂つて、精兵主義で隊の節制を整へ、猛訓練で風雨不意不備を突撃し得る底の軍隊調成を主張してゐられる。日本軍隊の精神力強き特種性は、かうした先人愛國士の魂から湧き出て育成養長したものである。

更に、松陰先生はこれ等の事案と相關連し、國本の培養として、國民力の涵養と人材の網羅推進とを先決問題として、茲に國家總力戰の基調を求めてゐられるのである。

若し田地少なく人民衆きに苦む時は、或は塗師番匠鍛冶等の諸工作をなし、硝石漆油蠟紙諸藥物等を製造せしめ、國用に供し、餘りあるものは他國に一賣するも亦禁することなし。専ら下を利するを務め、上を利するを務めず、如是なれば、民富み且庶にして、國從て旺盛す、是れに重ぬるに、仰て父母に事へ、俯て妻子を育するの道、上を親み長に死するの義を以てせば、夜叉に與ふるに鐵棒を以てし、錦上加ふるに花を以てするが如し。是れ民政の要、本を修むる

の論なり。また、國政の要は、賢材を得るに在り。今の政をなす者は、國內の賢材をさへ盡さぬなり。何ぞ能く天下の賢材を網羅せんや。宜しく禮を致し敬を盡し、賞を重んじ祿を厚し、天下の人を招聘せば、兵機を知る者あり。民政を知る者あり。古今を知る者あり。皆以て我が政治を輔くるに足るなり。其他技巧藝術の流に至るまで、皆我の用に非ざるはなし。故に武備の冗費を省き、民を惠し士を禮せば、亦何ぞ奢侈に暇あらん。

と諄々説き來つて『相共に天下の事を謀り、國威を奮んと欲すればこそ、國力を強くし國本を養んとするなり。今の武備を壯にする者、何ぞ言に足らん、この事、千萬知る者は云はず、云ふ者は知らず、且、退て經書を讀で民を愛するの術を學び、兵書を讀で戰を用ゆるの機を曉り、歴史を讀で此二つの者を實にせよ』と、松陰先生は悲憤の内にも、靜かなる心情の落ちつきを見せつゝ、經典を繙いて、經國愛民の理念に思を致され、兵書を披いて戰機縱横の工夫を凝らしてゐられる。而かも古今成敗の跡を靜に考へて、これを實意實行に移すべきであると結んでゐられるのである。

いま當時における松陰先生の海外進展策並びに對夷接衝謀略ともいふべきものを觀るに、かの

『幽囚録』その他に於ては、大和民族の將來進展すべき國是國策の要綱を強く高く指示して、現時の大東亞共榮圈よりも更に一步進めて、印度・濠洲は勿論、遠く阿弗利加迄にも進出すべきものとされてゐる。而かも米・英・佛・蘇等に對する世界政策にも論及して、八紘一宇の肇國精神實現に斷乎として驀進すべきものなりとも示唆されてゐるのである。而るにこの大和民族の大理想、この日本の大國策を阻害するものは、歐米夷敵である。否、阻止妨害どころではない。いまや逆に三千年來未だ曾て外侮を蒙つたことのない、この尊き神州の地をも侵略せんとしてゐるのである。而るに幕府最早頼むに足らず、米使まさに斬るべし、露使またよろしく斬るべしとさへ、悲憤激怒されたのが安政元年の春であつた。

然るに、無氣力なる幕府は、既に米露の恫喝によつて和親通交の條約を締結した。續いて英佛もこれに均霑せんと脅迫強要を求めて來た。即ち外夷は連合して四周強壓、而かも幕府は何等爲す所を知らないのみならず、三百諸侯は各々その藩地に蟠居して、國家の存亡さへも恬として知らざるかの状態である。それに國民は皆只驚愕色を失して右往左往するのみであつて、一人として敵愾難衝に當らんとするものはない。徒に上下擾亂紛然、人心は驚嘆と恐怖とのみで覆はれて

ゐる、これでは到底國內的收拾の出来るものではない。それに砲もなければ艦もない。それにもまして兵器操縱の精兵もゐない。これではとても外夷に對抗することは出来ない。事を構へれば、直に敗戦するのみである。機によつては、これ等の不利をも逆に有利に轉向して魂の體當りで勝戦の出来ないこともなかつた。而かもいまや、残念にも吾等唯一の頼みであつたその大事な機は去つてしまつてゐる。吾に有利な機が去つて、夷敵に有利に廻つたとなれば、最早事を構へるわけには行かない。戦争を挑發する筋合のものではない。さすれば千秋の遺恨を胸底深く秘して、一度締結した和親條約遵守といふ道義外交に立つて、其間に國家の實力を養蓄し、國本の培養によつて國家國民の總力戰體制を整へ、捲土重來、外敵粉碎の遠謀密計を樹てるの外はない。いまとなつては、如何に焦燥しても仕方がない。如何に悲憤激昂しても致し方はない、よし來た、國本の培養、國力の向上充溢、國民士氣の振作、國內諸體制の臨戰準備の調整だと、あの純眞な公明な正直な而かも至誠熱情な松陰先生は思想的に謀略的に觀念的に轉向を示してゐられるのであつて、これが安政二年の夏秋の頃で、僅に一年有半の後であつたのである。

これほど日本國內の紛擾は甚だしかつた。國民人心の動搖も甚だしかつた。それだけ外夷の行

動もまた轉變極りなきものであつた、その變轉推移の、はてしなき國家内外の急迫狀勢に順應して、眞に適切有效なる國策を樹立せんと、日夜憂心苦慮された松陰先生ほど、眞個の至誠憂國の殉國烈士は他に多く求むることは出来ない。

國內體制の急速なる整備

この急迫せる外夷侵略謀策に對し、多くの世人が謂ふが如く、大砲・軍艦も勿論必要ではあるが、然し國民の士氣は衰へ、上下の和合は無く、人心は不統一である、それにこれといふ人材もない。いまこの紛亂せる國狀であつては、いかに砲や艦があつたとしても、これを活用するの材がない。これを實地に運営することが出来ない。こんな國內の狀勢事態であつては、到底あの老獪巧智な外夷に對抗することは出来ない。何はともあれ、先づ第一に國內體制の整備を完了し、人材を得て人心の統一を計らなければならぬと觀念されたものゝやうである。しかし世上同志の間に於ては、人心問題や國內統制論もあるが、先決問題としては、やつぱり武備整頓武器調整論が相當に力強く論じ立てられてゐたのである。

そこで、あの鐵石心の如き松陰先生も、その何れを先着先決問題となすべきやと、多少疑惑を生じ惑はれたものと見えて、在萩年少時代に外夷狀勢に關して、親しく教を請はれ、殊に海外進展策について指導教誨を受けられ、鞭撻を蒙られた山田治心氣齋（贈正四位、通稱宇右衛門、名頼毅、號星山）に對し『少年時代、先生教育の御蔭で略世界の大勢を知ることが出来たが、いまの急迫せる時勢に對し甚だ惑ひある所であるから、遂に先生に質さざるを得ざる所である』として

癸丑（嘉永六年）魯・墨（露國と米國）の事起りてより、國家の設施する所、士夫の陳説する所、何れも砲と艦とを曰つてゐるのみである。しかし目下の急務として、これ以上のものはないのであらうか。僕の謂ふには、いまの憂ひは事に當る者に、志と略（大志雄略）とがなく、兵を治むる者に勢と機とを知るものがないことである。苟くも其志を大にし、其略を雄にして以て事を建て、勢と機とを審にして兵を行ふれば、艦・砲なしと雖も、猶ほ五大洲を横行することが出来る。従つて魯・墨などは別に畏るべき筋合のものではない、またそれでなければ艦も砲も活用の出来るものでもない。

僕窃に國家のため、今の策を思ふに、既に魯・墨と和親したれば、決して我より事を生ぜしめて

はならない、宜しく條約を謹み守り、其間に乘じ、滿洲を收めて魯（ロシヤ）に迫り、朝鮮に來
 貢せしめて清を窺ひ、南洲（南支那及南洋諸島なるべし）を取つて印度を襲ふ、三者當に其爲し
 易きものを選びて之を爲すべきであり、是れが天下萬世に繼ぐべきの業である（註、松陰先生は
 信念確乎に現時の大東亞共榮圈確立を以て子々孫々に傳ふべき大業なりと宣言して居られる。天下の勢、
 或は未だこゝまで至つて居らなければ、則ち退きて吾が國を治め、武を偃し文を修め、賢能（賢材
 能將）を招き、士民を養ひ（民力の涵養、聲息を潜めて形跡を斂むべきである（國力を靜に養ひて事
 機到來を待つ）そして徳を量り力を度りて、能く爲し得る所を爲す、大にしては則ち仁者の業で
 あり、小にしては智者の事である、是れを之れ勉めずして、船を造り砲を鑄ることのみをこれ
 事とするは、これ僕の惑ふ所以である。これを古人に求めて其説を得ず、遂に先生に質ざるを
 得ざる所である。（野山雜著）

と謂つて、山田先生の御所論や如何と、松陰先生はさきの獄舎問答（前述）をかれに送られ、『哀
 みてこれを教へられ、以てその惑ひを解かれたし』と懇願されてゐる。いかにも松陰先生の眞劍
 さと共に、純眞な師弟情義の深厚さが思ひやられる。治心氣齋はこれに答書を與へる暇もなく、

鎮西旅行へと旅立ちしたのであつて、まさにこれ安政三年の正月であつた。

更に松陰先生は、かうした人材問題や國內體制整備に關しては、また次のやうな所論をも有し
 てゐられたのであつた。

古今英雄豪傑の士の爲す所は、期せずして符合する所がある。先づ賢材俊傑を收め、國民を愛
 撫し、糧儲（生活必需品）を積蓄し、兵甲（兵器）を修繕し、一朝有事に備へることにしてゐる。
 此等が順次に完遂さるゝなれば、國家の隆起しないといふことはない。反對に、これが行はれ
 ざれば、必ず國家は亂れて衰亡するのみである。そして流言蜚語や國民を煽動する不良分子を
 嚴重に取締るべきものである。（野山雜著）

とも謂つてゐられる。實に松陰先生の政治的意見所論は飽迄徹底してゐると共に、また用意周
 匝である。かうした外夷恐怖・人心動搖・社會事象の紛亂と云つた時代には最もありがちな造言
 蜚語のデマ取締や不良思想分子の煽動取締にまでも言及してゐられる。昭和現代の政治・社會
 相と照し合はして、如何にも其識見が實行的であり、徹底的であり、而かも時代の事象を洞見透
 察しての明智敏感な緊急肝要な對策を窺ふことが出来る。事象に對する扇の要を打ち抜くと云つ

た松陰先生の實に鋭い精神をよく看取することが出来る。

外敵來襲時の國民指導

松陰先生は、獄窓裡にあつても、夢寐でも外夷對策を忘れられたことはなかつた。恰度この頃、清の魏源の著『籌海篇』（清の邵陽の人、字は默深、道光年間の進士、兵學者、聖武記・海國圖志等の著あり）を讀んでゐられた。そして、その「守を議し」「戰を議し」「款（和親）を議す」の條をみて非常に感服せられ、若し清がこの通りにやつてゐたならば英國を牽制し、露・佛をも制馭し得たことであらうに、かの長髮賊蜂起の如き、廣西の一角に起つて直に支那八省に及び、災禍十年の長に互り、首都北克さへの守を失つたといふが如き、その禍因は外夷そのものにあらずして全く内民（國內民心の離反衰頹によるとなすもの）にあつたわけであるとされて、當時の支那國狀を説破されてゐる一節に

世の守を議する者は、只徒に堅城を築き、大砲を鑄造し、兵を調練すべしと云つて驕いである。戰を議する者は、其爲すべき時に爲さずして、これ亦茫然と時機を失つて居る。款（和親）

を議する者は、恫喝強要されて、やむなく屈服して和親を結んでゐる。而かも姑息を以て外夷に迎合し、一面國民の膏血を搾つてゐる。これでは内變外患の生ずるのは當然のことである。

思ふに民（國民）は内であり、夷（敵）は外である。外を謀つて内を遣るゝものは凶であり、内を治め外を制するものは吉である。（野山文稿、讀籌海篇）

と謂つて、松陰先生は徹頭徹尾、外夷對策の根本義を民力の涵養と國本の培養確立とに求められ、更に人心の歸一と士氣の振作とを説いて一世の覺醒を叫んでゐられる。

尙かうした外夷對策の根本的理念としては、弘化三年閏五月、松陰先生十七歳の時に、早くも既に『異賊防禦の策』と題し、左の如き策論を試みてゐられるのであつて、先生の早熟的識見、實踐的學問の運営、只々驚服するの外はないのである。

兵法（孫子九變篇）に曰く『兵を用ふるのは、その來らざるを恃むことなく、吾が以て待つあるを恃む、その攻めざるを恃むことなく、吾が攻むべからざる所あるを恃む』と、方今、遠西猖獗（外夷の西邊を侵すこと）なり。我れ何の待つ所ありて、而る後之を恃むや、曰く、四あり、人才、能く辨ず、器械、能く利なり。操練、法あり。戰守、術あり。凡そ此の四者は、國家の

急務にして一日も缺くべからざるものである。

人才能く辨ずとは何ぞや。曰く、人各長ずる所あり。其長ずる所に因りて職を授くと。溫公（宋の宰相司馬溫公）の所謂德行である者は教化を掌り、文學ある者は顧問に待ち、政術ある者は守長となり、勇略ある者は將帥となるが如き是れなり。苟も其長ずる所を知らんと欲せば、士を取るに策論を以てするに如くはなし（論文試験で人材を登用する）。策論は唯だ議論の純粹なるを取りて造語の巧拙に拘らず（議論の正しきを求めて文章の巧拙などは問題でない）上に賢を好むの實あらば、則ち人なきを憂へず、且つ夫れ人才は之を育するに道あらば、則ち成るものである。（中略）古より國家の害。收斂を最と爲す、故に上に仁義の心あらば、則ち邪說憂ふるに足らず。

器械能く利なりとは何ぞや。曰く、夫れ器械は兵の大威（力）なり、方今治平久しく、人々亂を忘れ、器械を造製すること、率ね以て商人に委し、粉飾を先にして精利を後にす、趙常吉（神器陣の作者、趙士禎）曰く「器を造るは器を用ふるの人に非ざれば、未だ必ずしも精緻堅固ならず」と。凡そ器械の利、守具は愈々重くして愈々妙に、戦具は愈々軽くして愈々妙なり。蓋し守は

不敗の地に立ちて動搖せざるを以て主と爲し、戦は敵の敗を失せずして變化測られざるを以て主と爲す。故に防寇に在りては、則ち銃砲の利は重大にして遠きに及ぶに在り。

操練、法ありとは何ぞ。曰く、溫公曰く、「兵を養ふの術は精ならんことを務めて、多からんことを務めず」と。蓋し精を務むるは操練に如くはなし。（訓練、精兵主義）夫れ操練の法、火器に長ずる者を以て一卒と爲し、長槍・短兵に長ずる者を以て通じて一卒と爲し、弓・馬に長ずる者を以て通じて一卒と爲し、騎射の法を習はしむ。

戦守、術ありとは何ぞや。曰く、人才既に辨じ、器械既に利あらば、則ち將に之を實戦に施さんとす、實戦の法、賊、海にありて、陸を去ること七八町ならば、則ち大砲數筒を以てこれを拒守す、十町内に近づかば、則ち所謂數丸なるものを以て急に打放し、賊をして陸に上るに及ばざらしむ（兵器の進歩せる現時に於ては兒戲に等しきが如き觀あるも、幕末當時の事情と照應して考ふる時は、松陰先生はさすがに兵學者であり、實戦的であり、技術的であつた、而かも訓練精兵主義で、また臨機應變的な突撃主義でもあつた。）。

四者既に備はりて而る後に武備張るべし。之に繼ぐに藩屏を置き、糧餉を給し、軍馬を飼ふ

ことを以てす。藩屏を置くとは、猶ほ古の軍國のごとくす。謂へらく兵士各々隊伍を爲し、頭目を置き、邊陲喉咽の地ごとに堡を營み、據守して空虚攻むべきの地なからしむ。

然れども其本を推せば、人才能く辨ずることのみ。人才既に辨すれば、何れも皆學らん。又其本を推せば、君心の仁義のみ。孟子曰く『君仁なれば仁ならざるなく、君義なれば義ならざるなし』(孟子、離婁上篇)と。余、深く之を信ず。(未忍校稿)

と、さすがに松陰先生は兵學者であり、實學者であり、言行一致の實踐家であつただけに、事細かに具體的に論及されてゐる。現今とは時代が異り、兵器が異り、國狀も異つてゐるから、そのまゝ現代的に論議することは出来ない。しかし國難打開を、國民そのものゝ素質訓練に求めてゐられることは、千古不易の根本義であつて、その精神そのものに對しては、時代の如何を問はず、國民の如何なるを問はず、不變の信條である。茲に松陰先生のあの先覺的識見が、いつも光を放つて居るわけである。殊に才能辨と君心仁義を説ひてゐられる所に、松陰先生の崇高なる道義精神が嚴として存してゐるのである。

しかし松陰先生は國內體制の整備と人心の歸一統合との急務を説かれつゝも、尙その間に於て、

いつ何時如何なる事態が突發するかも知れない。諸外夷は城下に迫つて間髪を容れず、鎧袖觸發の危機がある。一旦外敵襲來戦争ともなれば、またこれに直應し得るだけの對策術謀を講じて置かなければならぬとされて、臨戦時下に於ける國民指導の精神として左の如く説ひてゐられる。

豊公の朝鮮を征するや、土人は我が兵勢を畏れ、分散して荒野に遁逃し、食盡きて餓死するものが極めて多かつた。大鹽平八郎が大阪に亂を起した時は、老幼恟々として哭痛の聲が街に満ちたのであつた。これによつて觀れば、方今天下事なしと雖も、一旦戦争が起つたなれば、孰れか餓死と哭痛とのないといふことを保證するものがあらうか。さすれば之を制するの術策を豫め講じて置かなければなるまい。

いま我戰國時代の事から推考すれば、大率その國に難があれば、則ち人民は老を扶け幼を携へ、食糧をつゝみ、財を收めて、深山幽谷に避け、敵が退けば則ちもとの所に歸つて來てゐる。幸にして其家屋が毀傷することがなければ甚だ可とする所であつた。

蓋し昔の人民は戰に習れてゐた。平常から災變を思つて専心用意をして居るのであつた。故に忙匆と奔走するにしても、老を後にし幼を棄つるといふことはなかつたのである。又、食糧を

忘れ財を忘るといふこともなかつたのである。しかしいまではさういふわけには行かない。戦に習れざる人を以て、變を慮るの心なき人々である。善くこれを制せずして、かれ等が自ら爲すまゝに任せて置いたなれば、則ち狼狽紛擾、如何とも爲すことは出来まい。而してこれを制するの術策としては、平常に於て法令を出して『たとへ賊軍が襲來し猛威懼るゝものありとも、別に細民にまでも危害を加ふるものではない。必ず能くその居に安んじ、騒ぐなかれ、走るなかれ、家隣・里郷（村々や隣保のこと）には皆自ら長あり、命令を聽きては背くことなかれ、家に丁壯（青年のこと）なくして、老幼婦子、隣里に寓する者は、隣里に於て恵み世話をしやれ、紛紜擾亂するとも隊部に糺り入つてはならぬ。そして斯様の事を亂り侵すものがあれば斬罪に處す云々

と説かれてゐられる。松陰先生は外敵來襲時に於ける國民の一大擾亂を豫め察知洞見されて、人心の動搖をいたく憂懼され、國民の潰走混雜を痛心されてゐる。翻つて思ふに、松陰先生當時に於てさへも、かうしたことが豫想痛念された。それが現代のやうに敵機來襲空爆々々となつたらさうであらうか。未だかつて經驗どころではない。敵機の

影さへ見たことのない吾が國民の動搖はいまから思ひやらねる。然るに松陰先生はあの時代に於て既に微に入り細に互り、その對策に付て懇に爲政者に教へ國民に注意警告を發してゐられる。眞に信頼すべき爲政者であり指導者であり、實に有難い先達ではあるまいか。そして先生は更に言を續けられて

また豫め之が法を爲り、町奉行は市街を巡行し、代官は郡郷を巡行し、令を犯す者を捕へ、之を諭し之を誡め、要約の處毎に關所を置き、兵を差して遁逃の人民を防ぎ、銃砲兵器を具して不慮に備へ守つてやる。かくの如くしてやるなれば、一郡一郷が金城湯池の如き堅固なる地區となる。然る後人心が始めて定まるものである。それでも動搖して遁逃するものが街に滿ち關に逼る様なことがあれば、則ち其一二を斬りて以て徇ふ。これで人心の定まらないといふことはない。

と、恰度昭和現代の町内會長や在郷軍人會長あたりが、一朝有事の場合には、やらねばならぬ方策そのままを、幕末維新前に於て綿密に説き聞かしてゐられる。而かも治安維持のためには、泣いて馬糞を斬つて動搖防止の全責任に當るべきであると『一二を斬つて以て徇ふ』と、斷乎と言

ひ放つてゐられる、火急存亡の場合に於ける松陰先生の魂の力強さが思ひやられる。鬼神のやうな籌謀が自づと頭を下げさすものがある。しかし、これほどの力と斷と信念とがあれば、却つてこれが有難い頼りとなつて安堵することが出来る。

しかし、松陰先生はこれを以て最善の方策なりとは考へてゐられない。寧ろ「慘」なるものと云つてゐられる。しかしかうした存亡緊急の場合に國民を動搖さしてはならない、狼狽さしてはならない、故に迂策ではあり、次善ではあるが、萬止むを得ないこととして

夫れ愚純にして慮なき者は細民（國民といふに同じ）より甚しきはなしである。必ずや上に法あり、これで下を教へ、處置宜しきを得て、安堵することが出来る。これは全策ではないが、迂策であると云つて爲さず、變に臨みて身自ら狼狽するものに比すれば、はるかにましである。また慘であるからと云つて爲さず、事に遭ひて民をして餓死せしむるのに比すれば寧ろ慘ではない。

或は曰く「戰士は戦ひ、守兵は守り、賊を鑿にして後、民を安んず、何ぞ必ずしも戦守の兵を減じて四方に分差し、その遁逃を制するの煩を之れ爲さんや」と。余爲へらく、然らずと、

何となれば則ち人民の遁逃をそのままにしておけば、則ち士の心も亦堅らず、吾が士の心堅からずして、賊勢盛なれば、到底何を以て能く賊を鑿にせんやである。

且つ夫れ人民は國の精氣根本である。精氣耗て四體衰へ、根本搖ぎて枝葉緩む。人民逃ぐれば則ち戦ひ勝つと雖も、守り堅しと雖も、亦暫しのみ。何を以て能く永久ならんやである。（未焚稿・

嘉永元年五月）

と、松陰先生は人民は國家の精氣根本である。この精氣が衰へては根本が搖ぎ枝葉が凋む。これでは何事も出来るものではない。よしや一時は戦に勝つても、それは暫時のことであつて、到底最後の勝利者となることは出来ない。長期戦に備ふる立て前が大事である。それにはどうしても、國民の精氣培養振作に努め、長期戦に堪へ得るだけの國家總力戦への體制を確立し得る國家の總力、國民の精氣氣魄、これを根本とする國家臨戦體制を速成完備するにあらねばならぬとされてゐる。

松陰先生は、かうした國家臨戦體制速成急務を論じてゐらるゝと共に、先生の持論たる國民精氣の振作といふ見地よりして「天下戦争之秋に相成候はゞ、民の動搖如何にして是を制すべき

や、これは要するに、平常より厚仁深澤を以て、人心を得るより外には方策がない」として外患内亂、常に相因ること、古より其例寡からず、今更縷述にも及ばぬ事なり。然るに今日外患之事誠に迫り、人々皆海防々々と云ざるはなし。然るに未だ民政々々といふ人あるを聞かず。夫れ外患内亂必相因ることなれば、海防民政可兼舉こと固なり、何分にも四窮は王政の先ずる所なれば、好制度を設け、各其所を得させ度ものに御座候、西洋夷狄にさへ貧院・病院・幼院などの設けあつて下を惠ぐむの道を行ふ、大養徳御國に於て、却て此制度なきは豈大缺典ならず哉、上慢暴下之罪、今之有司は不免事と奉存候、重稅暴斂、失民心事、此亦其一大端に御座候、鎌倉邊之民情を察し候而も、農民軍役に苦み、上を怨むこと夥しき事なれば、天下戰爭之秋に相成候はゞ、民の動搖如何にして是を制すべきや(中略)厚仁深澤得人心ること、方今至急之務と奉存候。(嘉永六年九月兄梅太郎宛)

と、實に松陰先生ほど、實際的で具體的で眞摯眞劍な至誠忠實な、國思ひ民思ひの仁愛的政治家はないと云つても過言ではあるまい。

願れば、昭和當代の飛行機時代、大戦艦主義での制海制空權覇制を以て國家國民の生命を扼せ

んとする時代においても、八十年前におけるこれ等松陰先生の所論對策は、そのまゝ實際に活用され、運営さるゝ所であつて、その根本的構想、精神理念に關しては、何等變りのあるべき筋合のものではないのである。茲に松陰先生のあの烈々たる憂國至誠の對策が、千古不易の光を後昆にたれてゐるのである。

松陰先生對外思想の淵源

これまでは松陰先生の大體・南進政策を論述すると共に、これが推進力たる國內諸體制の整備問題に關してその概要を説論し來つたのである。然るに、先生の大體・南進論は期せずして現代の大東亞共榮圈確立問題にびつたり符合するのみならず、更に雄大なる廣範圍においてこれを求められ、而かも對英・米・蘇問題にまでも論及せられてゐる、のみならず、これが推進實現のために臨戰國內諸體制の確立までも論究されてゐるのであつて、そのすべてが全く現代日本の進路に符合一致してゐる、恰も八十有餘年前に於て、昭和現代人に海外發展の國是國策の一大指針を親しく授けてゐられるかの感がするのである。

如何に鋭智明敏、高邁達識の松陰先生なりとは云へ、そもく如何にしてかく迄も遠謀深慮の海外對策を思案工夫さるゝに至つたのであらうか。かうした吾が大和民族の對外發展の一大使命と共に對外思想の根本的淵源ともいふべきものに付き、新めて茲に考究検討

しなければなるまい。

松陰先生の時代別と其師範

松陰先生の三十年の生涯を時代的に區分して、その師範關係と共に、學問思想の淵源とでもいふべきものを、端的且つ要約的に觀察説明するなれば、それは即ち天保元年庚寅八月四日、萩城東松下村護國山南麓團子巖の樹々亭に呱呱の聲をあげられてから、明倫館に登られ、家學山鹿流兵學の教授をされた十歳（天保十年）までの間を、その幼年時代と見なければなるまい。而してこの時代の先生の學問は、只家庭の父叔より家學と諸經書その他の教授を受けられたまでのものであるが、而かも早熟夙成の松陰先生は既に立派な一家の兵學者となられ、また卓材俊毫の學徒となられたわけである。そしてこの時代においては、父百合之助よりは文政十年の詔書や、神國由來等の講述により、早くも勤皇思想と國體觀念とを強く魂に打ち込まれてゐるのである。また松下村塾創始者であつた叔父玉木文之進よりは、家學の山鹿流兵書は勿論、經典的大義名分論の道義的實踐主義の教育をうけられ、養父にして叔父であつた吉田大助よりは、たとへ短期間で

あつたとはいへ、家學と節義的思想の感化を受けられたのであつて、この時代に於て既に後の勤皇殉國烈士吉田松陰そのもの素地が出来上つてゐたのであつた。

この十歳から二十歳(嘉永二年)までの間は、いはゞ先生の勤學修業の時代ともいふべきであつて、諸家の兵學は勿論、諸書研鑽精進、大に德行學業を積まれた時代であつた。従つて家學山鹿流兵學の免許皆傳を得られたのは勿論、既に堂々たる師家として一門を張られ、その卓越せる兵學所論の如きは、當時斯界の先覺をして撞着せしめられてゐたのであり、また百家經義に通曉せられてゐた實に立派な儒者でもあつたのである。而かもこの時代たる十五六歳にして早くも外夷の東進を憂念せられて海防對策の急務を論じて一世を警動せしめられ、殊に山田宇右衛門、山田亦介等の所論に發憤激勵されて、外寇を以て國家の深憂なりとされ、終生この難衝に當らんと觀念せられ、且又尊王護國の大精神を固められた時代でもあつたのである。而かもその學問をして、學問のための讀書にあらず、修業のための勤學にあらず、その學業をして實際に活用し、實社會の實題として、これを運営する、即ち學業をして實際に活かすといふことに工夫を向けられた時代であつた。現にその終期たる嘉永元年(先生十九歳)十月には明倫館再興に關する意見書をもつて

賞罰・風俗・規則・試法・選舉等を切論されて、人材の育成登用と共に士氣の振作を高唱せられ、また同二年には兵學寮提書、門弟等級次第、水陸戰略等の如き種々なる上書策言を呈上されてゐるのである。これ等も要する所は、外夷對策の根本義、乃至は外に向つて積極的に國威を伸張せんとするには、退いて國內人心の統一作興と共に、國內諸體別の整備を急務なりと考へられたからであつた。従つてこれ等の實現化のために、續いて、その年の七月に長州の沿岸たる大津・豊浦・赤間關等の海岸を巡視して、海防の實際を論策されてゐるのである。また十月には門人を松本村明安寺境内に招呼して、羽賀臺大演習を實地に試みて居られるのである。

次に二十一歳(嘉永三年)より二十四歳までの間は先生の周遊時代とも謂ふべきものである。即ち嘉永三年八月には鎮西に旅行して九州諸藩の名士鴻儒を訪問せられ、殊に平戸に於ては葉山左内・山鹿萬介に家學を叩き、また豊島權太夫等の如き新智識連中とも談合せられ、多くの新譯珍書をも讀破されたのである。長崎に於ては海外の事情を探究され殊に蘭館唐船の様子なども實地に見聞されてゐる。就中英夷の支那侵略の實際や西歐諸國の東洋進出の實情をも探知されて、憂國の情愈々切なるを加へられたのであつた。この旅行は實に松陰先生一生に於ける海外新智識の基

礎的感念を得られたと共に、老獪なる外夷の東亞侵略に對する悲憤慷慨、更に海防對策に關する憂國の赤心を固めて、外寇對策を以て終生己が責務なりと覺悟さるゝに至つた時代であつた。

續いて、同四年三月には、兵學研究として藩主に從ひ江戸遊學に上られ、佐久間象山・安積良齋・山鹿素水・古賀茶溪等に就學せられて、愈々先生は當時の檜舞臺たる江戸に於て、文武の研修と共に天下の形勢、海外の實情、外夷急迫の現状更に日本國內崩壞の兆なども自覺感得されたのと共に、當時北邊蝦夷地方に於けるロシアの南下狀況等を聞知して、いたく國家の前途を憂慮さるゝに至つたのである。

更にこの年十二月には江戸藩邸を亡命し、東北奥羽の地を歴遊されて、翌五年四月江戸に歸へられ、續いて五月歸藩の上謹慎せられ、亡命の罪を以て士籍を削り世祿を奪はれたのである。處がこの幽居謹慎中に於て、先生は至誠憂國の情默し難く、消極的對外海防策的な見地より、奮然と振ひ立つて、積極的に日本現状の打破と共に國內體制再組織を敢行し、斷然吾より進取的に五大洲に乗り出さんと『皇國雄略』の壮志を起され、遠海航路の深謀を樹立して、積極的に進取的に『大陸・南進政策』と共に、更に八紘一宇の肇國精神を以て、吾が千古不易の國是國策

なりと絶叫さるゝに至つたのである。

翌六年正月には三度萩を發し、途中攝津、河内、大和、伊勢、美濃、上野を経て、この間森田節齋・谷三山・足代權太夫・齋藤拙堂等を訪問、時事を論談されて、五月江戸に入られたのである。更に九月には江戸を發して、第一次の海外渡航計畫たる長崎の露艦に搭乘出遊せんとして、十月廿七日長崎に着せられたが、既に去れる後の事であつて、大志も空しく蹉跎した所であつた。これより脚を轉じて熊本に赴き、同志宮部鼎藏、野口直之尤を伴ふて一應萩に歸へられ、滯留數日にして十二月四日京都に上り、梅田雲漢・梁川星巖等を訪問せられ、再び伊藝・尾張を経て、十二月廿七日江戸に着せられたのである。この時代に於ては『將及私言』『急務條議』『必勝策』『急務則』(何れも前評)等を著はして海防の急務を説かれ、大義名分を高唱せられ、尊皇護國の大精神を以て日夜焦心苦慮、天下の人心に數次警告を發せられてゐたのであつた。即ち先生の旅行は周遊と云つても單なる周遊ではなかつたのである。修業と云つても單なる學修ではなかつたのである。實に先生は周遊によつて實際の學問をなし、天下の實情を究め、その實際的天下の智識を以て、これを當時の國狀に活かして作用し、學問の眞髓を以て國家の實際に奉公せんと

された所であつて、周遊と實學問、實學問と尊皇護國の實活動、これが即ち松陰先生の周遊であり、學問であり、眞生命であつたのである。而してこの國家の實際への奉公、これが當時に於ける對外國策の樹立と共に大陸・南進論となつて、八紘一宇肇國精神の宣揚といふことになつたのである。

最後に二十五歳(安政元年)から安政六年十月廿七日、實に三十年の短き生命を以て江戸傳馬町刑場の露と消えられたるこの六ヶ年間こそ、實に生血のしたゝる活躍時代であり、火の噴き出る實際運動の時代であつた。下田踏海の壯舉は敗れて、江戸傳馬町の投獄となり、兩度萩野山の獄囚となられ、また悲愴痛烈なりし江戸死獄の場面とはなつたのである、その間、二ヶ年有半に於ける松下村塾の殉國教育は、將に松陰先生の大精神大抱負を確實堅固に植ゑ付けられて、千萬世不朽の基礎が出来たわけであり、維新回天鴻業の基が作られたのであつた。かくして黎明新日本創建の土臺がガツチリと建設されたわけである。

いま松陰先生が各年代別に於ける、これ等の關係並に其師範就學狀況を簡約すると、大要次の通りである。

幼年時代

| | | | |
|----|-----------|--------------------|-------|
| 壹歳 | 天保元年八月四日生 | 勤勞・好學・敬神家・父・山鹿流兵學師 | 杉百合之助 |
| 拾歳 | 明倫館出仕家學教授 | 家・養父・叔父 | 吉田大助 |
| | | 松下村塾創立者・終生之師叔父 | 玉木文之進 |

修業時代

| | | | |
|-----|-------------------------------|-------------------|--------------------------|
| 拾壹歳 | 武教全書を藩主に進講せらる | 山田宇右衛門 (終生之師) | 萬國の形勢と外夷の東進を説く、先生大に發憤せらる |
| 拾五歳 | 世界の形勢と共に外夷東進の實情を知られ愛國の大志を立てらる | 山田亦介 (長沼流兵學) | |
| | | 佐藤信寛 (兵要録) | |
| | | 飯田猪之助 (西洋陣法) | |
| | | 林 眞人 (家學後見として完成す) | 家學の興隆を説き、先生を激勵す |
| 貳拾歳 | 長門沿岸海防の急務を説かれ、家學の實演を試みらる | 村田清風 | 諸國遊歴を勸む、先生愛國の大志愈々暢ぶ |

〔鎮西旅行〕 海外事情の探究と共に外國新書を讀破せられ、外夷急迫を悲憤せらる

〔葉山左内〕 家學の兵書は勿論、友那關係書及海外新書を研究せらる

周遊時代

貳拾壹歳

江戸遊學

文武研修と共に世界の大勢を開
知せられ、憂國の情益々加はる

久佐間象山

海外雄略を以て大
に先生を勵ます

東北遊歴

蝦夷の防備と共にロシアの南下
を深憂せらる

安積良齋

貳拾四歳

近畿を経て再
度の江戸行

外夷の急迫を目賭せられ、
邊海防備、海軍擴充、國內
體制整備を上書せらる

古賀茶溪

山鹿素水

森田節齋

露艦に搭乘せん
としての長崎行

海外出遊第一次計畫

竹院和尚

大志雄略を以て懲
慝す

米・露使節謀殺計畫(中止)

下田踏海敗學(第二次海外出遊計畫)

江戸傳馬町投獄

萩野山獄囚居(幽囚録—大陸・南進論成る)

活躍時代

貳拾五歳

松下村塾の殉國教育

參拾歳

水野要擊策

間部詮勝要擊計畫

兩度の野山投獄

藩主の要駕策

安政六年十月廿七日江戸傳馬町獄刑死

山田宇右衛門頼毅、世界の大事を説く

山田宇右衛門——名は頼毅、號は星山又は治心氣齋、安政元年二月浦賀總奉行の參謀となり、
二年七月夷艦應接掛として相模に出成した。文久元年五月英艦の赤馬關に來泊するや、彼は山
田亦介と共に藩旨をうけて事に當る。二年二月擢んでられて參政となる。また八月學習院掛を
以て上東し、大に勤皇のことに力を致す。既にして國に歸り、長門奥阿武の代官となり、慶應元
年正月表番頭格に進み兵學校教授となる、二月また參政に復して藩政を革新し、兵備を擴充し
て幕兵の來攻に備へた。慶應丙寅の夏、長州が四境の幕兵を拂ひしは宇右衛門の功績最も多か
りしといはれて居る。五月撫育掛を兼ね、三年六月民政方改正掛となり、十一月十一日病んで
山口に死す、時年五十又五。

その人と爲り強毅謙遜にして質素を尙ぶ。三度、郡の代官となり、至る所治績大に擧る。平生黙して言はざるも、事に觸れて一度その胸臆を披けば、堂々たる議論、人の意表に出で、之がため心膽を奪はれざるものなしといはれてゐた程である。夙に山鹿流兵學を修め、吉田大助の高足であつて、後に西洋兵術をも兼修した、安政年中、藩の兵別を革新せし際、歩兵舊習を墨株し、また門閥を争ふて紛擾せしが、彼は藩命を以て直に之を鎮定したのであつた。かの中島名左衛門（長崎の人、高島秋帆門、長州に來り西洋陣法に改む、文久三年馬關砲臺を造る、歿年四十七、贈正五位）村田藏六（大村益次郎）等皆この宇右衛門の推薦によるものであつた。明治三十一年七月特旨を以て正四位を贈らる。

この山田宇右衛門が弘化元年の初め（松陰先生十五歳）江戸より萩に歸り、先生に箕作省吾の坤輿圖識及地圖を興へて謂ふには『世變近きにあり、屑々稿簡を執り詩書を事として空言を放ち、悠悠歲月を徒過するは儒儒の事である。汝何んぞ活眼を聞き宇内の形勢を探究し、天下の推移を達觀せざるや』とて、萬國の狀勢を説いて、大に先生を激勵したのである。是れより先生の憂國の志は愈振ひ立ち、發憤精勵、進んで洋籍の研究をも始められ、松陰先生がその終身外寇を以て國家の深憂

とせられ、尊皇護國の大精神を固められたるも、蓋し之に基くものなりといはれてゐるのである。

しかし松陰先生は幼時既に父百合之助より水戸會澤正志の新論などによつて尊皇の大精神を打ち込まれられ、かの『留魂錄』に書き留めてゐられる

『七度も生かへりつゝ夷をぞ拂はんこゝろ吾れ忘れめや』

の歌の如く、外夷悲憤の熱血的心情を涵養されてゐたのである。また漸く長ぜらるゝに及びては、海外新話（夷匪犯疆録を主とするものであつて、英國の支那侵略阿片戰爭を主とするもの）等を抄録研究されてもゐる。かうした様に海外事情に付ては、幼年ながら常に多大の關心を有してゐられ、かの海國兵談を讀まれて『外寇の猖狂奸雄、惡むべく畏るべきを始めて知る』とまでも謂つてゐらるゝのである。

従つて弘化三年（松陰先生十七歳）早くも先生は天下安しと雖も、戰を忘るれば必ず危険である、外侮を蒙るの外はない。然し太平なれば戰を忘るゝのは自然の勢である。そしてか様な時こそ外夷が乘じ來るものである。方今太平已に久し、武備も漸く弛廢してゐる。而かも洋賊は日に熾に月に盛であつて、前年英國は印度を略し

滿洲支那をも侵し來つてゐる、何時皇國を覬覦するかも知れない。さすれば古訓を師 上古の國威振張をさす」として文教を起し、武備を奮ふの外はない。(未焚稿)

といつてゐられる。また、

滿清は英夷の侵略によつて直に瓦解土崩し、償金を出して和議を求めたが、未だ一人の義を唱ふるものもなかつたのである。これは綱紀が弛廢し、賢材が登用されず、國民の訓練が不足で國力が振はなかつたからである。然し日本人としては、その守る所の土地は祖宗の土地であり、養ふ所の將士は祖宗の將士であり、世祿の人々である、故に忠義を以永年養成されたる恩義に報ぜんことを思はないものは一人もあるべきでないから、この點を留意して大に武備を整へなければならぬ云々。

とも謂つてゐられる、この時代に於ける松陰先生の研究的態度思想的動向といふものを窺ひ知ることが出来る。

その後嘉永元年(松陰先生十九歳)松陰先生は

蘭人が滿清事件を記述せるものを見るに、英兵の進む所、城は必ず陥り、艦は必ず破られ、陣

營は必ず潰れてゐる。これは英夷の實情を十分に知るだけの賢將がなかつたからである。とかく西洋夷は智力を竭して自國の權益のみを争ふてゐる。故に上下一心となつて義勇を奮ふなれば、外夷は到底窺ふことは出来ないのである。自分の聞く所によれば、前年佛蘭西が琉球に親書を致し來つたが、その書面は實に倨傲無禮のものであつて、その弱小を侮つたものであつた。しかし我が長崎に來るに及んでは警衛嚴守であつたがために、彼は恐れて倉卒として退去した處である。且西洋夷は亞細亞・豪斯多竦利・亞米利加諸州各地に於ては侵略せざる所なしと云はれてゐるが、獨りアフリカに對しては未だ餘り手出しをしないことである。これは土人が盜賊を以て生業とし、殺害を好んで事とするが故に恐怖してのことである。かくの如く西洋夷は弱者には強いが強者には弱く、すべてが恫喝と脅迫と威壓とである。(未焚稿)

と論破して、これ等の所論を、その師たる山田宇右衛門に提示し、その教を請ふてゐられる所である。これに對し山田は

外國の實情は徹底的に之を審にしなければならぬ。審にしなければ、その恃むべきに安んじて自ら足れりとなすものであつて、是れは彼(外夷の事情)を知らずと云ふべきである、これ

(外夷の事情)を審にするなれば緩急の對策がなくてはならない。然るに、この對策のないのは、その恃むべきを捨て、他に求むるからである。是れは己(自國の情勢)を知らざるものである。と評論を加へてゐるが如く、さすがに師弟共に一世權威の兵學者である、時代的先覺經倫家であつただけあつて、兵書孫子の眞髓に徹し、國防國家の眞諦に觸れて、互に心膽を碎き論じ合つてゐる所である。そして松陰先生は、これ等所論の終結として

上は孫・吳(兵書孫子・吳子)より下は諸家の學說を通習し、聖經賢傳を原ね、國を立て兵を行ふの大本を知り、時に臨み事に處するの萬變に通じ、華夷(日本と外國)古今の史籍を覽、制度の沿革、人情の異同、萬國の形勢を観るは、孤陋に陥らざる所以である。しかし雜博(の學問)は用なし、博は之を實に期す。これを得(心に)たりと爲す。力を博(學)に用ひ、心を實(得)に用ひ、之を久しくして、見識高邁に知慮圓活に、胸襟濶大に、天下の理一本にして萬殊、一部の全書實に全きを爲すに至るものである云々。(嘉永二年二月、未焚稿・兵學々規)

と、さすがに松陰先生は兵學者であり、經學家であり、實踐家であり、而かも先達の指導教育者でもあつた、學問の眞諦は、この一節に盡きて、これより外に出づるものはあるまい。而かも

この理念を以て憂國の至情を動かし、外夷悲憤の熱情を燃やし、あの烈々たる殉國精神、あの灼熱的大義心を以て外寇對策、即ち高度國防國家建設への思索工夫をめぐらせられたのである。

爾來、松陰先生は外寇對策の重責を以て己れが終生の大任とされて、常に烈々たる思索を胸臆に抱き、寸時も忘れられることなく研鑽努力されたのであつて、従つて江戸遊學當時に於ても邊陲外夷急迫の狀に關しては、傳聞さるゝ度毎に宇右衛門に報導されてゐるのであつて、薩摩兵學者肝付七之丞(名は兼武・海門と號す、天文學を以て薩摩に仕へ、嘉永三年東北蝦夷地方を巡遊して江戸に歸る)が松前地方視察後江戸に歸りての談なりとして

近歲西洋の船、壹岐對馬の間を過ぎて東上し、松前・津輕の峽を越えて南折するもの多し、未だ其何の緣故たるを審かにせず、之を水府の豐田彦次郎(天功と號す、水戸彰考館總裁)に聞きしに、云ふ、銚子口を距る百五十里許り、洋中に島あり、加治加(これは昔亞米利加の地名とあればカリホルニアなるべし、百五十里とは實におもしろいこと)と名づけ、歐人、場を開きて貿易す、北人は北よりし、西夷は西よりしてこゝに會す、西夷は本國より支那の浙粵地方(上海廣東)に至りて貿易し、又轉じて加治加に至り、而して直ちに本國に歸る(中略)北國の漕船漁舟、洋夷の奪掠

する所となるもの甚だ多し、これを官に首せば往々嚴責を蒙る、故に大掠に非ざるよりは隱匿して首さず、之を渡越（佐渡越後）の船頭に聞く云々

と傳聞さるゝまゝに詳しく報導されてゐると共に、また當時における我が國邊疆外迫の様子を知ることが出来る。

その後嘉永六年再度江戸に上られた時には、天下の狀勢は全く一變して、米夷の威壓脅迫は愈愈急を告げてゐる。恰度この時は米使ペルリ提督が黒船數隻を率ひて浦賀港頭（うらが）に乗り込んで來た時であつた。徳川三百年鎖國の迷夢が一時に破れて、國內上下騒然、人心は大動搖を來たしたのであつた。かの先覺卓識經世家の佐久間象山でさへも「七隻天船來三聖東。江都官吏太倥傯。梅花不識人間事。依舊靖芬吟三海風。」と、蒲田梅屋敷の壁に題して東西に走つたときへ云はれてゐる程、江戸の人士は狼狽したのであつた。先生も直に浦賀に行つて事情を探り江戸に歸つてゐられるが、當時における松陰先生の考へとしては、今の急迫せる重大國難は到底北地蝦夷におけるロシアの侵略などと對比して云爲すべき問題ではない。實に江戸城下の盟ひ、降伏が眼前に迫つて來てゐる。日頃の主張持論を果すは將にこの秋じや、防長二州が巍然と立つて、天下の信

望を双肩に荷ひ、外夷の辱を清めなくてはならないと、宇右衛門始め同志諸友に一書を送つて、この急迫せる外夷國難を如何に觀察さるゝか、サア、お國の大事到來、大いにやらなければならぬと同志を鞭撻してゐらるゝのである。

この米艦浦賀來泊の擧あつて以來といふものは、松陰先生は最早ジツトはしてゐられない。あの烈々熱火の如き憂國の至誠を披瀝して上書に建白に對策に同志の誘導に、日夜懊惱心膽を碎いてゐるのである。しかし終結の所は一刻も早く海を航して海外の實情を探究しなくてはならない、これが何よりの先決問題であり、また日頃の志であり、望みでもあるとして、遂にその年の七月露艦の長崎に來れるを好機として、佐久間象山・永島三平、柱小五郎等の同志と圖り、遂に九月十八日江戸を發して長崎に下り、露艦への搭乗を敢行されたものであるが、これは大志空しく失敗に終つたのであつて、これ等の關係については既に詳述し盡したのである。

（松陰先生と山田治心氣齋との師弟の關係を詳知せんとさるゝものは、拙著「吉田松陰之殉國教育」を參考せられたし）

山田亦介また外夷の東漸を説く

山田亦介、幼字は卯七郎、名は公章又は實之、號は愛山又は含章齋といひ村田清風の甥である。夙に長沼流の兵學を修め、天保七年藩主の近侍となり、同十年御密用方祐筆（藩府の顧問格）に轉じ、海寇手當方を兼ね、弘化嘉永の間に於ては、最も海防に心を碎き、安政五年造船鑄砲の諸務を司り、又兵庫警備の任に當る。同六年藩の軍政改革に力を竭し、萬延元年には來原良藏と共に西洋軍制を參酌して新に之を編制し、又軍艦庚申丸を造りて海事の衝に當る。其後文久二年村田忠之等と共に上京して尊攘の議に參劃し、翌年八月馬關事變に當り偉功を樹てしが、藩内正俗争鬪の際、遂に尖戸左馬介等同志七名と共に野山獄に斬らる。時に元治元年十二月十九日、時年五十六。贈正四位、辭世の歌に、

散るもよし芳野の山の山櫻

花にたくへし武士の身は

松陰先生がこの亦介に就學さるゝに至つたのは、前の山田宇右衛門頼毅の德憑によるものであ

つて、先生十六歳の時であつた。先覺的卓識家であつた亦介が、先生に言ふには「近時歐羅巴の諸國は年々東洋方面を侵略し、遂に印度を平け、滿清を辱かしめ、更に琉球に入り、今や將に我が國に逼らんとしてゐる。これ、かの國に必らず豪傑の士があるからのことである。豪傑の士がゐれば、その國は必ず強く盛で行く。然るが故に、斯く雄圖を懷き、長策を建て、以て宇内を凌駕してゐるのである。吾等區々として徒に防禦のみを論議すべき秋ではない。抑も我邦は萬國の上流に位置し、古より威を海外に輝かせしもの、上は則ち神功皇后あり、下は則ち北條・豊臣あり、汝年少なりと雖も異材なり、宜しく勉勵して非常の功を樹て名を海外に顯はすべきである云々」と、眞心誠意をこめて先生を激勵したのであつた。かやうなわけで、先生は亦介の藏本である『輿地誌略』などを借覽して亞細亞諸島・印度誌説・魯西亞・佛蘭西・歐洲誌略等と云つたやうに、諸外國の事情を専心研究されて入念に抄録までもされてゐるのである。これより先生は專念一意、亦介に就學さるゝと共に、兼ねて長沼流の兵學をも修めらるゝことになつたのである。

元來、この亦介は清水正徳に就いて長沼澹齋の兵學を修め、天保六年十二月にその免許を得てゐるのである。松陰先生は、亦介に就學後は日夜刻苦勉勵、早くも弘化三年三月には『兵要録』

二十二卷を修了せられたのであるが、その時、亦介はその『兵要録』の卷末に自己の所感を書して言ふには「余は子良（吉田大助、松陰先生の養父）と共に、當今の兵學者が太平に馴れて更に干戈の苦を思はず、従つて徒に兵學の外形姿容のみを論じて、その精神、その本務を忘れて俗論曲説をなすのを甚だ遺憾としてゐるのである。これが即ち兵道の衰微せる原因であるから、子良と共にこれを古に復せんと苦心したが、この盟友子良は不幸にも途中で遂に斃れたのであつて、實に残念なことをした云々」として、更に松陰先生に言ふに「養父大助の志を繼ぎ家業を隆に行き行くことが即ち孝子であり、また乃父（大助のこと）の志である」と、赤心をさめて誠と情と熱とを以て大に松陰先生を激勵したのであつて、先生もいたく感激感銘されたのであつた。もと／＼松陰先生と亦介とは兵學の上においては流派が異つてゐて、いはば他流の師家であつた。しかしかうした家學の精神的薰陶は勿論、外夷東漸憂國の至情を養はしめた點においては、終生之師たりし玉本文之進や山田宇右衛門等と何等の變りはない、従つて松陰先生も常に敬信思慕されてゐたのであつて、かの江戸時代に於ても常に文通せられ「山田亦介より海防臆測送り呉れ、慥に落手仕候。尙又先達て聖武記四冊彼方へ送り候處、是又落手之由云々」などと玉木に通信してゐられるのである。

が如く、常にかうした對外關係に關しては往復してゐられるのである。この『海防臆測』（古賀侗菴の著）は、亦介が安政五年九月兵庫の警備に役した時、沿海防備を憂ふるの餘り自ら板行して同志に頒布したものであつて、これがために遂にその職を奪はれ、屏居の身柄とまでなつたものであるが、これが因縁となつて、先生は江戸時代に古賀の門を叩かれたことも實に不思議なことである。

その後、先生の生涯は東奔西走、席更に暖まる暇もなく、迂餘曲折、幾度か生死の巷に往來せられ、投獄幽囚相續くと謂つた境涯であつたが、亦介に對する思慕の情は寸時も絶ゆることなく、綿々戀々たるものがあつたのである。殊に安政五年七月亦介に對する就學當時の過去より種々往事を追懷されて、細々と書き留められた一文こそ、實に松陰先生と亦介との情義を盡して餘りなきものであると共に、先生の憂國の至情、海外進展に對するその大志雄略、いまや舊師を誘導して尊攘義戰の渦中に、我も彼も共に一塊の火の玉となつて、飛び込まんとされてゐる烈々たる憂憤の切情を知ることが出来るのである。

山田含章齋先生に與ふるの書（幽室文稿）

(前略) 十四年前、僕年再めて十六、含章齋先生に謁す。先生一見し僕を招して謂つて曰く、「近時歐夷日に盛にして、東洋を侵蝕す。印度先づ其の毒を蒙り、而して滿清繼いで其の辱を受く。餘焰未だ熄まず、琉球に染頤し、突いて崎嶇に來る、天下の人士、方に心を痛め首を疾み、防禦を以て急務と爲す。殊て知らず夷の東侵する、彼れ必ず傑物あるを。傑物の在る所、其の國必ず強し、國強ければ敵なし。將に長策を振ひ、雄略を建てんとするには、人をして己れに備ふるの迫あらざらしむ、何ぞ區々防禦を爾々云はんや、維ふに我が神州は萬國の上游に屹立するも、古より威を海外に耀やかせし者、上は則ち神功、下は則ち時宗・秀吉の數人のみ。吾子年富み才足る、激昂以て勳名を萬國に建つる能はざれば即ち夫に非ざるなり」と。當時、僕自ら揣摩せず、慨然として自ら任じ、謂へらく、時宗・秀吉は誠に及び易からず、然れども義律・伯麥・馬里遜は陋夷の小材なり、何ぞ與に校ぶるに足らんやと。已にして先生再び重譴を蒙り、而して僕も一たび藩律に羅せられ、再び幕辟に陥る、困頓危惧の間、墨・魯・暗・佛・佛・佛・往來す、墨夷は東陲に在りて、素と甚だしくは亞細亞に通ぜず、合衆西濱を收めてより其の患殆ど歐夷より甚だし、時世の變革、誠に驚怛を爲すべし。而して向の言茫として隔夢の如きのみ。今日墨

使幕府を騙り、天下皆憤る。一旦 天子赫怒したまひ、萬邦皆震ふ。就中我が公、精誠英斷にして、百廢日に興る。事の歸宿、今未だ知るべからずと雖も、將に往く、上に神功あり、下に秀吉あり。君臣徳を同じうし、四夷を撻伐するの事を見はさんとす。ここに於てか、恍然として始めて覺る。前日先生の命へし所、徒らに誇大たるに非ずして、實效道ふべきものあるを。若ち天これを開けるあるか。抑々近時墨・魯の諸使、縦に來りて我を嚇す。恃む所、艦なり。艦已に成る。砲銃用あり。士卒措あり。雄略こゝに於てか建つべし。何ぞ獨り防禦を爾云はんや。

鎮西旅行時に於ける海外事情の研究

巴城の郷里における松陰先生の自修研鑽は、長州沿岸防備巡視を一期劃として、先生は愈々藩外にその夙志鵬翼をのばさるゝことになつたのである。これが即ち鎮西旅行への發途であつた。

松陰先生の九州旅行は、嘉永三年(先生二十一歳)八月廿五日萩城を發し、清末長府を経て馬關に出で、二十九日關淵龜山下より海峡を渡り、對岸の内裡(今の大里)に上陸して小倉に入り、これより佐賀・大村・長崎・平戸・天草・島原・熊本・柳川・久留米等を巡歴せられ、平戸に淹留五

十餘日、葉山左内・山鹿萬介に家學を叩き、また多くの新譯珍書を讀まれ、長崎においては譯官鄭幹介に支那語を問ひ、唐館蘭館を見物され、殊に蘭艦に上り、熊本においては宮部鼎藏・池部彌一郎・莊村右兵衛等、佐賀においては草場佩川・武富埴南等と交はり、十二月廿九日萩に歸られたのであつて、その間知る處文武の士を訪ねられ、殊に海外新書を研究されて西洋事情を親しく研修されたのであつた。當時先生の心境としては「人たるの道を修むるには、何も天下を周遊するの必要はない。しかし人間の心といふものは元來活物である。活物であるが故に、時に感じ物に觸れて發動する。その發動の機といふものが即ち周遊の利益である。さすれば修業工夫の第一歩は、やつぱり天下を周遊して智見を廣むるにある」と自ら謂つてゐるのであつて、この智見の擴達と名士訪問による心身の練磨とを期せられたのは勿論、當時外夷東進に伴ふ我が邊疆侵略をいたく憂慮されてゐたので、海防國策とその對夷術策樹立のために、一念を凝らしてゐられたからでもあつたのである。當時先生が長崎より郷里に送られたる書翰の一節に

古人云、儒生俗吏安知三事務、知三事務者、在三俊傑、士丈夫の志を立つるや、儒生も俗吏も爲すべき所に非ず、書を讀み古今に通識せざれば必ず俗吏輩に陥り、また徒らに書肆となれば即亦

儒生のみ。兩者皆俊傑の事に非ず。因て窃に俊傑の學如何と求むるに、簡にして要を得るにあり、明三國體、察三時勢、養三士心、遂三民生、審三古今明主賢相之事蹟、調三萬國治亂興亡之機關等の數件事を主本とし力を竭して萬卷の書を網羅せば儒生俗吏の二弊を脱却すべし。嘉永三年十一月と謂つて「時勢を察し、萬國治亂興亡の關係を洞見する」を先決とし、更に「皇國の道を明らかにする書及び聖經賢傳は暫くも座側より離すべからず」と謂つてゐるゝのを見れば、今回の旅行の志と共に、その目指されたる終局の目的は、大丈夫たるの學問修業と共に國家興隆を期すべき外夷制禦策樹立であつたことは云ふまでもあるまい。

従つて、平戸に至り葉山左門に就學さるゝに當つても

葉山先生は經術に通ぜられ、兵法に精しく、僕の欽慕切なる所である。そのみならず、近頃黠虜(外夷)邊海を覬覦し、奸情測り難きものがある。廟堂諸士、深慮して邊備を嚴戒し、天下の人々も各々その見る所を論じてゐる。いま先生は有爲の才を抱かれ、殊に平戸は長崎に隣接してゐて、外夷來寇の要衝である。従つて外虜の情狀を詳にし、またそれが禦侮の大計をも講究しなければならぬ云々。

と述べて、外夷折衝禦侮の對策承りたきものであるとしておられるのである。かやうなわけで、松陰先生が葉山を訪ねられて旅装を解かるゝ暇もなく第一に借覽手にされたものは『聖武記』（支那の國防用兵論）や『邊備摘案』（山鹿の著）等であつて、その他には『阿芙蓉彙聞』（これは隱憂錄と略同様のものであつて、蘭商の風説や阿片戦争の始末等を記述せるもの）、『海備芻言』（山鹿素水等）、『海防彙議』（會澤・齋藤諸家海防論）、『新論』（水戸會澤正志）等を日々讀破研究せられ、時には抄録し、また短評をも加へられ、或は輪講までもされてゐるのである。そして『海國必讀書十冊卒業す』なども日記に書き留めてゐられるのである。

また連日同志豊島權三郎等と共に海外事情を研究し、時事對策を論じてゐられるのであつて、當時手にされてゐた讀書名をザツト拾つてみるに

西洋人日本紀事・和蘭略記・北陸杞憂・西海紀事・譜厄利亞人性情志・丙戌異聞・泰西錄話・西洋諸夷略表・蒸汽船略説・鴉片始末・防海策（齋藤）・和蘭國王書翰・その他であつて、先生はこれ等の書本の著者名や、その内容摘録までもされてゐるのであつて、實に眞剣な心魂を打ち込んで研究されてゐるのである。その外夷近情は無論、海事國防に關する徹底的

な知識吸収と並びに憂國對策へと専念努力を拂つてゐられるのである。

かやうなわけで、この平戸滞在五十日間において海外・洋夷關係は無論、邊備國防關係について先生が讀破研鑽されたと思はるゝ書名（雜錄、松陰全集卷八）のみを記しても、

| | | | | | |
|--------|----|-----------------|--------|-----|-----------|
| 采覽異言 | 五 | 筑後守源君美 | 增譯 | 同十二 | 土浦山村昌永 |
| 輿地誌略 | 六 | 江戸青地林宗 | 西洋紀聞 | 三 | 源君美 |
| 坤輿外記 | 一 | 極西南懷仁 | 西洋雜記 | 五 | 山村昌永 |
| 地學示蒙 | 一 | 青地 | 外蕃通略 | 二八 | 御書物奉行近藤守重 |
| 蝦夷志 | | 筑後守 | 邊界分要 | 八 | |
| 蝦夷拾遺 | 一 | 圖は幕府差史 佐藤玄六郎 | 蝦夷草紙 | 一 | 最上徳内 |
| 北海隨筆 | 二 | | 北槎聞略 | 十一 | |
| 環海異聞 | 十六 | 仙臺大槻玄譯 | 魯西亞來朝記 | 一 | |
| 魯西亞渡來記 | | | 北地日記 | 一 | 備中久保田見達 |
| 北槎小錄 | 一 | 江戸設樂問叟 | 松前紀行 | 一 | 攝津守堀田正教 |

| | | | |
|----------|--------|--------|--------|
| 邊警紀聞 | 水戸友部好正 | 北陸杞憂 | 高崎大塚唯助 |
| 海島逸誌 | | 暹羅軍艦圖 | |
| 魯西亞船圖 | | 軍國諸船 | |
| 萬國船號鑑 | | 西洋城郭圖 | |
| 蝦夷初發記 一 | | 東遊紀行 | |
| 北海雜記 | | 蝦夷亂記 | |
| 蝦夷談記 | | 東韃紀行 | 幕府差史 |
| 海東諸國記 | | 臺灣物語 一 | |
| 渡天物語 | 大坂市人宗心 | 西城聞見錄 | |
| 蒙古源流考 八 | | 三國通覽 | 林子平 |
| 阿蘭陀來朝記 一 | | 英吉利馬具圖 | |
| 萬國地球全圖 | | 番軍交鬪圖 | |
| 靖海錄 | | 蝦夷日記 | |

等の如きであつて當時における松陰先生の苦學力行の狀は到底後人の思ひも及ばぬ所である。それだけ先生の憂國慨世の志、時勢時務に對する烈々たる切情を偲ぶことが出来る。尙この時代より江戸時代にかけて、松陰先生が常に座右におかれて時機に觸れ思念に應じて専心閱讀されたと思はるゝものに

海國圖志抄要・魯西亞風土記・西洋列國史略(四冊)・采覽異言・坤輿識(三冊)・輿地誌略・八紘通誌・地學正宗・海國聞見錄・西城聞見錄・海島逸誌・海國圖志・英吉利記略・合衆國地理略説・印度地理略説・萬國輿地圖説

(此等は「讀餘雜抄」中に書き留められて居る書名である。冗繁をも顧みず、前後に此等書名を特に記載せるは、黎明日本當時に於ける憂國先人の苦學力行、慨世奮闘の跡を偲ぶと共に此等舊書に對する現代昭和人の認識を新にし、以て大東亞共榮國確立に邁進しつゝある國民への嚆矢とせんとの微意に外ならないのである)

等がある。これほどの修學研究が積まれ、これほどの豫備知識が出来、これを實踐運営するに、あれほど烈々たる憂國の至情があつたればこそ、後年あの千古不滅の大國策たる『幽囚録』

(前述)の著作が出来上つたものである。「幽囚録」を読むものが、あの一般に世界的知識の貧弱な時代に於て、よくもあれほどまでに博該なる世界的知識と、洋夷實情の詳述さとを以て種々論議されたその對外的高遠なる謀識見について一驚するところであるが、かうした松陰先生の修業學問の経路と思想工夫の淵源とを探究するなれば、何にも別に不思議はないのであると共に、世界皇道化を絶叫してゐる昭和當代人の如何にも國際知識に乏しく、海外事情の不認識さに、今更ながら恥入らざるを得ざるところである。

後年門生の天野御民が、その松下村塾零話中に、松陰先生は常に

一、西洋の事に至ては、清人魏源ゑいげんの海國圖志を初め、當時有らゆる譯書は悉く讀まれざるはなし。

一、先生の歴史を讀まるゝには常に地圖に照會し、古今の沿革、彼我の遠近を詳つまびらかにす。依つて地理に精通せり。毎ねに曰く、地を離れて人なく、人を離れて事なし、人事を究めんと欲せば先づ地理を見よと。

と懷述くわいじゆつしてゐるのも自づと首肯されるのである。惟ただふに松陰先生の夙志は、兵家として兵書

を講ずるにしても、要は時勢の通曉にあり。これが對策を實地に講ずることにある。そして時勢時機の曉通は讀書精研の外にはない。然し讀書といつても徒に書見勉強のみではいけない。讀書工夫と實地實踐との學問である。而かも當時に於ける我が急迫せる國勢の時務と云へば、洋夷侵略に對する謀略術策の樹立といふことになつて來る。それには先づ海外知識の研修精進けんしゆせいじんと諸外國の實情を探知し、退いて更に我が國狀をも考察して、臨機應變適切なる對外策を樹つるの外はないとされてゐたものである。従つて松陰先生は家學としての兵學、皇國民としての經學的研究は勿論、兵學經學西洋學すべてを一丸とし、以て國家興隆の基礎として對外問題解決に當ることが、即ち外夷急迫時に於ける皇國民の重大責任であると觀念されてゐたのであつた。

東北亡命遊と蝦夷問題

松陰先生の東北遊は、先生二十二歳の嘉永四年十二月十四日より、同五年四月五日に至る百十日間、江戸を發して東北地方を巡遊されたものであつて、この行は宮部鼎藏との約束を重んじ、斷然決意の上、藩許を待たずして亡命出發され、佐渡の荒海を航して順徳天皇御陵を拜せられ、或

は奥越の各地に風雪を侵して難苦の旅程を敢行せられ、殊に松前蝦夷の地を遠望して外夷の跳梁を悲憤痛嘆されたのである。元來この東北遊と謂はず、松陰先生のかうした旅行に關する大志信念といふものは、同日記の卷頭に自ら記述されてゐるので、その大要を窺ひ知ることが出来るのである。

有志の士、時平かなれば則ち書を讀み道を學び、經國の大計を論じ古今の得失を議す、一旦變起れば則ち戎馬の間に從ひ、敵を科り交を締び、長策を建て、國家を利す、これ平生の志なり、然り而して天下の形勢に茫乎たれば何を以てかこれを得ん、余客歲鎮西に遊び、今春東武に抵る、略ぼ畿内・山陽・西海・東海を跋涉す、而して東山・北陸は土曠く山峻し、古より英雄割據し、奸兇巢穴す、但し東は滿洲に連り北は鄂羅加に隣す、これ最も經國大計の關する所、而して宜しく古今の得失を觀るべきなり、然るに余未だその地を經ず、深く以て恨となす。と、即ち松陰先生平常の志は天下周遊を以て臨地適應の經國大計を樹立せんとされたのであつた。殊に蝦夷の地は『東は滿洲に連り、北はロシアに隣接してゐる。實に吾が經國大計に關する所』であると謂つてゐられる。これがこの東北遊歴の根本的の目的であつたのである。

従つて三月朔日（嘉永五年）弘前に至り、同志伊東廣之進を訪問された時にも、談、時事に及び種々意見を交へられた際にも『最近青森から歸つた船頭の談によれば、西洋船舶の松前津輕の間を通過せるものが、今年既に三四隻に及んでゐる』と聞き及んでゐると憂慮せられ、また『去月廿五六日頃、夷船が津輕・松前間を通過し、一夕繫留して翌夜退去した』ことも傳承してゐると談ぜられ、そして三月四日の日記を見ると『協本は戸數百三四十、去年夷船の過ぎしはこゝを去ること里許なり、山を越えて小泊に出づ。亦海濱なり、戸數三百、行程七里。ここと松前とは海を隔て、相距ること七里なり』と謂つてゐられる。更に五日の部には

晴、戸を推して望むに、松前の連山、咫尺の間に在り、驛を出で海に沿ひて砲臺の下を過ぐ、砲二坐を安んず、板屋を以て之を覆ひ、砲長口徑を詳かにするを得ず。

と記してゐられる。松陰先生の感慨や果して如何。松前の地を遙に望まれては、あの熱情慨世な先生としては、定めて血の湧き肉躍るの感のあつたことであらう。それにもまして外夷を憂慮せられ禦夷の術策を思念されたことであらう。

更に六日の部になつては

寒風凜烈、飛霰繽紛、午後に至り乃ち晴る、朝、上月を發して平館に出づ、平館に砲臺あり、砲門七箇にして常には砲を架せず(中略)四年前、夷船一隻こゝに來り、陸を距ること里許に錨を下す、日、脚船一隻を放ち、五六人を乗せて上陸し、夜は則ち船に還へる、かくの如きこと凡そ三日なり(中略)青森は大灣港なり、宜しく軍艦數十隻を備へ以て非常に備ふべし。

と實地應策的に看破論述されてゐるのである。この北門邊備の對策樹立の研究が松陰先生の宿願であつたことであらう。かうしたことも要するに、これは九州旅行に於て新書研究による海外事情や邊疆防備に關する廣汎なる知識を得られて、國防充溢強化を以て我が國最大急務なりと觀念さるゝに至つたことからであつたのである。

もとゞ松陰先生のこの東北遊敢行については當時蝦夷通を以て有名であつた松浦竹四郎(多氣志樓)の所論が相當に影響を與へたものゝやうであつて、後年野山在獄當時にも在江戸の久保清太に宛て、『松浦多氣樓主人に時々御逢の事も御座候哉、若御逢御座候はゞ蝦夷圖一葉御貫被下度候、追々貫ひ居候共悉く好事の爲に奪ひ去られ、今に至り甚悔申居候云々』と云つてゐられるのであり、彼の著書『蝦夷日記』は當時先生愛讀研究書の一つでもあつた。この竹四郎は伊勢

雲津の人であつて、夙に海内各地を巡歴し、殊に三度も唐太に航し蝦夷地方の形勢人情等一つとして暗記せざるものはないと云はれてゐた程の人物であつて、常に北門の警備を主唱し、自ら憂北主人と云つてゐたのであつた。

かやうなわけで、松陰先生の東北行乃至は蝦夷視察といふものは、早くより考へてゐられたものであつて、嘉永四年夏頃より私にこれが計畫實現化を進められて、兄梅太郎に意中をはかり旅金の苦面をも依頼されてゐるのである。そこで同四年九月廿七日付で、江戸より郷里の梅太郎に宛て

奥羽行之日數、正二(二月)三と四ヶ月之積に御座候、尤年内十二月中旬頃より出懸け、常州邊跋涉仕り、漸暖漸北候様致度、官部申候處先は夫と決居候、左候へば旅中百三十五日計りに御座候、乍併旅行は兎角前方之積りより日數延勝に付、丁度百三十五日と積り候ては、其場に臨み、さし問も可有之奉考候、且遊歴中珍書奇冊など有之候はゞ、時としては食指を動し申間敷も難計、又人を尋ね候にも、時としては少々の引出物持候様の事も可有之、旁スリ切にては無覺束一候事

と、旅程の日數などを通じ旅金の相談もしてゐられる。これに對し、兄は「奥羽金拾參兩は此頃の飛脚便にて必ず差送り可申候事」と返事しつゝ、なほ

北地之冬征は前方得と彼地方之様子御聞繕之上ならでは無覺束存候、むざと被差向候ては進退究り、大事にも立行べく哉と被掛念候、毎々不入掛念御やかましくは可有之候へ共、赤川忠・小幡與惣等之咄を聞けば心膽寒く相成申候事。

と、兄としての慈愛の諸注意を促してゐる。松陰先生もまた重ねて

奥羽寒地にて遊歴堪間敷之由御遠想御尤奉存候、乍然十二月十五日爰許出足、笠間・土浦邊より水府等にて年を迎へ、春暖二月頃より奥羽之積りに御座候、且安藝五郎も同道之管に御座候、是は南部岡武人なり、山鹿素水津輕人也、良齋も奥人なり、就ては奥地之形勢追々承知仕候故疎忽之舉は有之間敷候。

と、心事細々に書き述べて報導されてゐる。兄弟鶺鴒の濃かな至情が思ひやられて、松陰先生等兄弟の情が忍びやられる。かくして遂に十二月十五日、宮部との前約を重んぜられ、たとへ未だ落許がなくとも、これに遅れては長州武士の口約面目にかゝるとして、赤穂義士討入りの日を

以て決然亡命出途されたのである。

願ふに松陰先生の鎮西旅行と云ひ、東北亡命遊と云ひ、その主眼目的とされた所は學問の修業と識見の擴充とで、人間練成に資せんとされたのであつた。そしてその學問と識見とを實地實際に當てはめて、有效適切なる實學的實對策を樹立せんとされたことはいふまでもないのである。かうなると、當時の日本國狀形勢としては、何を措いても外夷東漸、邊海防備に備ふべき海防國策と外夷接衝の術策と云ふことになつて來る。而かもそこには先進國たる西洋知識と、我が國固有の精神理念や現實的な國策といふものを織り込んでの綜合的謀策を考究して、眞の日本の對策を確立しなければならぬ。大和民族の肇國的精神使命を根幹としての對策を求めなければならぬ。徒に西歐文化に魅せられ或は科學的な妖相まじまじに惑溺してはならない。殊に老獪なる外夷の術策中に陥つてはならない。従つてすべてに於て翻譯的所論に誘導されてはならぬ。その採るべきものは進んですべてを採擇するとするも、盡くこれ等を日本流に鎔かして再成しなければならぬ。よしやその形姿は西洋風であつても、そのすべてを和魂で練り直して眞の日本の雄姿、眞の大和魂の權化、眞の肇國精神、そのもので練成再精して肇國の大理想たる八紘一字の眞の日本〇口是國策

を確立しなければならぬとされてゐた所に、所謂日本精神の權化吉田松陰先生そのものがあるのである。

嚴たり、皇國雄略

松陰先生は亡命東北遊の後、嘉永五年四月（先生二十三歳）江戸藩邸に歸られ、尋で歸國の命が下り、四月十八日江戸出發、五月十二日歸萩の上、萩松本清水口なる親戚高洲爲之進の宅に假寓謹慎、命を待たれたのであつた。

この屏居謹慎中に於ても、松陰先生は絶えず外夷の急迫を憂念されて『海島逸誌・鴉片隱憂錄・犯疆錄・海防彙識ロシヤ本紀・海外新話等を讀破され、一意専念、外寇對策の事に精進されてゐたのであるが、この清水口時代に於て吾人の最も留意しなければならぬことは、松陰先生が斷然翻つて日本の國史國典といふものを盛んに耽讀精進工夫されてゐることであつて『日本書紀』三十卷・『續日本紀』四十卷を始め、『三朝實錄』・『日本外史』・『日本逸史』等を讀破専念されてゐることである。

これは松陰先生の平常の持論であつた『天下の大業を成し天下の大經綸を立てんことを期するものは、よろしく舊事舊章を學ばなければならぬ。然し之に拘泥墨守することは禁物である。其時代々々に順應して之を活かして行くことが大切である。殊に上世の聖謨、古代に於ける大和民族の雄略史を學ばねばならぬ』といふ觀念によるものであつて、眞の日本の姿、眞の日本驍國の大精神、眞の大和民族の大使命を完遂せんがために、眞の日本民族の進むべき將來の大道を確立せんとするには、どうしても先づ日本の古代史を十分精研工夫するの要があるとされたものである。従つて先生は當時の日記ともいふべき睡餘事録の冒頭に於て

嘉永壬子五月十二日、國に歸る、爾後、屏息して首を一室の中に縮め、以て斧鉞の誅を待つ、晝は則ち暑を懼れ、夜は則ち蚊を憎み、唯だ睡を是れ愛す、然れども進みて一時に將相たる能はずんば、退きて聖賢を千古に尙友するは平日の志なり、こゝを以て睡を愛するの餘、亦敢へて素志を廢せざるなり。

身、皇國に生れて皇國の皇國たるを知らずんば、何を以て天地に立たん、故に先づ『日本書紀』三十卷を讀み、之れに繼ぐに『續日本紀』四十卷を以てす、其の間、古昔四夷を懾服せし術に

して後世に法とすべきものあれば、必ず抄出して之を録し、名づけて皇國雄略と爲せり。(中略)
蘭夷の我が邦に航するは必ず爪哇じやばより發す、乃ち爪哇の事、密かにせざるべからず、故に海島
逸誌(註 清の柳谷王大海の著、嘉慶の初め刊行す、外國地理書)を讀む。

古今の論策にして時務に切なるもの多し、獨り宋の人陳同甫(註 陣堯、龍川と號す陣龍川文集あり)
は華夷の辨、君父の義を論じて、天下の大計、古今の得失に及び、尤も痛快と爲す、故に陳龍
川文を讀む云々。

と記述してゐられるのである。この『皇國雄略』の題名こそ、まさに松陰先生そのものゝ大精
神であり代名詞であつて、先生が日本の眞の姿をハッキリと把握され肇國の大理想を固く句藏さ
れて、日本民族將來の進み發展して行くべき道はまさにこれだ、これだ。これを措いて他にある
べき筈がないと觀念されたその大理想、その高遠な思想、その信念的實現化のすべてを綜合され
た名稱である。か様なわけで前に述べた様に幽囚録の卷末に日本の上古より外國との文物交渉史
や或は渉外交史とも云ふべきものを、年代別に一々列擧附加されて、あの大陸・南進論も要は
肇國以來の聖謨であり大和民族の理念であつて、當然進むべき道であると説いてゐられるのであ

る。後年江戸傳馬町最後の獄より時世の急迫黙し難しとして上書されたるものの中にも

一 鎖國は皇國之法に無之、神功皇后・景行天皇等之御雄略に厚つかせられ候はでは不_二相濟
趣_一天朝へ懇奏仕度候。

一 幕府鎖國之禁御破り之様相見候得共、外夷より勝手に來り候儀被_二差免_一候迄にて、癸丑甲
寅已來未だ一船も海外に御出無_一之候得は、鎖國同様に國害を引出候事不_二容易_一候。

一 通信通商は天地之常道に候得共、吾國より海外に人を出し萬國之形勢得と吞込候上ならで
は相調不_レ中、此方不調之所を以て妄りに相開候事不_レ宜候。

と上書してをらるゝが如く、もとゞ松陰先生は我が肇國の大精神たる八紘一字の大理想の下
に雄略的遠航開國論を以て終始されたのである。

かやうなわけで、松陰先生は夙に大船巨砲主義を堅持されてゐたのであつて、外夷への抗戦に
は日本の精神力は勿論肝要ではあるが、あの進歩せる大器を利用し、殊に海戦に長じてゐる外夷
を相手として戦ふ以上は、どうしても『大船疾ること矢の如き』大船巨砲主義で當るの外はない
と主張されてゐたのである。この大船主義は攘夷戰の對策として考へてゐられたのみではない。

平時に於ける開國進取互惠通商互市の場合に於ても、五大洲を航行せんがためには、はたまた黎明新日本建設のためには、どうしてもこの大船巨舶主義で進まなければならぬと稱道しょうどうされてゐたのである。

松陰先生のこの東北遊亡命待罪の件も遂に世祿を奪はれ士籍を削られて、十ヶ年諸國遊學といふことになつて、松陰先生は父兄師友に別れを告げられ、巴城の故山を後に、嘉永六年正月廿六日萩を發し、讃岐・攝津・河内・大和を経て、五月八日伊勢大廟を拜し、尋で信州路を経て江戸に達せられたのであるが、これより愈々佐久間象山等と日夜時事を論議せられ、而かも外夷の横暴なる跳梁跋扈てうりやうはつこを目のあたりに見らるゝに至つては、悲憤痛激やるせなく、遂に幾多の時事上書建白を試みられたと共に、敢然身を挺して口難に殉ぜんとせられた、あの江戸時代となつたことは既に詳述した通りである。

松下村塾學徒の海外雄飛策謀

松陰先生の大陸・南進論は、機に觸れ事に應じ、隨時隨感、村塾門生達に烈々熱火の如く強く打ち込まれたのであつた。而かも匪躬實踐ひきんじやくを以て學問の要諦とせられ、事態の考究を以て直ちに時世に即應せんとされた松陰先生の憂國至誠の熱情は、彼等をして師の素志所説に忠ならむと狂熱せしむるに至つたのであつた。

殊に村塾當時に於ける松陰先生は、目にあまる外夷の跳梁跋扈をいたく悲憤せられ、その不遜なる皇國覬覦きんぐんの無禮を切齒扼腕せつしやくわんされてゐた時代であつた。然し松陰先生は危険なる盲目的外人必殺論者でないのは勿論、當時ありがちであつた徒なる悲憤的攘夷論者でもなかつたのである。要するに松陰先生の痛憤慷慨切齒扼腕は、當時普通に考へられたるが如き、外人追ひ出し的鎖國攘夷論者ではなく、寧ろ當時に於ける最も進歩的な開國進取の攘夷論者であつたのである。

攘夷といふよりは寧ろ禦夷と云つた方が適切のやうである。先づ十分國力を涵養して日本の足

元をかため、而して正義人道に反し、殊に我が國に侮辱を與へ理不盡に侵略せんとする横暴なる諸外國を打ち懲し、屈辱的外交を打破して眞に對等の地位に於て平等條約を締結した上、更に進んで大義を四海に布かんとされたものである。故に空しく門戸を閉ぢて自滅を待つが如き頑冥論でもなければ、徒に外人を毛嫌ひして猛勇を揮はんとするが如き排外的武力主義者でもない。正堂々平等條約を結んで通商互市の路を開き、國威國權を海外に宣揚すると共に、所謂皇威を四隅に輝かし、大和民族の大使命を八紘に樹立せんとされたのが、松陰先生終局の目的であつたのである。

然し事茲に至る迄には、幽囚録時代よりたとへ短歲月ではあつたにせよ、幾多の經緯を経て、この所論理念を結成さるゝに至つたものである。先生の晩年たる安政六年春の上書に係はる『對策一道』なるものを觀れば、自づとこの間の消息が明らかになるのであつて、その遠謀深慮、情理整然、壯重崇高なる先生の對外國策なるものを窺ふことが出来るのである。

謹みて對ふ、弘化の初め蘭使至りて變をとる、こゝに於てか天下紛々として兵を言ふ、時に和を主とする者なく、戰を主とする者衆し、其後十年、墨・魯・暗・拂、駭々として來り向ふ、

而して墨夷の患最も甚し、ここに於てか兵を云ふ者益々盛なり、而して向の戰を主とする者多くは變じて和を主とす、和を主とする者衆くして戰を主とする者寡し、夫れ戰を主とする者は鎖國の説なり、和を主とする者は航海通市の策なり。國家の大計を以て之を言はんは、雄略を振ひ四夷を馭せんと欲せば、航海通市に非ざれば何を以て爲さんや、若し乃ち封鎖鎖國、坐して以て敵を待たば、勢屈し力縮みて、亡びずんば何をか待たん、且つ神后の韓を平げ、貢額を定め官府を置き給ふや、時に乃ち航海あり、通市あり、徳川氏征夷に任ず、時に固より航海して通市せり、其の後天下已に平かに、苟偷無事なり、寛永十三年乃ち盡く之を禁絶す、然らば則ち航海通市は固より雄略の資にして祖宗の遺法なり、鎖國は固より苟偷の計にして末世の弊政なり、然りと雖も、之を言ふこと難きものあり、今の航海通市を言ふ者は、能く雄略を資くるに非ず、苟も戰を免かれんのみ、其の志固より鎖國者の戰を以て憚と爲さざるに如かず、故に世の和を云ふ者は心實に戰を畏れ、内に自らはづるあり（然るに）一たび吾が言を聞かば、將に口に藉きてはぢざるあらんとす、ここに於てか、和を排して戰を主とする者、又從つて之を攻むれば、吾が説贖かん、是れ其の言に難き所以なり。

嗚呼、神州の振はざること久し、一旦勅諭震發するや、正論鬱興す、誠に曠世の盛事なり、凡そ臣子たる者、之が承順を爲すこと能はずんば、其れ之を何とか謂はん、況や墨夷の脅嚇、幕府懾れて之を聽き復た國體を顧みず、凡そ士民たる者之が匡救を爲すこと能はずんば、亦之を何とか謂はん、今墨夷は相を置き市を縦にせんと欲す、蓋し相を置くは吾が國を馭する所以なり、市を縦にするは吾が民を誘ふ所以なり、又天主堂を立てて吾が國の妖禁を除き、また商館を建てて吾が民を備ひて之を用ひんと欲す。其の國を馭し民を誘ふことを爲すや甚し、夷謀此くの如し、而して幕府は方且に和を講じて謀と爲す。其れ果して雄略を資くるか、抑々苟も戦を免かれんとするか、戦を畏れて和を講ず、是れ聖天子の軫念したまふ所以なり、一旦幕問吾が公に及ばば、吾が公宜しく答言したまふべし、「天勅は奉ぜざるべからず、墨夷は絶たざるべからず」と、斯くの如きのみ、幕問必ず重ね及びて曰く「天勅は固より奉ぜざるべからず。然れども向に已に墨夷と條約せり、今何の辭をもつて之を絶たんや」と。吾が公之に答へたまふこと易々たるのみ、今墨夷の禍心は洞として火を觀るが如し、然れども其の辭には、乃ち曰く「統領は日本の爲に謀るのみ、統領自らの爲ににするには非ざるなり、使臣は日本の爲に慮るの

み。使臣自らの爲にするに非ざるなり」と、吾れ従つて之が答辭を爲して曰く「大統領は吾が國の爲に謀ること深し、貴使臣は吾が國の爲に慮ること厚し、吾れ固より其の辱を拜す、但だ吾が國は三千年來未だ會て人の爲に屈を受けず、宇内に稱して獨立不羈の國と爲す、今貴國の命を受ければ乃ち其の臣屬となり、今貴國の教を奉ずれば乃ち其の弟子となること、勢已むを得ざるなり、三千年獨立不羈の國、一旦降りて人の臣屬弟子となる。豈に大統領・貴使臣、人の爲に謀慮するの意ならんや。果して吾が爲に謀慮せば、願はくば引き去り、吾れの往きて答ふるを待て、近日の約は、これを天子に奏せしに天子震怒したまひ、これを四國に敷きしに、四國憤懣して僉謂へらく、貴國は人の爲に謀慮する者に非ず、甘言美辭もて人を陥穽に陥れんとする者なりと、吾れ貴國の爲めに謀慮す、去らざれば禍將に及ばん」と。是くの如くにして去らざれば、其の禍心已に著はる、名を正し罪を責めて、宇内に暴白すとも、其れ孰れか然らずと謂はん。然れども墨夷猶ほ謂はん、吾れ宇内を合せて之を同じうせんと慾す、貴國獨り梗ぎて従はざれば兵を尋ひざるを得ず」と、吾れ之に對へて曰く「方今未だ貴國に同ぜざる者、特に吾が國のみに非ず。今汝と約せん。亞細亞諸國盡く貴國に同じて、而も吾れ未だ答ふる所

あらざれば、吾れ甘んじて其の曲を受けん。諸國にして未だ同ぜざれば、吾れの同ぜざる、何ぞ獨り梗と爲さん」と、辭命是くの如くならば、墨夷は退かざるを得ず、「退かすんば之を擒にし之を誅するも、吾れ皆名あり、苟も吾れ名あらば、戦ふに於て何かあらん」。然りと雖も、空言は遂に以て驕虜を懲すべからず、宜しく今日より策を決し、上は祖宗の遺法に遵ひ、下は徳川の舊軌を尋ね、遠謀雄略を以て事と爲すべし。凡そ皇國の土民たる者、公武に拘らず、貴賤を問はず、推薦拔擢して軍師船司と爲し、大艦を打造して船軍を習練し、東北にしては、蝦夷・唐太、西南にしては流蚪・對馬、憧々往來して虛日あることなく、通漕捕鯨、以て操舟を習ひ海勢を曉り、然る後、往いて朝鮮・滿洲及び清國を問ひ、然る後、廣東・咬啣吧・喜望峰・豪斯多辣理、皆館を設け將士を置き、以て西方の事を探聽し、且つ互市の利を征る、此の事三年を過ぎずして略ぼ辨せん。然る後、往いて加里滿爾尼亞を問ひ、以て前年の使に酬い、以て和親の約を締ぶ、果して能く是くの如くならば、國威奮興、材俊振起、決して國體を失ふに至らず、又空言以て驕虜を懲するの不可なるに至らざるなり。然れども前の論は以て墨夷を卻くべし、然るに後の論擧がらざれば、何を以て國本を強くせん、國本強からざれば、虜患何れの

時にして止まんや、後の論は以て國本を強くすべし、然るに鎖國を以て謀と爲し、航海通市を以て古に非ずと爲して衆咻して之を攻むれば、後の論何の論何を以て擧がらんや、然らば則ち天下の事は吾が公自ら任ずるに非ずんば、斷然として遂に爲すべからざるなり、吾れ驚劣なりと雖も、平生書を読み、皇室を重んじ、夷虜を憤ること、具さに明問の及ぶ所の如し、今日の事、言何ぞ之を盡さん、聊か其の百一を對ふること右の如し。

と、松陰先生は大東亞共榮圈を南洋一帶は勿論、西は阿弗利加喜望峰、南は濠洲、これを收めて更に米國カリホルニアまでも考慮に入れてゐられる。實にその遠大なる雄略、切々燃ゆるが如き愛國の至情、烈々鐵火の如き至言、沈着にして壯重なる國策、而かも劉博適切と眞壁眞劍な所論態度とは誰人も感動せざるものはあるまい。

従つて、松下村塾の學徒に於ても、師松陰先生のかうした宏遠なる雄略、切實なる對策、崇高なる憂國精神を奉行して、我れ先にと身を以て、これが實踐具體化を計つて實行に乗り出し、師に殉じ國に殉じ道に殉じんと劃策活躍を試みんとしたことも當然のことである。

久坂玄瑞、黒龍江行を謀る

かの松下村塾の總參謀として、既に記述した久坂玄瑞の如きも、安政五年夏頃より同門の赤川淡水（通稱直次郎、名は義齋、別名佐久間佐兵衛、中村清旭の弟、贈正四位）と謀つて直接黒龍江に渡り、北邊事情探索の上、我が背國防樹立に資せんと、種々苦心慘愴謀策をめぐらしたのであつた。

現時よりすれば、露領黒龍江行と云へば、別に差したる難問題ではない。これと云つて取り立てて論ずるほどのことは勿論ない。然し八十年前、地誌位置さへも不明瞭であり、況んや外夷に恫喝威壓されて、國民何れも戦慄してゐた北陲露領黒龍江渡航敢行といふことは、いかにも雄策であり大膽であり、一死報國を期しての熱血漢でなければ出来ぬ一大冒險進出であつたのである。處が、松陰先生としては、當時國內體制の整備を急がれてゐた秋であり、殊に長藩の政府筋革新運動のために、銳意専念されてゐた時代であつた。先づ長藩政府の人事刷新斷行の後、江戸・京都・長崎等の主要都市相連絡提携して外夷制禦の堂々たる防衛陣容を張らんとされてゐたもの

のやうであつて

黒龍江行之事僕は不同意なり、併未だ深く同志へ謀り不申候、同志決議之上委細可申上候、大意云、一昨日益彈正（益田彈正）・浦靱負入代り、今日益手元（益田彈正）内藤萬里助・浦手元前田孫右衛門也、御在國中には餘程萬事募取候、機會有之候、尤も諸役人今兩三人の差除次第也果して募取勢なれば桂・赤川は公命にて召返し、大に人材鼓舞、議議々々之手を下し度候へ共、實甫（久坂）・松洞（松浦）は矢張在江戶、四方之新聞取糺し、速に注進、中谷（正亮）は上國を受持、北條源藏は長崎受持可然候、上國を差捨て遠く黒龍へ行ける時勢には無之候、また海外に出る道あらば、北京・廣東へ行、洋言之實否を糺すこと急務に御座候、併是も空論なり殘念々々、併黒龍江行は來春に相成候はゞ夫迄には何とか時勢出來可申候。（安政五年六月廿八日、久坂宛）

と久坂に與へられて、汝の雄志飛躍には賛成するが今はその時機ではない。脚下の難問題に火が付いてゐるのに、外國行とは受け取り難い。この外夷急迫せる時に於て、汝等が日本を離れ去つてはどうすることも出来ない。明春まで待てば何んとか見込みの立つことであらう。而かもい

まは長藩政府人事革新運動最中である。何時如何なる事態が出来するかも知れない。若し長藩政府陣容が新になれば、汝や松洞は幸に江戸にゐることであるから、こゝに留つて諸般の狀況報告と共に各方面の交渉にも當らなければなるまい。時難は刻々進み近寄つてゐる。時局は餘程急迫してゐる。いま日本を去つて黒龍江に行かれては、それこそ大事大變であると『余は不同意なり』と謂つて、斷然それを阻止してゐられるのである。

然し久坂も一度決心した上は、さうたやすく斷念しよう筈はない。先生の中止勸告にも拘らず尙も暗に黒龍行計畫を進めてゐたものゝやうであつて、その七月六日付で重ねて松陰先生は久坂と赤川に宛て、

赤川・久坂二君北地行愚誠に愚論、周布藩重臣、政之助なども左様申居候、御止り可然候。と謂つてゐられる。然し久坂等は仲々承服しなかつたやうである。何分にも當時久坂は十九歳の血氣盛りであり、意氣熱烈な時代であつて、黒龍江行きが愚策なれば、今度は亞米利加行だと

在江戸同志間を走り廻つたやうである。同志の中谷正亮が、これを心配して松陰先生宛に淡水杯米利加行、先生之御周旋と奉、察候、能クヌケバヨイガ甚六ケ敷由に御座候、行はれざる

ときは直様御國へ御返し被成候様、先生より周布へ御議論奉、祈候。(安政五年十月十一日)

と通信してゐるのをみても、この間の消息を窺ふことが出来る『先生の御周旋云々』と云つてゐるのは、在江戸のこととて松陰先生の意中を十分知ることが出来なかつたからであらう『周布に御議論』とは藩政府要路の命令で、國元歸萩を命ずるが早や道だと先生に意見を試みたものである。

かうした経緯はともあれ、當時村塾學徒は愈々尊攘の旗擧げ潜行計畫最中であつたがために、遂に久坂は師説に服して、江戸蕃書調所や村田藏六(後の大村益次郎)の門に入つて、洋學研究と共に梁川星巖等と相往來して時事を論じ、殊に間部詮勝(伊井大老の懐刀で、安政大獄の主動者)暗殺事件などを潜に謀り、遂に翌安政六年二月歸萩したのであつた。

翻つて、この久坂支瑞は村塾の總參謀となつた人物だけあつて、松陰先生の言動そのまゝを、よくもあれほどまで繼承出来たものであると思はるゝ程である。即ちすべてが松陰先生流儀であつて、例へば彼の遺稿を見ると、先づその日記に於て、松陰先生流にすべて一言一動よく入念に書き留めてゐる。時事問題に關してはこれまた先生流に多くの上書建白類を残してゐる。その詩

歌文章の如き、これ亦隨時隨感氣節の構想に熱血を沸してゐる。それに讀書時の抄録の如き、何れも先生流儀に讀書雜抄や餘録と云つたものを相當多く残してゐる。加之、彼の文材の豊美は到底他門生の追従を許さなかつた所である。要するに玄瑞の平常、即ち彼の學問の仕方、時事問題の取扱ひ方、その言動態度、すべてが恰も小松陰の感があつたのであつて、よくもあれほどまでに松陰先生の感化教導を受けたものであると思はるゝ節々が相當にあつたのである。

従つて、松陰先生のこの大陸・南進論は、先生の文獻の隨處に於て見出すことが出来るのであるが、然しその一貫的にまとまつたものとしては、かの『幽囚録』であり、そして先生はその末尾に『上世聖皇、威を四方に振ひ給ひ、異民族を恩撫し賜ひ、その英圖雄略は萬世に輝いてゐる』と謂つて、上古孝靈天皇時代より孝徳天皇に至る間に於ける我が國涉外事件や外夷朝貢事案を具して、上古の英圖雄略を明らかにして、幕末黎明日本の國是國策樹立に資せしめてゐらるゝことは、既述の通りである。

そこで、これに倣つてか、玄瑞にも邊陲史略（別名邊陲記略）といふものがある。これは玄瑞が『西洋記聞』・『外蕃通略』・『采覽異言』・『輿地誌略』・『安南記略』等數十書を讀破して、崇神・

應仁帝時代の古事を引用して起筆し、天文十一年ポルトガル船の來邦以來弘仁元年六月蘭國使節の長崎に來航せる迄の間の我が國對外交渉事案を年次表別に蒐録せるものであつて『安政庚申閏三月廿九日、稿成時、夜將曉、前槽月苦』と謂つてゐる苦心の蒐録である。玄瑞が對外國策樹立の根本輸入をなした基幹であつたらう。かうしたやうに松下村塾の國是國策上の主義所論がハッキリ門生達に取り容れられてゐることを見逃してはならぬのである。而かも我等の先賢俊傑に於ては、かうした心血を注いでの國威振張の奮闘努力の活躍史があつたことを忘れてはならぬのである。今更ながら松陰先生殉國教育の偉大なる効果をたゞへると共に、現時の太平洋攻略の赫々たる戦果に思ひをいたし、轉々黎明日本時に於ける先人の遠大雄略なる國策に感激せざるを得ないのである。

高杉晋作の上海行

松門の俊傑吉田稔磨としまろが漫畫を描いて山縣狂介（後の山縣元帥）に見せたことがある。その畫は、一番初めに鼻輪を通さぬ離れ牛を書き、その次に坊主頭で袴を着てゐる人がある。その次には木

劍があり、またその次には棒が書いてある。

そこで吾輩(山縣)が其畫意を尋ねると、稔磨の曰く、この離れ牛は高杉晋作である、これは中駕御の出来ない人である、坊主頭で棒を着て座つて居る人は久坂玄瑞である、これは廟堂に立たせば堂々たる政治家である、其次の木劍は入江九一である、入江は偉いが、まだ本當の刀ではない、木劍位である、それから其次の棒はお前(山縣公)であると答へた。

とは山縣公後年の述懐談であつた。奇略縦横放逸不羈の高杉を評し得て實に妙と云ふべきであらう。この高杉も、さすがに久坂と共に松門の雙壁と謂はれ、奇兵隊總督として千古に英名を轟かせたほどの偉傑だけあつて、松陰先生のあの熱血的殉國魂の感化を受けたことも、他門生よりは一段と深かつたのである。従つて彼も夙に洋夷の跳梁横暴をいたく憤り

夷狄が他國を侵奪するには、先づ其の國の人心を奪ふのであつて、これには利を喰はしめて民心を迎へ、妖教を敷いて人心を害し、然る後一舉にして其國を奪取するのである、洋夷がかの爪哇・呂宋等を侵略したのはまさに好適例である、近頃墨夷が我が神州の地を覬覦し、軍艦を伊豆に舶し、使節を江戸に進めて居るが、これは實に開闢以來の一大怪事である、神州の地は

正氣が鍾り、勇武は海内に卓絶して居る、かの北條時宗は蒙古十萬の兵を九州に殲滅し、加藤清正は明兵百萬を朝鮮に撃破して居り、織田信長はヤソ教を海外に驅逐して居る、吾が國は未だ曾つて外夷の跳踉を許さない所である。

然るに方今、昇平三百年、上下文恬武烈、兵革日に衰へ、士人武技に精しからず、儒臣孫・吳(兵書)を讀まず、實に頼み難く遺憾の極みである。然し豪傑英雄の士は幕府と力を合せ、正氣を一振して、神州の地を犬羊腥膻の區となしてはならない。爪哇や呂宋の鞭を踏んではならない。然るに幕府は因循姑息、此等の措置對策を講ずることも出來ず、太平の藪澤となつては天下の何人の顔あつてか天下に仰俯することを得んやである。神州の正氣が一度振ひ立てば、區區たる米英の如きは少しも憂ひ恐るゝには足らない、これには幕府を諫めて早く富國強兵の根本策を立つることが目下の急務である。(安政五年原漢文)

と痛憤憂國の至情歎し難く、熱血を注いで富國強兵策を論じて、藩の重臣益田彈正に上書してゐる。而かも外夷は犇々と迫り來り、幕府は色を失して何等爲す所を知らない。高杉は憤激のあまり「神州の大義を述べて幕府を諫め、士氣を鼓舞し武備を修整し、以て米夷を撃滅すべきであ

る』と、重ねて藩主に諫言上書を試みてゐるのである。

さすがに松陰先生が精魂氣魄を打ち込まれた秘藏弟子だけあつて、着眼理論、すべてが松陰先生流であることは如何にも欣快に堪へ得ないところである。

かくの如く、松下村塾の開國進取・航海遠略の教育を受けた高杉は松陰先生と死別後は、果してどんな行路を辿つたのであらうか。松陰先生の刑死後間もなく修業途中で昌平校を退き（安政六年十一月十七日）歸藩の上、尾寺新之丞等と共に軍艦教授所に入つて航海學を修め（萬延元年二月）續いて閏三月には海軍蒸氣科修業のために江戸差遣を命ぜられたのである。そしてその八月にはその間を利用して東北遊歴を試み、常陸笠間に加藤有隣を訪ね、松代に至つては佐久間象山に會して時事を談ずる等、恰も松陰先生東北遊歴のそれにも似たる動勢を進めてゐるのであつて『斯師あつて斯弟あり』といつた感じを深くするのである。十一月にまたまた歸藩して明倫館會長となり、文久元年には世子公の小姓役となり、續いて番手となつて、再び江戸に登り、その年の暮れには遂に海外視察の藩許を得て、先づ支那の形勢事情視察研究のため上海行をなすことになつたのである。そこで、彼は文久二年正月幕使に従つて愈々支那に行くことになり、四月廿九日長崎

を出帆して上海に向ひ、滯留約二ヶ月有半、七月六日上海を發して歸朝の途に就いたが、同月十四日長崎に歸着するなり、直に獨斷で汽船購入の契約を試みたことは有名な話である。

この上海行に關しては、『遊清五録』なるものを編して、航海日記や上海見聞録などを細々と書き留めてゐる。曰く『航海日録・上海掩留録・外情探索録・内情探索録・崎陽雜録』等である。

そして當時に於ける彼の感慨心情ともいふべきものは

微身豈與西夷死。 微身、豈に西夷と與に死せんや

一片膽心淨似霜。 一片の膽心、淨きこと霜に似たり

忽聽砲聲起回首。 忽ち砲聲を聞き、起つて首を回せば

天皇所_レ在是東方。 天皇、在_レす所、是れ東方

と、切々たる思を詩賦して、彼は故國遠く異郷の空より遙に日本天子を仰ぎ伏し拜してゐる。さすがに松門の俊傑に恥ぢずといふべきであらう。更に彼は

鎗銃轟_レ空曉月明。 鎗銃、空に轟き、曉月は明なり

鼓聲先報道臺場。 鼓聲、先づ報ず、道臺場

自許皇國刀鋒銳。 自ら許す、皇國刀鋒は鋭く
五大洲中可_二獨行_一。 五大洲中、獨行すべし

と、實にその壯烈なる意氣想ふべきである。「五大洲中可_二獨行_一」とは彼の豪放不羈の性情そのままである。而かも彼は在上海中の知友陳汝欽と別るゝ時に

臨_レ敵勉強武與_レ文。 敵に臨み、勉強す、武と文と

他年應_レ有_レ建_二功勳_一。 他年應_二に功勳を建_二つ有_二るべし

孤生千里歸郷後。 孤生、千里、歸郷の後

每_レ遇_二患難_一又思_レ君。 患難に遇ふ毎に、また君を思ふ

と、謂つて、轉々離愁の悲情を示してゐる。彼の多恨多感な熱血漢然たる一面を思はしむるものがある。

然し何はともあれ、かうした海外への雄飛、洋夷の事情探索、進取的開國への準備行動、靜に思へば何れも皆松下村塾當時に於ける教育の賜物であり、熱血兒に植ゑ付けられた松陰魂の發展であり、村塾當時の若芽が愈々成長しての結實であつたことを忘れてはならぬのである。

曾て中原邦平氏（長州郷土史家）が高杉に關するかうした方面につき口述されたことがある。敢て記して高杉・伊藤等（何れも松門）の對外思想の育成淵源ともいふべきものを窺ふことにする。防長が獨立して天下の事をなさんとするには、どうしても海外の形勢事情を審_二にしてをらなければならぬといふ論で、伊藤春輔を拉れて英國倫敦に遊ぶの希望であつたのである。そこで佐世八十郎と井上聞多の兩人へ密に旅費の調達を頼み、政府へも内々洋行の事を願つたので、政府では、三月二十六日先生（高杉）と伊藤に英學修行且つ事情探索のために横濱へ差遣はすといふ辭令を交附しました。斯様に秘密にしたのは、若し洋行するといふことを公表すると議論が起つて、遂に其の志を遂ぐる事が出来なくなること慮つたのである。此の時、先生は、山口出立の際に、諸隊の長官に手紙を遣つてをらるゝが、其の手紙に依ると、既に政府も一新して、萩の士で組織した干城隊も前とは違つて、我々と同論になつたから、最早國內の事は憂ふるに足らぬ。これから奇兵隊其の他の諸隊を要所々々へ配付して、幕府再征の師を防戦するの準備が急務であるから、諸隊の配付は斯様々々にするがいゝ。それから赤間關は斷然國體を辱しめないやうに開港しなければならぬ。總て天下の大事を爲さんとすれば、是非防長の腹を

五大洲へ推出して、大仕事をしなければ、大割據といふものは、出来るものでないといふことが書いてある。これが先生の素論であつて、防長へ割據して天下の大事をなさうといふのは、文久元年以來の宿望であるが、此の時、防長割據の形が出来たので、其の趣意を此處へ書いたのであらうと思ふ。此の手紙の末に、馬關の佐世氏より急用があるので、来て呉れといふことであるから、ちよつと其の方へ行くとあつて、外國行のことは一つも吐露してゐないのは、矢張り秘密にする必要があつたからである。

それから、先生は馬關へ出て、伊藤と同伴して長崎へ行つて、長崎にゐる英國商人のグラバといふ者に面會した。グラバは伊藤とは懇意の間柄であるから、洋行の志を打明けて、どうか船へ乗る心配をして呉れといふことを頼んだのであるが、其の時、横濱領事のラウダといふ人も来てゐたので、兩人が相談していふには、今英國の新駐日公使のパークスといふ人が来る途中であるが、此の人は中々のやり手であるから、これと相談して馬關を開港してはどうか、馬關を開港したならば、長州のために莫大の利益であると思ふ。貴君等の洋行は今は今時機ではない。それよりかお國へ引返して馬關開港のことを謀る方が得策であらうと、かう申したので、

先生も前に話した如く、やはり馬關開港の底意があつたので、如何にも御尤の論である。然らばパークス公使に贈るの書面を作らうといふので、ラウダに頼んで書面を認めてもらひ、伊藤がこれを見て、これでよろしいから、どうか此の書面をパークスが来た時に渡して呉れるやうにと申して、馬關へ引返された。馬關へ歸ると、其の時、應接掛として井上聞多、楊井謙藏やなむらが滞在してゐたので、此の兩人へ馬關開港のことを相談して見ると、兩人も無論賛成であつた。井上から内々政府へ相談して見ると、政府でもそれはよろしからうといふて同意した。それから先生と伊藤にも應接掛を命じて、馬關に駐在することにしたのであるが、いつとなく此の馬關開港のことが世間に漏れて、だんだん議論が起つた。といふのは、此の時はまだ、攘夷熱の餘炎も醒めぬ時であり、且つ伊藤井上などに對する藩士の感情も餘り面白くなかつた時であるから、非常に議論が起つた。全體馬關は長府の領地で、其の一部が清末の領地であるが、政府では外國人と和議して以來、應接事もあるので、馬關の土地を本家へ貰つて、其の代りとして別の土地を長府、清末へやらうといふ交渉を始めたが、馬關の地は長府、清末のためには寶庫であるから、これを取られては大變といふので、二藩がどうしても承諾しなかつた。其の所へ

今度馬關開港といふ風説があつたので、長府清末の二藩士は、これは畢竟、高杉、井上、伊藤等が開港論を立てるから、本家より替地論を持出すのであると誤解したと見えて、あの三人を打殺して仕舞はうといふ騒ぎが起つた。そこで、先生がいふに、實に分らぬ奴等で、かゝる頑陋輩の群中で我々の志を成すといふことは、甚だ難事である、暫く他國へ潜行して、天下の形勢を探り、時機を待つて盡す方がよろしいといふので、遂に脱走することになつた。其の時、井上は腹掛半天で人足姿になつて、豊後の別府へ行き、先生は馬關から大阪へ行かれた。それから、伊藤は對州へ行くといふのであつたが、長府の報國隊が頻りに狙つてゐて、伊藤を斬殺すといふものだから、遂に船問屋の伊勢屋といふ家へ潜伏してしまふた。

先生は、妾のおうの、後に梅處といつたが、これを連れて脱走し、大阪へ行かれたが、其の時大阪の町を徘徊して、心齋橋通の書林へ寄つて、こちらに徒然草があるかと聞かれた。すると書林の主人が船頭見たやうな風で、徒然草を尋ねるといふのは、面白い人だと思ひ、先生に向ひ、徒然草は無論ありますが、私の裏座敷に一人の御客様が居ります、此の人が中々書物を讀む人で面白い人でありませう、今は不在であるが、直ぐに歸つて來らるゝから、暫くお待ちなさい、

い、御照會しますといふ、先生は心に考ふる所があつたと見え、それはお目に掛りたいが、船に忘れ物をしたから取つて來るといふて、其處を立去られ、直ちに自分の船に乗組んで、讃岐へ渡られたさうであるが、此の書林の客といふのは幕府の偵察吏であつて、其の書林の主人が先生の風を恠み、偵吏に面會させて取押へようといふ積りであつたが、先生が早くも悟つて逃げられたのは、實に機敏である。それから讃岐へ行て日柳燕石を頼んで潜伏された。燕石は俠客であつたが立派な學問のある人で、又、勤王家であるから、其の人の世話で潜伏されたのであるが、後に幕府の偵察吏のために、あれは長州人だといふことを發見されて、捕へられる所を辛くも脱走して、其の難を免れた。此の時は殆ど危かつたのであるが、先生の機智で巧く其の厄を逃れた。これは五月中旬のことである。燕石はそれがために遂に幽囚の身となつた。斯様に先生と井上は脱走し、伊藤は船問屋へ潜伏してゐるところへ、桂小五郎が但馬から馬關へ歸つて來たが、高杉・井上・伊藤の三人が居らぬので、頻りに探索して見ると、伊藤の潜伏してゐることが分つた。そこで、伊藤に遇ふて様子を聞くと、かういふ次第であると話したので、桂はそれは甚だ怪しからぬことであるといふて、長府の家老に交渉して、誰がさうい